

# 口頭伝承

## はじめに

昭和三十三年以後続いている民俗調査の都度、すでに口頭伝承の調査は、手後れであるといわれつけ、思われつけで現在に至っている。たしかに手後れであろう。特に戦後の変革は、一切を忘却の彼方へ押し流したように見える。しかし古い間取りついで来た尊い遺産は、冷酷な時代の流れにも堪えて、今もなお私たちに語りかけていることは、数多くの収穫が示してくれる。

村主の清水その他の伝説は、その好例であろう。

昔話に、馬鹿聲の例が多いのは、たまたま話題に上ったからで、この地区に、馬鹿聲「多かつた」といってではない。  
おとか、きつね、むじなの話も多いが、これはやがて消えて行く運命で、自分のこととして語られる最後の機会のような気がしてならない。

(上野勇)

村主の清水 昔、村の百姓が赤城山に薪取りに出かけたが、毎日一枝の薪も取られず夕方になると帰ってきた。而もいつも酔っぱらっていて、家族がいくら聞いても笑っているばかり。更に真赤な顔からは酒のにおいが強く、やがて寝入ってしまった。次第にこの村から赤城に登つて行く者がみんなこうした状態になつた。元来酒の嫌いな者まで、口のきけ



村主の清水（泉沢）（池田秀夫 撮影）

ない程酔つて帰るようになつた。不思議に思った村人が、或日あとを行つたところ、薪取りの男達は、道傍の芝生の上に寝転んで、どこからか酒を一杯入れたカメを持ってきて飲み始めた。やがて又一人の男がカメを下げる。みると小川の測から流れ出る清水を汲んでくる。そこでその泉に降り手ですくって飲んでみると、齒にしみる程の冷い酒であった。薪取りがみんな酔つて帰るわけが判つた。後をつけた人は馬の糞を拾い、泉の出口に突込んで村に帰つた。

薪取りはその日も酒を腹一杯飲んで帰ろうと泉の処に来たが馬の糞が突込んでいたので、それを引出しで小川に捨て、カメ二汲んで来た。ところが今度は一向に酔わないで、ただ寒氣がするだけであった。それからにはこの清水に酒の味も香りもなくなつてしまつた

という。

なお昔ここには村主明神が祭つてあって、村人はこの泉を御神水といい、眼病その他に効き目があるとい

つてゐる。

スグロ スグロは村

主と書き、村主神社の名になつてゐるほか、寺や泉、沼の名にもなつてゐる。(泉沢)

村主の泉 昔、馬子

が山仕事に行く時、ここで休んでは、村の中に入つて村主の泉を飲んで酔っぱらつていた。不思議に思った妻が後を付けて来て、この泉から酒が出ていることを見付け、怒つて馬のくつを突つこんだ。そのため、酒が



村主（スグロ）の泉壠の上から泉が湧く。昔、酒だったという。(泉沢) (関口正己撮影)

で、本殿に雀がより付かないという。(下大屋)

しいらぎ薬師 大胡にしいらぎ薬師があり、そこに一寸八分の觀音様があつた。洪水で流されて東京まで行つた。その人が朝草刈りを行つた

らその草むらの中から出て來た。それを祀つたのが浅草の觀音様である。(西大室)

カンベ山 赤堀にカンベ山というところがある。昔、この娘が糸を

とつていたら、毎夜毎夜い衿をはいた若者が通つて来る。それと気づいた母親が質したところ、「毎晩くるんだが、どこの人だか知らない。あの人があると眠くなつてしまつて。」と答えた。「それでは、その人の衿の裾に、糸を通した針をさしておけ。」と教えた。その夜その通りにしておいた。翌朝、糸を頼りに行ってみると、うなり声としゃべる声が聞えた。それによると、「子種は残して来たからいいけれど、しようぶ酒も残して来てしまった。」という話であつた。そこで娘は帰つて来て、しようとぶ酒を飲むと、ツミザルに半分ぐらいヤマカガシの子が出て來た。それが磯の谷地の頭の赤いヤマカガシになつたのである。またこういうことから五月節供のしようぶ酒は、女の子にはくれるもんだ。そうすれば蛇にみこまれない。(西大室)

千手觀世音 赤堀南面に寄蹟の仏様が三つある。そして、前橋の上に

「うめ子様」、「二之宮に「べべがんのん」、それから赤堀の「きまら薬師」の三つの寄蹟の仏様があつた。

その中の、「二之宮の「べべがんのん」の話を、先祖の話でもつしてみたいと思う。

京都にある公家公家があつた。ところがその公家の娘で、ひとり娘で、かたいものは筆箸梳より外に持つたことがないという稚入娘があつた。ところがその家に、忠義無類の非常に温厚なきれいな男が仕えていた。ところがいつすんかに、隠れた行ないで、二人が恋仲に陥つて、ふんで公家様に見つかって、不義密通、お家法度だと、即時打ち首にするとか、お家追放だといふ、えらいお叱りを受けた。それでそいつを母

妻が死ぬといわれる。(泉沢)

産泰神社 産泰神社の本殿の彫物の鳩（タカ？）が左甚五郎の作なの

上お内儀さんが非常に悲しく思つて、そうしてその内儀がある僅かな路銀をくれて、あかずの門、裏木戸を開けて、ある夜、そつと逃がしてやつた。そうしたところが、楠箸よりかたいものは持つたことがないその娘が、脚絆手甲でもって、東海道を歩く江戸下りで、江戸へ行つて、江戸のおじの所を尋ねて、そしてその出家になつてもいいし、それから商人でもいいし、武家ならなおいが、一人が伴せに暮らせといふんで、二人が江戸へ行つた。

ところが、それが長の旅だからして、いやどうも、朝焼け、日焼け夕焼け、肌はただれる、股は股ずれ、毛は毛ずれ、わらじの足は紐ずれで、やつとのことで江戸へかけつけた。

そうしたところが江戸のおじが、いかにも身なりが違つたんで、会つてくれない。これではどうもおじにすがつて名医にかかるべし丈夫になろうと思つても、とうてい丈夫になれない。これは神信心より外に仕方がないというんで、それで坂東三十三番の觀世音を、出家になつて信仰した。そして、だんだん信仰して来て、上州は第十六番の水沢の觀世音へお願いして、それから今度は前橋のお渡橋を渡つて非常に赤城南面に觀世音様の多い所で、その觀世音を段々お参りをして、今井を通つて、二之宮の千足橋までやつて来た。ところが、その時に、「二之宮は千手觀世音が祀られて、大分脛やかだ」というんで、二之宮へ行つて、觀世音様を信仰して丈夫にならうといふんで、そうして二之宮の土地に来たところが、その茶屋で、千足橋の茶屋で腰を掛け、そうして草鞋を二野くれといふんで、橋の袂で売つてゐる爺やに話した。

それで、二人で京を出てから、一人は、千足だなどといった。そうしたところが、売る人が、今日はこれで千足売れ切れましたよつていうんで、あれが千足橋といふ橋の名となつたり地名になつた。

そこで草鞋をはき替えて、あの川筋を段々上へのはつたところが、今岡元衛門さんが家の西方あたりに觀橋といふ橋があつた。かじざがく

さいために、おそそをゆすいで、かじざをきれいになつて、なおも上へ行つて、手洗い橋といふんで、洗い橋でかじざを清めて、そして觀世音様の前へ出た。「二之宮神社の前へ出た。出たところがその二之宮神社の前というが、「二之宮山玉藏院惠德寺」という寺であつた。その玉藏院へ行って、そつて寺に置いてもらつて、真剣その觀世音様を信仰しようつて、二人が満願日の晩に、二院が置いてもらいたいといふんで、「二之宮山玉藏院惠德寺（おいとく寺）」となつた。そうして、そこで二七、二十一日の願力をかけて、「二之宮の千手觀世音へ真剣にお参りをした。お参りしたところが、どうもいくつもたつても觀世音様の効き目がない。それで、二人が満願日の晩に、これほど真剣に名仏信心しても、それでも効力がない。情ないといふで、真剣におがんだところが、それはどうも觀世音様の中が一遍に真っ暗になつて、そこへ千手觀世音が現われて、あこにはどうも恐ろしいと思って目を覚ましてみたら、一人が抱きついていた。そこで初めて二人で男女の味わいを再び味わうことができた。それがために「べべ觀世音」と、こういう。

そうして、その人達は、これじやよかつたとするから、先ず「こんなとこで静養して、これからその下野「いいづか觀世音」や、「たちき觀世音」をお参りして、再び江戸へ帰つて、一人で出家になつて、安泰に暮そうといふんで、「二人がそこのへ行こうとしたところが、自分の命をつめたから、その姫がなくなつちやつた。それで、これはどうも思つてできぬ、金をすこない、これでは早く觀世音参りを済まして、江戸へ帰つてこの京の姫をねんごろに介抱するといふんで、それについて玉藏院に置いてもらつたから、その惠德寺から歸口があつた。その歸口を分身して持ち帰らうと思つて、それで京都の姫の鎧の帯に歸口を引っ込んで、そつて背負つて一人が真剣に人に見つからぬよう夜中に出て、どんどん東を東へ行つた。そうしたところが今の桐生の阿佐見沼の所まで行つたら夜が明けた。これじやあ夜が明けるからして、咽喉もかわ

いたしするから、顔でも洗つたり、口でもぬすこうと思った。ところが、それを背負つたままに姫の帯と鰐口と、その男が沼の藻屑になつて、沼の中に入ってしまった。

そうしたところが、そいつが二之宮へ帰りたいといふんで、二之宮の人人が通るつたあ、沼でわんわんわん泣いた。「それ、二之宮の人人が通つたぞ、ほれ、こんどはまた通るぞ」というように、その沼の鰐口が泣くんで、これは阿佐見沼の七不思議の一になつてゐる。

そうしたところが、それから色恋の觀世音様で、必ずお参りに行くというと、その二人が色を楽しんで帰れると、それがためによく人が「べべ觀世音、べべ觀世音」と、そういうことを言う。

以上は二之宮町萩原在住の内田菊次さんの口述たものを、内田美智子さんが筆記したものである。(二之宮)

オクラ屋敷 中島彦一郎氏宅にかつた。箕井の上納米を保管しておく蔵で、前橋の殿様が作つてくれたものという。(箕井)  
靈影山屋敷 子供達が角力をやつた。どうして靈影山屋敷というか分らない。昔からそういうている。(小屋原)

天狗の腰かけ松 近戸神社にあつた黒松で一人でやつと抱ける位の太さだつた。上方で横に枝張りしていたので、天狗の腰かけ松と言われた。昭和二十九年に伐つた。(箕井)

くぐりまど 八幡様を先祖が鬼門除けに建てた。村人にお参りしてもらうため、藤づるでくぐりまどを作つておいた。今でもくぐりまど。と村人が呼んでゐる。(箕井)

ユニゴリ 楢久保に池があつてそのあたりをい。その池はもと湯が

出でたといふが、それがこつてしまつたのでそういう。そこで湯清寺ができる水は澄んだといふ。(西大室)

女塙 女性の天皇の時代に堀つたので女塙と名づけた。利根川の水流すことが目的で堀つた。(富田)

船渡の松 上大島に太い松があつてこう呼んだ。川に因んだ名前であるから昔は川があつたのだろうという。(小屋原)

賛し桜伝説 広瀬川の川端に大きな下がり松があつた。今は無い。

これが深いのろになつていて恐くて水浴びもできなかつた。その洞は竈宮まで続いていて、祝儀などで膳桶が必要な時に紙に書いてそこに置いておくと翌朝用意しておいてくれた。済んで返してこくと又貸してくれた。

或る時枕を傷つけたまま返したら、それ以後は貸してくれなくなつた。(下大島)

雷様の太鼓の棒 明治の初期、諏訪西の割畠といふ諏訪の原に、ゴロ様(雷様)の太鼓の棒が落ちているという連絡が役場に届いた。当時は役場が設けられた時で何んでも吏員が出現した。この知らせを聞いて早速吏員がかけつけ発見者の阿部重蔵さんを連れて現場に行つたがそれらしきものはなかつた。どんなものであつたか細かく聞くと「やわらかいような固いような太鼓の棒だつた」と確かに落ちていたが居ない中に取りに来んだろうということことで終つたが、村中のさわぎであつた。さわぎが大きいので役場でも吏員を出張させたとも言っていた。(荒口)

名主の家系 名主が、ある問題があつて坊さんを切つた。坊さんが袈裟を掛けるから待つて呉れというのを切つてしまつた。坊さんは袈裟を掛けと切れないとたたのんである。

そのため、名主の字の人は、贋の人が生まれる。また、贋の子がで

きたり、六本指の子が生まれた。(下大島)

増田に片葉のアシがある。(下大島)

トウカンヤを一日早く 水明地区の上長磯では、トウカンヤを一日早く

する。

昔、静御前が、九日の晩に米野街道に来たのでトウカンヤを一日早くして餅を食べさせたといふ。

閑という姓が多いのは、静を苗字にするのは畏れ多いので、字を改め

たのだという。(下大島)

赤堀道元の娘のはなし 昔から、十六才の娘は赤城山へ行くものではないといわれている。昔、赤堀道元の娘が十六年の年に赤城山の小沼に行つて大蛇になつたという。毎年、五月八日になると、道元の家から赤飯を重箱につめて、小沼へもつて行つて流すといつまにか、重箱が空になつて浮いてくるという。

この辺では、女の子が、立つていて髪の毛がかかとのところまであると、大蛇になるといわれている。これは、道元の娘の髪の毛が腰のほうまでさがつていて、まだたるんでいたからという。(二之宮)

十七才の娘 赤堀道元の十七才の娘が、赤城山へ登つて小沼に水飲みに行つて、すすつと水中に入つて大蛇になつたのでは、付いて行つた侍女がカエルになつたといふ伝説がある。そこで十七才の娘は赤城山へ登らない。



金のなる木の下にあった天神様（西大室）  
(都九十九一 撮影)

その娘が五日にお客に来て、昼寝をしている時、コケ（うろこ）を見た人がいるとか、赤堀家に娘の乗つたお籠籠があるとかいふ。最近まで五日は赤飯をもつて行つて、小沼に供えたが、満が卷いて沈み、重箱だけが浮いて来たという。小沼姓は三つ巴紋で、別に関係はない。

(泉沢)

赤堀家の娘は、越後から米た来つきの男と仲よくなつて、かけ落ちしてしまつたので、小沼の伝説になつたともいわれる。(泉沢)

金のなる木 大正五一年

のこの話 国学者

・医者・書家として  
知られた井上正香氏  
の孫娘に智恵連れの  
子があつた。



大前田英五郎寄進の灯籠。産  
奉道にあり、「田島屋英五」と  
刻んだ銘が削りとられたとい  
う。(下大屋)

(開口正巳 撮影)

人が大勢集まつた。話者の中にもそれをみた人がある。孫娘が縁側にいて、「ああおちそだ、おちそだ、落ちた。」といふと、カラントお金が落ちる。五銭とか一銭とかが多かつたといふ。これを拾つた人は、自分の持つて来たお金ととりかえ、持ち帰つたのである。警察官も調べて来たが、その時もお金が落ちたといふ。近くには、三文商ひまで出るしまつだつたが、しばらくしてそんな話を消えた。(西大室)

大前田英五郎 背のでつかい、目のぎょろっとしたひとで、よくあめを売りにきた。晩年がよくなくて、ながしまの家で面倒をみて遊んだ。子がなかつたので、養子を迎えた。英五郎の血をひいた者もある。(荒口)  
忠治の笠杉 諏訪の南、七四七番地、いどみずつ川の所にあつたしんとうがない笠形で、忠治が隠ねていたといふ。いまはない。(荒口)  
細野権八の碑 佐渡の国で大前田英五郎が越後の国へ渡ろうとして難儀していたとき、「二之宮の細野権八」という人が助けてやつたことがある。この恩義に報いるために大前田英五郎が二之宮赤城神社境内に、細野権八の石塔を建てたといわれる。(飯土井)

## 二、昔 話

すすめとばめ お祇迦さまが病氣になつて、その時に生き物に、お祇迦さまが病氣だからつて、ふれを廻したら、すすめははじめだから、

すぐ普段着のぼろのまま、駆けつけたんだつて。つばめはいくら病氣だつて、この仕度じやいかなつて、綿襪にお化粧したり、いい着物に着換えて、黒の紋つきで行つたから。こくが食べられない。虫けらしか与えられないで、すすめはね、こく食べられる。(二之宮)

ほととぎす 昔はほととぎすの兄弟があつた。弟がめくらであつたので、兄はいつも山芋を壠つて食べさせていた。弟は「兄さんは自分でいところべえたべて、おれにはアクビ(アズ)べえくれる」といつた。兄はそれではおれののどをさいてみよ、といったので、その通りにしてみると、兄の方からアクビへえ出で來た。そこでほととぎすは、オトコトイシャボットキタ

と、一日に八千八声鳴き、鳴いて血をはくんだという。

右は話された通りに記したが、普通この話は、兄の方がめくらで、弟が養つていたことになっている。(西大室)

天狗さま 赤城山へ、栗とりだか何だかに行つたら、日が暮れちゃつた。それでうちへ帰るが判らなくなつて、山だから、ホーイホーイ呼びつこしてゐるが、そのうちでいうばくちでもやつてゐる所へでつかした。天狗さまが出て来て、何かやるんで、婆さんと爺さんが、そこで、コケッコーといつたら、朝になつたつてえんで、みんな天狗さま逃げちやつた。寝言語りに、そんな話聞かされた。(二之宮)

馬鹿聲 婆さんが、実家へか何か、お客様に来て、うんとおいしいもの食べたんだつて。それがほた餅なんだつて。ほた餅ほた餅ほた餅つて、いつて来たんだけど、川どつこいしょって、飛んでもんだから、それがほた餅じやなく、ちかつちまつて、どつこいしょになつちやつて、それ

で今度うちへ行つて、どつこいしょこしらつてくれ。はじめどつこいしょでつて何だらう、どつこいしょって何だらうつていつたけれど、あんまり判らねえん、お婆さんを、はたいたか何かしたんだいね。そしたら、見ろ、ほた餅のようなこぶが出たつたら、そのほた餅だつていつた。(二之宮)

ばかむこの話 ばかむこのお客様に行つた。先でうまいものを御馳走になつたが、その名を知らないので、尋ねたところ、「これこれ」と教えてもらつた。帰る途中、小川をドッコイシヨとまたいだところ、その御馳走の名を忘れて、ドッコイシヨに変つてしまつた。帰宅して家人に「何を御馳走になつたか」と聞かれて、ドッコイシヨと答えた。隣の家の牛が死んだので挨拶に行かねばならないので、その口上を教えてもらつた。「牛がなくなったそつとんだことでした。しかし牛は肉がとれるからよかつた」といえと教えて挨拶した。別の隣の家のじいさんが死んだとき、そのばかむこは、やっぱり「肉がとれるからよかつた」と挨拶した。(西大室)

お嫁さんのうちへ、お客様に行つたら、ほた餅を作つてもらつて、うちへ重箱に入れてしょつて來た。そしたら、急いで歩いたので、中でばたるものあんこがすれて、中の御飯が出た。うちへ帰つて來たら、うちへ帰つて來るまでに、捨てて來たとかなんとか、ほた餅もつて來たんじやないんかつていうと、ほた餅もつて來たんだけど、途中まで來ると、白い歯出して、おれにかじりつきそうになつた。(二之宮)

一人婆さんが、暮しているところへ、馬鹿聲が来て、あたつていたところが、だんだんきんたまふくらまして、婆さんにおつかふせようとしたところが、婆さんが、あちい火をおつかけたら、キヤンキヤンつていつた。六弥太に一人婆さんがいて、そういうわざがあつた。(二之宮)

娘捨て山 六十か、六十五になると、娘捨て山に捨てたが、親孝行の子が、おとつあんを縁の下に隠しておいた。するとお祇迦さまが灰で繩をなえつていつたが、灰で繩はなえない。それでおとつあんに聞くと、

幕を固くなつて、それをお殿さまに出した。(二之宮)  
早足 前橋まで、一時間くらいで往復する。足が早くなければ、昔は親分になれない。扇を胸につけて、落ちない。東京へ日帰りした。(二之宮)

居眠り 胸形の方へ米つけていて、帰りにはまた買って来るが、ずっと居眠りして、馬に守つ子されながら帰つて来た。農業組合の会議に出るが、日がら一日居眠りしたが、その会議は、全部聞いた人が判らないで、居眠りしていた人が判る。芝居も居眠りしていくと判る。(二之宮)  
高坂仲重郎 高坂先生が水明学校へ行つてゐる頃、道歩きながら、提灯を肩にさして、その明りで本を読んだ。歩きながら讀んでいて、田園の中に入つて出られないことがあつた。虫でも、植物でも、知らねえものになかつた。道を歩いていて、あれは何だい、これは何だいと聞くと、みんな教えてくれた。カチーニシャの歌がはやつた頃で、歌うと、こらからとここといつた。(二之宮)

### 三、怪 異

オトウカ

オトウカは狐より大きいもので赤い色の毛をしていた。現在の今井神社と北向の厄除觀音堂のところがオトウカの巣だった。明治の初めに、そこで、夜かけごとをし、堂の下に大きな木まで行つて来る事だが、オトウカが群をしており、じやまをして歩くことが出来なかつた。当時はやぶでもあつたのでよく歩けなかつた。(今井)

駒形や前橋では、板約一本でも、みんな買ひに行つたんだよね。さまざまに買ひに行き、柄杓も買つて来たんだつて。それを、こう上に挿して、しょって、やつぱり日が短いもんだから、夜になつてうちへ行くんに、ふりかえつて見ると、自分の背中に、おとかがおぶつあつてるんだつてさ。自分の近所のかどまで来たら、急いでうちへ飛びこもうと思つて、おかねえから、背中をふり返つてみても、おぶつつあつてい

るようないるんだつて。これじやしようがねえから、ぐぐりをがらつて開けて、かけり込もうとしたら、どうしてもくびが、おとかのくびがつかえて入れねえんだつて、うちへ帰つて来たんだから、力まかせに、クイーンつて入つたんだつて。そうしたら、柄杓のくびがクイーンつてもげた。それでようようおとかが降りたと思つたら、柄杓のくびおつかいだ。(二之宮)

わしながら少しあいに、ガシヤガシヤ取りに、五六人で行つた。みんなして提灯つけて行つた。ちょうどふな休みだつたんで、子守りをして天にさして、その明りで本を読んだ。歩きながら讀んでいて、田園の山へ行つた。今は県道になつてあるが、ずうつとその山は山だつた。その山へ行つた。そうしたたが、その時はから身で、女壇にこんこんさまが出るつて、今は県道になつてあるが、ずうつとその山は山だつた。その山へ行つた。そうしたらどうしたんだか、おとかに化かされて、女壇渡らなきやいいのに、それ渡つちやつた。北へ行けば、家へきらると思つたのに、南へ渡つちやつた。

そこで車があるでしょ、水車の音がしたんで、天神車の音だと思って、あの車の音をたよつて行けば、うちはそれより西行けばいい。そしたらはしいの方へ行つた。五人だから、全部迷つてしまつた。蠟燭の火が絶えてしまいそうになつた。一つの提灯でね蠟燭一本、そうしたら、うちの方ではガシヤガシヤ取りに、ホーホーイしてなんだつてさ。わしはらしいの宿はてのほう行つちやつて、宿はてのはしいの車を、宮がいとの車の音を、天神車の音だと思って、それをたよりに行つた後、道へ出た。この道行けば、うちへ行けるんだつて、やたら南へ行つたら、そしたら提灯つけた自転車で来た人が、おめたちどこだ、おれたちは荒子だよつていつたら、あにこんした方へ来た、ガシヤガシヤ取りに来て、こんな方來ちやつた、こにははしいだぜ。じやおら大室なんだけど、荒子ならすぐ隣り村なんだ。大室なら親類があるつて、わしたしがいつたら、そりやどこんちだ。田中和十郎さんちが親戚だつていつたら、おらそんちのすぐ隣りだ。農業組合長した田中つとむさん、そのおとつあん、あの人人が連れて来てくれた。大室の

うちへ来て、拾い子をして来たつて、夕食へねえだらう、それじやちょ

うどお菴が休みなので、ふかし鏡頭を子どもにくれて、あにさんが送つて來た。そうしたら、みんなが探して、ホーイホーイつう声が聞えて来るだいね。そうしたらあにさんが、ホーイ子どもがいた、子どもがいたつて。どうして、ああ迷つちまうんだろうね。九つぐらいの時だ。

組中の騒ぎだつた。女嫁渡らなければよかつた。(二之宮)

アブラヤに頼まれたので前橋でカツオブシを買って帰り道、今井の墓地のところで墓場の石が、オトウカに似ていたので「あれ、おかしいぞ」と思つて墓石をなせてみたところ、そのときにふと「ろ」の中に入れておいたカツオブシをとらってしまった。(新井)

とうかの嫁どり、とうかの嫁どりがあるから、来てみろっていうから出てみたら、うちは線路がすぐそばにあるから、線路を提灯が上つたり下つたり、ぞろぞろ通る。ガヤガヤガヤガヤ。そうかと思うと、その提灯が、バツと消える。ほんまたくそつて、いって見ているとね、それがまたついた。これがほんとのおとかの嫁どりだつて、しばらく見てた。

小雨の降る晩だつた。(二之宮)

オトウカ山又はイナリ山といわれる山に火の玉が沢山見えるときのことを「オトウカの嫁取り」と言つた。オトウカ山のあるところでは、十日夜はやらないで、九日夜に餅ついてお祭りをする。(今井)

モグラップサギの晩、ダント下にいた。ちょうど小雨の降るような晩だつた。提燈がボンボンボンと闇の中で消えていった。こういう時には、オトウカが足元にいると言われてゐるので、あわてて逃げかえつた。(泉沢)

権現塚に杉の大木があり、そのうちに狐の巣があり、又、女星の万福寺のうちに杉の大木があり、両所の猿が互に嫁をもらつたり、くれたりしていた。その嫁取りの夜は孤かにぎやかで、丑の刻に行なわれた。そのようすは、ちょうちんをつけて列び、長持の音がしたり、空が明るく見えたりするが音をたてたり、見物人がさわぐと全然見えなくなつた。

#### (荒口)

オトカツビ 今の広瀬団地のあたりの領家に出た。夕方になると十も二十も並んでいた。オトカの嫁入り、嫁どりという。(下大島)

牡丹餅をしようつて歩いていると、筑井の中学校のあたりで、女に出会つた。それから道が分らす田圃の中を歩いて目的地にいけなかつた。狐に化かされたのだ。

萩原琢磨さんは、若い時、夜遊びいき、稲荷山のリヨウで狐に化された。「晩中ぐるぐる回つていた。機を織つてゐる人がいたので、聞いた。そこで目がさめた。

狐の嫁入りは、脛やかで、燈籠がいっぱい。後閑山(今は団地)で見たことがある。(下大島)

狐の人まね かど屋の阿部さわさんが若い頃、縫縫を習いに師匠のところに行つていたが正月近く忙しいので夜中まで習い、丑の刻になつてしまつた。その時、さわさんの仲良しの友だちのちよさんの声で目をたたいて「さわさん、さわさん」と呼ぶので問い合わせ返したが返事がなく、狐の仕業とわかった。狐はまねはするが、返事は出来ない。(荒口)

狐つき 権現様には狐がたくさん住んでいた。あるばあさんに狐がついていたのがたつて油揚げをつけて送り出しながら、離れないで鉄砲で打つてくれといふことで、弥重郎さんがたのまれて、病人の寝てゐる床下に、「三発打ち込んだところ、病人が大声で『弥重鐵砲、くそ鐵砲』と悪口を言つた。見ないで鉄砲を打つた人の名前をあつてのだから確かに狐がついていたことがはつきりわかつた」という話があつた。(荒口)

赤堀の大連様にコワメシとアブランゲを供えるとキツネが離れる。(小屋裏の切りで十日も食事をしない病人が、急にメシを食べ出して大声を出したりする。アブランゲを重箱に入れておくと全部食べてしまつた。後で見たら床下に毛が一杯あつた。

現在の広瀬団地に、いいだまま、又はえだままといわれる神様

原

が祭られていたが、そこに狐がおり、かまつたりするとすぐついてきた。悪いことをした話はない。(富田)

ある家のオトウカを飼っていたことがある。えさにフスマをかいてくれたが、このオトウカがウスイの人についてしまったといい、オトウカツキになつた人が「野郎オレを可愛がつてくれるが、フスマベえ(ばかり)かいてくれるのでかなわねえ」といつたので、新井で飼っていたオトウカがついたとわかつたという。シナヤンという人の子どもにシンヤンという人がいたが、シンヤンの目の悪いのはキツネツキのせいだろう、というので、トンガラシを多量に集めて、家をしめきりにしてやつたりしたために本もの盲人になってしまった。くしゃみが出ても、せきが出ても、泣いてもかまわずにいぶしたのだという。(新井)

むじな 秋お祭りを食べてから、稻刈りに行くと、土手のあつたかい所に、日向ぼっこして、むじなが昼寝していた。よせはかったものを、昼寝をしてるのを、ひげを鎌で刈つたんだって、むじなはたまげて、キヤーで稻刈りして、は一行くべや、こんなに遅くなつたし、腹もへつたし、帰ろうとしたが、いくら歩いても、うちへ帰れねえんだって、それで弱つたなあ、弱つたなあ、おつかあは、お夕飯すんだから先へあがれやつて、おとつづあん一人なんだつて。うちへいげねえで、道がどういうだが、川になつちやつて、川の中、ガホガホ、ガホガホ、どうしてこの道は、水があるんだんべえ、大水が出たんだって。するに向うから、おとむらいが来る。弱つたなあ、向うから葬式が来て、いやになつちやつた、田圃げえりで、葬式に行き合つなんて。白むく来た人がドコドコ提灯さげて来る。この道行けば、葬式に行き合つちやう。弱つたな、こんなところに木があつたかな、お葬式通り過ぎさせようと思って、木に登つてたんだつて。すると、こちらでよかんべつて、登つてて木と根つこのところに、穴を掘つて、いけて、おおくいやなんて、木から、ふるいおつちや

たんだつて。ふるいおつちや、腰を打つて動けないで、そのうち誰かが見つけたんだらうね。屋根屋さんが聞かせてくれた。(二之宮)

体が弱くなり寝ていたがむじながついたらしいというので嫁に向つて、「いつついた」と問うと「おれは壇下のお寺のそばの山からついでこからついてきたと問うと「おれがつばめを追つていてる」といやまをしたからついた」といい返すと「おれがつばめを追つていてる」といわされた。変つたことを言い、何んでも食べ、生れた赤子には乳はのませた。これを落すのに三峯様(秋父)に行つてお願いし、夜歸歩いて来てお仮屋を作り毎日おがんでいたらだんだん落ちるようになつた。又村の神社へは丑の刻にお参りしたが落ちる時は、この神社に眼の光るもののが現れ、それからは治つた。

その間、この娘は寝ていて「今日は、親戚の〇〇が赤飯を持って来る」というときまでその通りであった。(富田)

女壇の小屋の墓場にむじなが住んでいた。伝吉さんがむじなつきになり、近所の人たちが、伝吉さんを連れて、そのむじなをつかまえに行つた。最初土穴を掘つたらいいのでよく調べると土穴の中に二階を作つてかくれていた。それをつかまえ、伝吉さんを木につるしておいて、そのむじなの背中に「犬」という字を書き、四つ足をしばり、尻の肉を切り取つて、木につるされたままの伝吉さんに生の肉をむりに食べさせたところ「これは自分の娘(むじな)の肉だ、こんなにつらいことはない」といい声を出して泣きながら肉を食べさせられた。その後は治つた。つきものがあつた人をためには、ろうそくの火を眼にあてて見て、ひとみがなければつかれた証拠である。(今井)

光りもの 子どもの頃、この西の方に桑原があつた。高等一年の時だつた。守つ子で、月夜の晩に、きわ切りに出た。お寺の墓場から、サーサーつて、光つたものが出て、門のこっちに来たように見えた。(二之宮)

うなる。毎年春と秋に鳴る。隣だから夜汲みに出るのがこわい。お姑さんにいうと、こりやまたじゅんてんさまが鳴き始めた。いやだねえ、じゅんてんさまの櫻が鳴くんだって、櫻ていわれたらなおいやになつちやつた。「八年に切つた」いろいろてんごうやつてみた。石を投げるよと、からなず鳥が飛び出す。鳥が夜来て、あんなところで鳴くんが、木にひびいて、それが秋と春にきまっている。木こりが切つたら、春は水上げるんで音がした。秋は水下げるんで音がした。大きい木で、穴になつていて、ひびいて音がした。木こりが切つて始めて判つた。春と秋と、かならず鳴いた。耳をおつけると、カンカンといつてた。遠くの方まで聞える。月夜の寒い晩なんかに鳴く。

大人が七人で、かかえる。神社が傷んで来たから、それを基本に建てかえべえという」となつて、二月一八日にきまつて、のこすり始めで、二か月かかった。切る人がターザンぱりだね。はしご一つかけるんじやねえ。みんな枝をおろしちゃつた。木こりは三重県の方から來た。いくらあんたがたもうだつていつたら、その當時で、一日一五〇円もらつていた。大きな古物べえ切つて歩くんだ。腐つてなくていい木だつた。しが四つあるんが、一つもちに一緒になつた。きたいだなつて

いついた。つぎめは見えなかつたが切つたら、しが四つ出た。切り口歩いてみたら、大人が一〇幾足あった。昔何かのいわれで植えたんじやないか。伊勢崎・大胡街道の道のはた、道から二間ぐらひ入つたところにある。七百年ぐらいたつていてるじやないかつて、木こりがいつた。

### (二) 宮

「あの世」の夢 十年ほど前のこと、吾妻にいる子どものところへ行つて病氣になり、苦しんだ末に手術をした晩、先に死んだ人たちがみんな次々にあらわれて来て、「こっちへ来いや、寒くもねえ暑くもねえ、とてもいいところだよ」というので湯のみを突き出して誘われた。しまいには手をひっぱるようになつたが、そんなところへ変な人が一人出て来て、「バカめ、その者は入場券を持っていねえからだめだ」と叱りつけられ

たらそれで友だちの姿は消えて、目がさめた。付き添いで来ていた女の子(娘)に「じいさんどうしたい、すいぶんくるつたようにしていたが」といわれたが、あのまま友だちの所へ行けばあの世とかいうところへ行つたのだろう。(新井)

### 妖怪 加藤

加藤という人と二人で馬を曳いて歩いていたときのこと、ローソクをふろしきに入れて首に巻いていて、今井の神社の西、小島田の十字路のところの墓場までやつて来たとき、足下に大ころのような小さなものが来て歩けなくなつて困つたので、「オイ歩けねえや」といつたら、加藤という人は「けつとばしらやえ」といわれたが、そんなことをいつたとたんにふうっと眠くなつてしまい、気がついたら首に巻いていたふろしきの中のローソクをとられてしまった。(新井)

### 四、命 名

享保期の地名 享保十二年の検地帳に見える地名は、現在まで沿どがそのまま使用されている。長谷戸、窪戸、というよつたなカイト、石神井、打越などが興味ある地名である。

### 並場、西原、西久保のいど

(今はにじいどといふ)、堀合、道塚、前原、あたご、鎌原(かまはら)、窪塚、打越(うちこし)、向原(むこう)という。中新田、下橋、下新田、長谷戸、長戸前窪戸(今不明)、前田、雨屋敷、東屋敷、松島、石神井(シャゲジシがつた)、音ノ沢、道種神(今はドウソジンといふ)、天神、兵通(ヒヨウドウ堀がある)、石橋、谷中、五反田、東田、前原、河岸屋敷(河岸といふ)、下橋、三百瀬、萩原、西橋下(シタといふ)、沼端(ぬまば)、橋荷橋、諏訪前、このこうべ(こうべといふ)、橋越、しみつ田(今不明)、しほ井戸(し

ぶいどという。水が吹き出しじくじくしていた) (小屋原)

小屋原という地名 年寄りから聞いた話である。

この辺には古利根が流れていた。魚取りの梁を掛けるため、小屋掛けをしたので名が付いたといふ。(小屋原)

箕井という地名 利根の本流と分れてウチボリが出来、そのウチボリが此つてウツボイとなつたといふ説と、源平以前の落人が、竹の丸いうつばを背負ってきて、戦いが終わつた後、うつばが落ちてゐたのでウツボイとなつたといふ説がある。(箕井)

上増田の小字名 櫻町耕地、越殿、八反田、欠葉師、前屋敷、天神内野、篠場、音根沢、諏訪、久保、天上堰、藤の木、鯨田、内野、島、大塚田、宮原、宮下、地蔵堂、三ツ口、西原、田村屋敷、三本松、弥勒、百々、中原、東組。このうち現在住居のある所は島(島組)、大塚田(大塚田組)、宮原(宮原組)、宮下(宮下組)、東組の五小字である。(上増田)

下増田の小字名 上越渡、越渡、櫻町、島、常木、中屋敷、奥原、奥原前、奥原東、古戸、篠場、須永西、須永、明屋敷、須永東、百々、北阿久津、天神、北阿久津東、中阿久津、向川、大前保、須永前、前阿久津、萩林、庚塚、下、原(比丘尼台)、宇貴。このうち現在住居のある所は島、中屋敷、奥原、須永、北阿久津、中阿久津、前阿久津、原の八小字である。(下増田)

シンチ大島 天川大島のこと。新しくできた村で、各地から人が入つた。駒形のことは駒形新田といふ。

クルワは原のクルワだけに使う。一画という意味であるが、他には使わない。(下大島)

荒口という地名 荒口の地名は、「荒田口」といってころから「荒口」に変わつた。荒砥川も「荒口川」であった。(荒口) 家の呼び名、油屋(以前、油を搾つた)、膏薬屋(他県まで、出来物の

糞を売りにいった。)

本家、新宅、隠居んち、長屋門。(小屋原)

大塚田組 三三姓。大山(5)、岡田(10)、木村(9)、田島(5)、齊田(4)、細野(3)、矢島(3)、中村(2)、尾田(2)、神保、神林、新井、小暮、鈴木、渡辺、久保原、河原田、二瓶、大坪、南雲、永、北爪、大矢、奈良、石綿、高柳、小林、片貝、津田、関口、佐竹、山宮は各(1)であり、大山、岡田、木村の三姓が古い。

島組 一二姓。高山(4)、関口(4)、山宮(3)、古沢、南沢、齊藤、山田、吉原、齊田、井野、大山、奈良は各(1)であり、高山、関口姓が古い。

宮下組 八姓。奈良(7)、生形(2)、岡田(2)、井上(2)、宮下、飯野、筑井、下山は各(1)であり、奈良、生形姓が古い。

東組 九姓。薗(5)、氣井(5)、北爪(5)、福田(3)、井上(2)、吉田(2)、南沢、久川、鷹巣は各(1)であり、薗、吉田姓が古い。

上増田の家族數別世帯數

一人家族六世帯、二人家族九世帯、三人家族一九世帯、四人家族五〇世帯、五人家族四一世帯、六人家族三七世帯、七人家族二一世帯、八人家族八世帯、九人家族一世帯

四人から六人家族の世帯が大半をしめている。上増田は城南地区で一番敬老者(七〇才以上)の多い所だといふ。(昭48・11・1現在の住民実態調査によつた) (上増田)

下増田の家族數別世帯數

一人家族八世帯、二人家族一二世帯、三人家族二六世帯、四人家族三八世帯、五人家族五八世帯、六人家族四〇世帯、七人家族一七世帯、八人家族四世帯(昭48・11・1現在の住民実態調査によつた) (下増田)

下山美人 上増田に下山姓は宮原に七四世帯宮下に一世帯ある。(下山)

には美人が多いのでその娘たちを「下山美人」と呼んでいる。(上増田)

阿久津・奥原七騎 細野、安田、田村、千本木、板垣、小林、梅沢の

七姓で、生え抜きだという。(下増田)

須永五騎 柴崎、新井、渡辺、山田、須永の五姓で、守護神の若宮八

幡は先祖をまつたのだという。(下増田)

命名 弥の字を好んでつける家がある。弥市・弥文治・弥苗・弥寿

美・弥寿久・弥寿政・弥寿宏・弥寿志など。(二之宮)

丈夫に育つよう女でも男のような名をつけることがある。辰男・古

登など。兵隊検査の通知が来たので、びっくりした。(二之宮)

あだ名 おいらん……さん 子どもが九人くらいあっても、髪出して

綺麗にしていた。おしゃれこ……さん、いねむり……さん。馬に乗って

も、いねむりしている。馬は知っていて、家に帰る。(二之宮)

櫻の木デーイン 大きな櫻の木で、赤城山からよく見えた。羽鳥氏の

大もと(大本家)にあり、その家がこう呼ばれた。今は枯れてしまった。

(筑井)

タミコン 民さんという人が、神沢の下の水車の近くの畠へタメ(下

肥)を狙いで行つたところオトウカが眠っていたので、オトウカをたた

けばいいものを、すぐそばのどちらべた(地面)を天びん棒でたたいたものだからオトウカが怒つてばかりてしまい、ジャパンボンのジャラジャラをやつたために逃げられず、あちこちぐるぐるやら

されていて、ウスイの人が通りがかるまでそんなことていた。「タミサン

どうしたい」と声をかけられて気がついた時には、土手がすりへつていい

たという。その後も夜になるとオトウカがやつて来てトントンと戸をたたくのでこりたという。こんなことからタミコンといわれた。(新井)

朝晚の挨拶 オハヨウゴザイマス。オバンデガス。(小屋原)

カマギツチヨトトカゲ 色の黒いのをカマギツチヨという。柴色をし

たのをトカゲという。(小屋原)

カマキリのことをハイトリババアという。頭をすりつぶすと、ハレモノ

ノニ効く、トゲも抜ける。(下大島)

カマキリのことはエトリババアという。殺して腹から虫を出した。

師走女にや角が出るあまり忙がしいのでいう。(筑井・二之宮)

こぬか三升もたらむには行くな

ものぐさものの節供ばたらき

からつ茶は麦拂打よりつらい

今のはゆうとは川の中の川流れ

松原ビックに磯ゴケゾン

(赤堀・西大室)

## 六、謎

なぞ 「燒もち」とかけて「大神樂」ととく。その心は「吹いたり、

たたいたりする。(富田)

朝早く起きて、細い道通るものなあに 戸。赤いよだれかけかけて、

くねくぐるものなあに にわとり。(二之宮)

なぞがとけない時は、ながして聞きましようという。その時は、題を

出した人が答をいう。(二之宮)

こぜんの時、お坐りしないで足を出し、こぜんがすむと、お坐りする

ものなあに

ちやぶだい。(ちやぶだいが、はやつた時分のもの)(二之宮)

## 七、方言 その他

(小屋原)

カマキリのことを「一トリババア、やせている人を一トリババア」という。(下大屋)

ベベズキンカブル カカアデンカという程度でないが、妻が意見するところに従うのをいう。オッカアセントラレテイルともいう。女房の尻にしかれている男をニホンボーともいう母ちゃん絶対、というのがカカアデンカである。(下大屋)

忌調 養蚕中は、ねずみというと聞えるから、おばあさんが来るから

氣をつけるとか、よめこという。(二之宮)

酒落 ネこのきんたまで一つかの後金(あときん)。ねずみ一匹く  
んねえかいちゅう(燒酎)一杯。にわとりの声とと、もうけつこ。  
十五日の粥で、もちあげえた。熱くても吹いて食うわけにいかない。

吹くと田植えの時に風が吹く。(二之宮)

鳥の鳴き声 ホオジロ、ツツペニチロク、ニシマケタ、ホトトギス

ボトツッキッタ(小屋原)

屁の意 あぶのさわたり、はしごべ。(二之宮)

横サンジョウ おサンジョウ様(星)が上がるまで仕事をした。二夜様、  
三夜様があがるまで夜宿仕事をするのでこういう。(筑井)  
オサンジョウ様が十一時過ぎになると西の方に引っ込む。それまでは毎  
晩仕事をした。(小屋原)(下大島)

ミカボの三東雨 南の方ミカボの方から来る夕立は「ミカボの三東雨」  
といわれるほど早くて激しかった。ところが高圧線が近くを通るようになつてから雷が来なくなつた。(新井)

ミカボから出て来る雷は三東雨といわれて急に、しかも激しく降つた。  
ある時、メシをとられたので、それ以後は降らなくなつてしまつた。(飯  
土井)

みかば山のほうに夕立がはじまるとき、ムギを三東まるかないうちにも雨  
が降つてくるという。そのため、黒い雲がでてくるし、家へにげかえつ

た。これをみかばの三東雨といった。

みかば山の主はがまがえるで、天降りの神様という。これは年寄りの  
はなしが、みかばの山へ木をきりに行つたきこりが、山小屋へ泊つて  
いたら、毎夜山のぬしが娘になつてあらわれてきた。ある勇敢なきこり  
が、その娘を、まさかりでうち殺した。その後は、みかばの三東雨がな  
くなつたということである。(二之宮)

方言

ケブル 種まきなどで足で土をかけること。

マネヲヒク ケアツタ(足で土をかけた)上に足でサクをつくること  
マネヒキ 犬の一種、柄と直角に刃をつけた重い鎌で、サクタテに使う。  
アブノメダマ 五十銭銀貨のこと、ひかつてることからついた名前  
オワリマケ しまい貧乏

ツブシ 順送り

シンコ 新しく出た竹、新竹

シヨツベナシ がまんのきかないだらしない人のこと

カブツ 株、麦や稻などの切り株

トコロビンボウ 土地の条件が悪いことから經營が苦しいことをいう。

マメボウチ 大豆などの豆類の脱穀

ケエコガミサマ 薩摩様、細笠様のこと

オメン うどん

カワラチゴ おきなくさ

ジダンバニユウ 馬入れ道のない田畠

カワラチゴ おきなくさ

ジダンバニユウ 馬入れ道のない田畠

チヨウバコワタシ 二月一日の区長の引き継ぎ

ハントウ 班長

シヨウガのセツク 八朔の節句のこと

ミチケズリ 村の共同作業で道路修理

ホリハイ 用水路の草刈り、底さい。

バンミズ 田の水を当番の日をきめて入れること（荒子）  
くわがたの名称

ブウ 雄のこと、ブウメスともいう。

キンメス 雄の中でも金色の毛が生えているものをいう。

ズリ ふつうノコギリとよばれているくわがたのこと。

キントキ のこぎりくわがたのこと。

クマガイ おおくわがた

ナタ おおくわがた

武田信玄 おおくわがた

メスカブ かぶとむしの雌

オスカブ かぶとむしの雄

かぶとむしの幼虫はコヤシムシといわれる。（荒子）

キナル はりあいが悪い。

ニハングケ ふたまたをかける。（筋道）

ヒノヤガトオイ 砂糖を節約して甘味が薄いことをいう。ヒノヤノ前ヲ

素通りシタともいう。（飯土井）

ツボシ 每年のこと。

カンカンガデル ばかりで重さをはかったとき重量のあること。

ダラニ いつとはなしにつづくこと。

イチガサケモツ 物事の終りのこと。

デレスケ 馬鹿な人のこと。のろま。

オチヤコ お茶をのむこと。

○○ヤン 呼称で、さん、君などと同じ。

アギ 馬などのあこのこと。

イキレル むしあつい。

イスカニ たいへん。

カタバリカ 頑固のこと。

アゲレヤア のせること。

ヤベヤ 連れて行くこと。

キエモン 役に立つ人のこと。

ノオナシ 役に立たない者。

ハカラセタ 他人にだまされたこと。（今井）

ヒイボリ 田に水を引くとき冷水を防ぐために作った小さい土手、なか

グロともいう。

ザハイ 結婚式の時の進行係のこと。「座配」という。

オオナ 田畠の土手のこと。

バニウ 煙と畠の境の巾六尺の道。「馬入」。

ウンマエ 馬を借りた場お返しに行くこと。

ケヂ 人が着るみのこと。

コウバシイ 焚もち独特のにおい。

ユヅラ 稲わらの先を結んだもの。（荒口）

## 芸能

### 一、城南地区演劇関係芸能の概観



二之宮赤城神社境内の歌舞伎舞台と神楽殿の配置を示す

この地区を群馬県の芸能からみた場合にいくつかの特色があげられる。その一つは、中世から近世初期にかけて、神事芸能として盛んに行われた能狂言の舞が県下でただ一ヵ所この地区に遺っているということである。人形操によるものがすぐ近くの前橋市下長崎にあるが、二之宮地区の人によつて演じられる式三番はまことに貴重な无形文化財であるといつてよい。なぜここにだけ生き残えたかであるが、一つの条件として少くとも明治以降鉄道が通過せず、比較的文化の波に洗われなかつたことがあげられる。一たん中絶したことあつたがみこと復活したのは、この土地の人びとの高い文化意識もあすかつて大きいとみてよい。神樂では、神社信仰と

太々講という民間の信仰形態の上に立つて榛名神社と並んで有名であつた産奉神社の太々神樂を数年研究する上に多くの問題を示唆している。

地芝居の面では、本県の常設農村歌舞伎舞台の南限を示す建築物が二つも現在してい、舞台という地名と実存の舞台の分布を知る上有力な傍証となる。人形芝居では阿波国から直接移されたといふ系統のはつきりしているものがあり、これもまた阿波の「箱廻し」の研究の上に重要なである。獅子舞における一人立ちの神樂獅子は、祭典とは別に民間年中行事として遺されている悪魔払いの二人立獅子が祭りと結ばれ、神社に付属している点に興味が持たれる。

とにかく、城南地区における芸能は県下の他の地区的芸能を説くいくつかの標準といふか提点になるものが多い点に注目される。今回の調査報告は比較検討し、一つの論議を導き出すことが目的ではないので、なるべく調査したままの概説にとどめるが、今後芸能を究明する上に多くの話題を抱えていることは確かである。(萩原進)

### 二、二之宮の式三番

各称 二之宮式三番

所在 前橋市二之宮町赤城神社氏子による二之宮式三番保存会

由来・伝承 中世芸能としての武三番であるがその初めは明らかでない。資料の中に万延元年の三番の舞い方を図示したものがあるから江戸時代末期には確かに行われていたが、しかしそれにしては時代が下がりすぎるのもと古い時代から行われていたはずであるが確証がない。



「式三番伝番授之卷」

幸い、宝暦十二年八月吉祥の日付のある「当社御祭札無尽帳」(一冊)が遺されている。神主の六谷田潜岐守の名が表紙にあるから二之宮赤城神社の六谷田(別に六姓太)神主の手によって記録されたものであることがわかる。その頃二之宮の上と下で毎年交代で狂言(式三番のことであろう)を祭礼のとき上演していたが、その費用として頼母子講をえて、その無尽の十七両の利子で狂言を承継してゆきたいという趣旨が書かれ、これを「祭札無尽」と称したことも明らかである。

この無尽に賛成した者一七六名(追加一名)で、触元は村役の組頭六人と名主になっている。いまその趣旨の前文を掲げて置くことにする。

宝暦十二年三月、六谷田潜岐守金所無尽取立金高拾七両也當社御祭礼每年八月十五日御座候。上下隔年に狂言御座候。是仍右之無尽之相加り、頼母子相済候後右拾七両の利足を以、永代狂言相続致候様に仕度、拙者ドモ相の上如斯帳面記置者也。

申候。為念如件。

一、狂言興行世話の儀、其年の相談の上肝煎可相定、尤祭礼本金世話も末々寄合の上相定可申有也。

一、比度祭礼無尽の取立申候節の著報の通り帳面に相改、家名共に相印申候。為念如件。

世話人時役(組頭六名)

名主

とある。この資料からみると、二之宮の式三番は宝暦以前から上組下組

交代で八月十五日にやっていたことがわかる。すると、少くも宝暦間にはかなり盛大に行われていたと見てよい。當時から組持の資金には困っていたのである。ちょうど神主の家の事務所(会所)で無尽(頼母子講)が行われ、その取立金が十七両あつた。この無尽に式三番の運営をからませ、十七両の利子で永代式三番が相続するようにしたことがわかる。祭の費用全体の中で附うのでなく、特別規定した資金を役定したものと考えられる。

このように、武三番は赤城神社に付属し上演されているので神社の神事芸能として行われてきたと考えられていたが、以前は結婚式とか家の事代までのときなどの慶事の際に招かれて演出したそうである。式三番の発生から考へると祭典の余興の行事ではなく、年に一度穀豊饒、天下太平を祈念して行われた独立の神事芸能であったはずであるからこの伝承は重要である。しかし、現在で承継しているものではなく、しばしば中絶していることがわかった。江戸時代のことは不明であるが、明治になると文明開化、御一新の時代の流れで中絶したらしい。そのままにしておけば姿を消していた。明治二十六年に心ある人びとによって再興が企てられたときの記録があるのでこのとき先ず復活したことがわかる。「明治二十六年三月吉日式三番」という記録である。

二ノ宮村式三番は往古より有之矣、中絶シテ既ニ絶種スルノ時節ニ至、依テ村落萬寄之者再起シ、青年者へ伝授スルニ付左二人名ヲ記。

明治廿六年三月

青年者

岡 多

内 田 長 吉

内 田 佐 十

内 田 勝 藏

田 中 友 助

中 村 猪 吉

内 田 錦 三 郎

下 境 安 太 郎

下 境 安 太 郎

田 所 周 吉

内 田 久 保 田 喜 八

内 田 牧 太

宗 丁

翁	下境	安次郎	翁	下境	高藏	岡	重次郎	翁	内田	友助	千歳	下境	安次郎				
三番	岡	太牧	三番	岡	内田	宗十	三番	内田	宗十	中村	佐十郎	太鼓	岡	滝右衛門			
留	久保田	半藏	留	久保田	半藏	内田	源太郎	笛	久保田	半藏	小鼓	久保田	庄太郎	笛	下境	市郎次	
小鼓	下境	市郎次	小鼓	下境	市郎次	茂木	弥平次	小鼓	内田	長吉	小鼓	内田	長吉	中鼓	下境	市郎次	
中鼓	久保田	幸次郎	中鼓	久保田	半藏	内田	喜八	千歳	内田	喜幸	内田	牧	田	笛	下境	市郎次	
小鼓	久保田	幸次郎	小鼓	久保田	半藏	内田	源太郎	笛	内田	錦三郎	内田	牧	田	翁	下境	安次郎	
内田	勝藏	庄太郎	内田	勝藏	庄太郎	翁	下境	市郎次	内田	錦三郎	内田	牧	田	翁	下境	安次郎	
三番	岡	太牧	三番	岡	内田	宗十	三番	内田	宗十	中村	佐十郎	太鼓	岡	滝右衛門	翁	内田	友助
笛	下境	市郎次	笛	下境	市郎次	笛	下境	市郎次	笛	内田	宗十	中鼓	下境	市郎次	笛	下境	市郎次
小鼓	久保田	喜八	小鼓	久保田	喜八	翁	下境	安次郎	翁	下境	安次郎	翁	下境	安次郎	笛	下境	市郎次
内田	久保田	喜八	内田	久保田	喜八	翁	下境	安次郎	翁	下境	安次郎	翁	下境	安次郎	笛	下境	市郎次

こうして、明治二十六年に再興したが、その後昭和三年にまた中絶してしまい、久しく行われなかつた。終戦後昭和三十三年再び復興の声があり、三十年という長い間中絶していた式三番をなんとか再び陽の目をみるようにしたいということであつたが、なんせ長い間やられなかつただけにその成否は疑問視されていたという。先ず保存会を結成して費用の面でも後質ができるもあり、うまく進捗した。幸い一切を伝承していた岡実太郎氏がいたので同氏を中心に練習をして再興に成功した。当時道具は何一つ無かつたのを揃えて現在の道具立てをすることができた。式三番で最も重要な意味を持つ黒式尉と白式尉の顔面も失われてしまい、面箱をくぐる信仰の無いのはそのためである。現在使用している翁面は黒は能面である白は持楽の面を流用している。

上演に当つては昔から追潔章はしなかつた。顔面の隠取りは昔は芝居の役者に頼んでちゃんとやつた。衣裳は座で所有していた。記録資料としては万延元年の年時を記した三番叟の舞い方を図示した絵図、明治四年の翁、千歳、三番の位置図、三番舞い方図示(以上一冊に編み込)。文久二年八月吉日の「式三番」と表書した詩の「翁」の台本、同じく明治五年のもの、同じく明治二十六年のもの三冊(現地久保田恒太郎氏所有)がある。この三冊を現在の人でも読めるよう書き替えたもの一冊(保存会所有昭和四十九年新作)も同系の資料である。最も貴重なのは「式三番伝授之卷」という一巻本である。明治時代久しく中絶していたのを明治二十六年に復興し、その後世へ正確な式三番の演出について伝授すべく記したものであるが、これによると当時は本格的な式三番が行っていたことが知られる。



二之宮式三番の翁面



赤城神社三番叟 (阿久津宗二 撮影)

今回の調査で録音したときの役割は次のようであった。

翁	同	同	同	同	岩上	下境	喜久江
千歳	同	同	同	同	久保田	恒太郎	千五郎
三番	笛	中鼓	笛	笛	小鰐	小暮	一郎
岩	脇鼓	中鼓	下境	下境	梅太郎	福田	新蔵
上	笛	笛	敏治	敏治			
常時	同	同	喜久治	喜久治			
	同	同	喜久衛	喜久衛			

現状 二の宮赤城神社の歌舞伎舞台をそのまま式三番の舞台として利用している。一座の構成はつきのようである。  
太鼓一人。鼓三人。笛一人。陰三人。翁一人。千歳一人。三番一人。  
囃子方は舞台の二重を利用して正面に向い横に並び、陰は向て右奥の隅に位置する。現在折は使われていない。昭和四十九年四月十五日に上演した役割はつきのようである。

三番	翁	岩	上	常時
翁	千歳	下	境	敏治
笛	笛	小鰐	梅太郎	
太鼓	笛	岩	上	
同	笛	上		
鼓	笛	常時		

目出度始

座配 小暮 一郎

舞の組立と進行は、他の式三番と同じであるが、いま明治四年の式三番台本をもとにして全体の舞台の筋を見ることにしよう。( ) ( ) 内は著者が便宜付注的に記したのである。

(出端)  
一、笛しらべ トヒヤアイトーヒーハヒイ  
ツツミ ホホタホタホタホホ  
右ツツミニテ是より五ツ間三クサリウチアゲ 翁座ニいる。千歳翁の右座ニいる。  
右之通笛しらべ、千歳御面箱持翁の前ニ置べし。

翁のウタイとふどうたらりたらりらア

たらりあがりらりとふ

カケウタイ、ちりやたらりのたらりりらア

たらりあがりらりとふ

シテ、ところ千代迄おわしませ

カゲ、我等も干しやう（秋）さむらおふ

シテ、鶴と繩とのよわひにて

カゲ、さひわひ心にまかせたり

天下びよふし（天下拍子）

シテ、とふとふたらりたらりらあ

カゲ、ちりやたらりたらりらあ

たらりあがりらりとふ

（千歳の舞）

笛ヒイヤアヒイウチあげニツ。是よりヤア

千歳シテ、なるは滝の水、なるは滝の水、日は照るどんもふ

千歳翁のうたをゆうておもて遙出るべし

カゲ、たへずとふたりありうと人うふや

シテ、たへずとふたり常にとふたり

君のちとせもへん事も天津乙女の羽衣よなるはたきの水、なるは

たきの水、日は照るとも

カゲ、たえずとふたりありうとんとふや比間扇のマイ（舞）。笛長地。ツ

ツミウチアケ老（右之通にて四方がため）

千歳右の座敷二いるべし。

笛ヒイヤヒイ。翁のウタイ

是より右え通り五ツ間ツツミ

（翁の舞）

翁シテ、あげなきやとんどふやア

カゲ、いろばかりやとんどふやア

シテ、座して居たれども

カゲ、まいろふれんげりやとんどふやア

此ウタイニテ翁立べし

比所三にて翁三番見合

比ウタイミツツミウツベシ。是よりツツミ置也。

右之ウタイにて翁表遙出べし

シテ、干旱振る神のひこさのむかしより、此處ひさしかれとぞいわひ

カゲ、そふよやアリいちやアとんどふやア

シテ、およそ千年の鶴は万歳樂とうとふたり。

又翁のみぶりあり

光（申）に三曲をいただ（へい）たり。なき

また万歳の池の亀は

の色をろふす。滝の水哈々ト落て夜の月

あさやかにうかんだとして、あしたの日

天下太平國か



「式三番伝授之卷」の巻頭

(家) あんのう

(人) の今日の

一、笛しらべ ヒイヤアヒイ 此時ツツミあげる。

又大ツツミ出べし。

右笛二て三番表遙出べし。此時三番もみ出し都合七クサリあり

又三番黒面二て表ニ出べし。右両人口上掛けあるべし。

此時千歳あとより表ニ出べし。又三番鈴のまい(鈴)あり

三番口上へあら目出度や、物心意たるあとと太夫殿ニ一寸げんざん申

さふ

千歳口上へちやうどまいりて候

三番口上へただ御たちぞ

千歳口上へあととおふせ候ほどにすひぶん物ニ心意たる御あととの役に罷

り立候

三番口上へされば候

千歳口上へ今日の三番そふ(叟)千秋万歳はくじやうとまふておりそひ、

三番口上へ色の黒きじやう(尉)殿

三番口上へあふせのごとく此色の黒きじやうが、今日の三番叟千秋万歳

竹はんじやうとまひ納めふする事なによりもつて易う候

千歳口上へされば候

三番口上へ先あと殿には元の座敷へおももと御直り候ひ

千歳口上へそれがし座敷へ直ろふする事じやう殿の舞よりもうてやすふ

候

三番口上へされば候

千歳口上へ先じやう殿の舞を見申し、其後座敷へ直ろづる二て候

三番口上へイイヤイサ、御直りのふニは舞候まへ(じ)

千歳口上へただた寝トキシ御舞候ひ

三番口上へ只々御直り候ひ

千歳口上へあらよふがましや、さあら鉢をまいらせふ

三番口上へこなたこそ

ヒヨヒイ三クサリ。是より鉢のまい四方がためあり



式三番の三番叟鳥飛びの足運びを示した万延元年の文書

カゲへ我はなちよの翁

と心そよや

いくつの翁とんど

うヤア〇一二ツ間ニ

テ そのふやん 口笛

ヒイ

左の袖をかつぎ是

より五段都合七ク

サリ

千歳口上へ

是より長地

シラヘ千歳のよろこびの舞なればひとさしまおふ。万歳來

し

カゲへまんさいらく

シテへまんさいらく

カゲへまんさいらく

シテへまんさいらく

つつみ置べし

### (三番鉢の舞)

以上が詠曲「翁」の歌詞を中心とした演技の経過である。「翁」の問答が地方においてどう変化しているかを知る上にも興味がある。たとえば、この舞の中心である黒き尉の舞（三番の舞）の様（も）み出しに必らず無くてはならない。

おうさいや、おうさい、喜びありや喜びあり、わがこの處の喜びは、ほかへはやらじともが完全に抜けている。昭和四十九年に写した台本にもこの一節が脱けている。四十九年の台本には「觀世左近太夫の作つたもの」という意味のことがある。この写本の元の台本にそつあつたのである。すると、觀世流の「翁」には「おうさいや…」は脱けているのである。人形を使つて演ずる前橋市下長磯の式三番では「おおさいや…」は入っている。

### 三、神 樂

#### (一) 西大室産泰神社の神楽

名称 産泰神社の神楽

所在 前橋市西大室町産泰神社神楽保存会

由来 伝承 県内にはもちろん近県まで安産の神として信仰をあつめた産泰神社であつたら、太々講も早くに発達していたと思われる。現在は信仰形態の一つとして、太々講による神樂の奉納が行われた。ことに有名であったのは榛名神社の神樂講であるが、産泰神社もかなり盛んであったことはたしかである。文政五年正月に書かれた「産泰詣之事」



産泰神社の額殿おそらく太々講員の見物の座席であろう

にも「程なく太々御神樂の役人御装束にて樂器を排列坐す。既に儀式備り、御神樂を奏し奉る。御講中の座席には紫織縞の帳幕を張り、皆々誰で拝覧す。」とあり、盛大に行われていたことを窺わせるものがある。もちろんこの頃の神樂の演出者は神職であつて氏子が神樂を演するようになつたのは明治時代以降である。産泰神社の神樂もそうであつた。

現在使用されている表束や神樂面を調べたところ、面のいくつかに「寛政四年三月」という年号の墨表がかすかに読めた。トリカブトの裏書には「嘉永三年歲次己亥夏五月上浣作之」とあり、大部分の衣裳や面は江戸時代のものであることがわかる。これは県下の神樂に関する道具の研究に一つの標準となるものであつて今後他の神樂との比較研究をする手がかりとなるものである。「二の宮赤城神社の神樂とちがい、信仰が継続していたために中絶しなかつた。系統的には里神樂である。

#### 曲目

(式舞)  
邊倍（返閉が正しい）猿田彦の舞である。

四神舞 四方固めの舞で四人と二人の二つの場合がある。宇都女命の舞（細女の舞）天細女の神話による舞で、この曲目には歌がある。

(一)伊勢の國天の岩戸を押開き、神をいさめる千代の御神樂

(二)春の花夏は卯の花秋は菊、冬の紅葉も見るぞ樂しき

産泰神社の神樂面



産泰神社の神樂面



産泰神社の太々神樂（阿久津京二 撮影）

天児屋根命の舞  
住吉の舞

大蛇退治の舞

中入舞

（受嬌舞）

打出の舞 大國主命が袋と背負って打出の小槌でいろいろ

打出し、最後におかめを打ち出し、次に鬼が出て豆撒きをして退治する。

釣出しの舞 エビスが釣竿で鯉を釣り上げ、お伴が鯉をも

らう。お伴と河童の掛け合いとなり、河童三番が行われる。

大工の舞 大工と袖と出て面白おかしく舞い踊る。

玉の舞 医療のことを主題にした舞

稻荷の舞 農耕の舞 稲まきから収穫までの農作を祝う喜

劇風の舞

これが、産泰神社の神樂曲目である。問答については略すが、パントマイム形式の多い神樂の中で、産泰のは神歌が入り問答が

入っている。受嬌舞は他の里神楽と大同小異あるが特にめずらしいのは釣出しの舞における河童三番の親子に式三番の曲が採入れられていることである。

神樂殿 三間×一間である。普通二間×二間が多いがこの神樂殿は

南面した部分の方が一間長い。棟札は現存していないので建築年代は不明である。樂屋は舞台の北に一段下げた平土間の室が立てられているが、

もちろん他の神樂殿と同じく舞台の縁の下が本式の樂屋であり、一段低い室は舞子方の場が正式である。建築は立派である。この神樂殿の西に

間口の長い一棟の建物がある。今は額縁とよんでいるようであるが、本

來は太々講を奉納した講中の見物席であった。同じ構造が群馬郡棟名町

〔四〕鶴亀の生よならせし御代なれば、万代遼も氏子栄えん。  
〔注〕〔この「いさめる」は慰めるという意味で、神事芸能の典舞を別に「神いさめ」というのりこの語から出ている。〕

岩戸の舞 天手力男命の岩戸開き。

火の神の舞 遷具土命の舞

像儀の舞 大国主命と若彦命の問答

山の神の舞 大山祇神の舞

弓矢の舞 この舞に歌が入る。

〔一〕早振る神の瑞垣了張りて、向う惡魔をいでや払わん  
〔二〕わが国の御み宝とする弓を、今日神御前に仕奉る

〔三〕おく方の堺より万代を、たながの御代仕奉る

の株名神社に  
も見られる。  
株名神社の場  
合も太々講中  
の奉納額が一  
杯掲げられて  
いるが、かつてはここが神  
樂の棧敷とし  
て使われたも  
のと考えられ  
る。

る。先に引用した「産奉詣之類」にある（御講中の座席には紫縮緬の帳幕を張り）とある御講中の席がこの建物と考えられる。こうした神樂殿の建築様式は、年一度の祭礼のときだけ上演する場合は不要で、神樂講を持つ神社の特徴であろう。

今回の調査では、愛媛舞の「釣出し」を演じてもらった。役割は大部 分若い青年達であった。一部古老が演じてくれた。

〔舞方〕

夷さま 萩原文男（二三）

とも 木村高志（二二）

侍 天笠勝好（二九）

河童 鯉登鉄助（七四）

〔囃子方〕 大桐 木村一郎（四四）

笛 鯉登初男（四四）

ツケ 萩原新作（六八）

現在舞方は若い人が後継者として立派に養成されたが、囃子方が高年令化しており、この面の後継者対策が望まれているが、すでに囃子の面



産奉神社の神楽殿



産奉神社の河童拍子

でも若い世代が  
覚えつたり心  
配はないとい  
う話であった。  
「釣出しの舞」  
は、産奉神社の  
神樂の中でも最  
も他どちがう喜  
劇的要素の多い  
曲目である。夷  
が的を肩にして舞台に現われ、一舞い舞つたあと、釣糸を舞台の外に垂  
らして大きな鯉を釣上げる。そこへお伴が魚籠を持って出てきて、夷に  
鯉を呉れさせがむ。夷の大國主命はお伴をいろいろと柳榆つ。やつと夷  
から鯉と釣竿をもらつたお伴は、釣竿を垂れているうちに河童を釣上げ  
てしまつた。この河童とお伴のおどけたやりとりがあり、最後に河童に  
舞を舞わせるが、それが三番の舞になつてゐる。囃子は二之宮赤城神社の  
式三番の囃をそつくり採入れてゐる。中世芸能である武三番の三番叟が  
「鳥とび」の場面に使われる囃子がこの里神樂の中に組込まれていると  
いうことは、近接した地区に行われている芸能に与える影響の一例とし  
て極めて注目される。勢多郡北橘村下南室の神樂にも三番があるし桐生  
市広沢の神樂にも三番の舞があるが囃子は能を誦における囃子ではなかつ  
たよう記憶している。

## 〔二〕二之宮の神社

名称 二之宮赤城神社氏子  
由来・伝承 創始された年代は明らかでない。系統的には近くの西大  
室の産奉神社の神樂と同じものといつてよい。明治十六年四月付で群馬  
県令宛に提出した祭典の余興類書の扣によると、四月十五日赤城神社の

例祭につき、神庭に於て午前十時より午後三時まで里神樂をやりたいこと、午後一時より五時まで神馬式をやりたい旨を記載している。神馬式というものは流鏑馬（やぶさめ）の事で、農馬六匹に装束をつけ神庭へ曳出し、三九の的に矢を放つことと説明がされている。この流鏑馬に使用した鞍は六頭分今も宝物庫に保存されている。鞆や唄みなどもある。四月十五日の例大祭に里神樂と合わせて流鏑馬を行っていたことがわかるが、里神樂のみ遺つて現在に至っている。しかし、この里神樂も一時廃絶していた。明治末から昭和初期までの間のようである。昭和七年には復活することになり、一代前に神樂を演じた先輩と師匠と現役が集まつて、大分乱れてしまつた里神樂を本来の正しいものにして復活しようとして練習して再興したという。現在のはその再興のときのものである。このときに、昔のままのものとして再興したのか、産泰以上の指



二之宮神楽の神楽殿



二之宮神楽の囃子方

導でそれを模したものかの経緯は明らかでない。明治末より大正の初め頃までは二之宮の太々神樂の講というものが周辺の村々にあったらしく、講の村として記録されているのは、玉村、三郷村、赤堀村、宮郷村、宮城村、殖連村、安女村、茂呂村、木瀬村、大胡村、佐波郡東村、新里村、荒砥村、伊勢崎町、柏川村、桂萱村、前橋市の区域に及んでいた。これらの太々講が間接的には二之宮の赤城神社の神樂を支えてきた地区であることを示す。

**座の組織** 昔は「座長」があつたが現在は座長制はやつていな

い。すべて神樂の役員といつて、講員は昔は世襲制であつて、親子方などまで分担の受持の家が決つていていたそうである。現在は式三番を構成している座員がそのまま構成員となつて維持されている青年層が無関心であつて後継者に苦慮している。現在の役員は次のようである。座長鈴木益次、副座長田所周吉、副座長松井角次、

茂木弥八、福田新藏、石川機八、松井市次、久保田喜一、下境角次郎、岡定太郎、中村房太郎、岩上芳太郎。

**曲目** この里神樂は、大別すると「おねり」「本座」「裏座」にな

つている。「本座」は他の神樂での神事舞、式舞に当り、「裏座」は同じく興舞に當る。もともと、神事と芸能は一つになつて発生してきたものである。しかし、鎮魂を主とした式舞は内容に固いものが多く見ていても嚴肅なものとされているのに対し、興舞は神を慰める神舞（かんにぎ）神遊び、神いさめという思想から出たもので娛樂の要素を多分に持つてゐるものが多い。この娛樂の要素が神樂芸能から分離したものが大衆芸能の中に独立していった。ではつぎに、三つの株成をさらにこまかく見てゆこう。

（おねり）

神樂殿までの途中をおねり或いは道行という。昔は總の家で風呂を立ててくれたので入浴して体を淨めてから神樂にかかるが今はやらなくな。「宮元」とよばれる總代の家から神社までの途中行列をなして進む。

その順序は猿田彦命—自治会長—神楽演奏者—神官—みてぐら—越代—氏子の順である。

この場合猿田彦命が先頭に立つのは、神楽と古事記の神話との関連が多いことから見てもわかるよう、天孫降臨のときに猿田彦が産業内をしたという伝説によるものである。猿田彦と自治会長の間に「三管」とよばれる笛、ショウ、シチリキが入り、道行の曲として「越天楽」と「道ゆきの曲」を吹奏しながら進んだ。みてぐらは〇五三三縄に四手を垂らした長櫛で白丁姿で組いでゆく。

〔表座〕

天狗の座〔猿田彦〕ともいう。神楽殿に現われて「四方固め」をやる。撒米をまく。囃子の曲は三ツ拍子、四つ拍子である。

両人の舞〔四神〕ともいう。二人で舞を演ずるもので、採物は御教ゆ束と鉢を使う。囃子の曲は三ツ拍子、四つ拍子。鉢女〔うすめ〕の舞〔おかげ〕ともいう。天照大神が天の岩戸に隠されたとき、八百万神となんとか外へ導き出すため、岩屋の前でいまのストリップを踊ったのが天鉢女命である。その神話によつてつくられた曲目で大抵の神樂座の曲目に見られる。独り舞である。囃子の曲は「うすめの曲」。

手力雄命

別に「天の岩戸開き」ともいう。この曲目も里神楽には大抵見られる。天照大神が鉢女命の裸踊りに興味を持つて岩戸を開いたのである。



二之宮赤城神社神楽の神楽面



二之宮赤城神社神楽の  
おかげ面

大蛇退治の舞〔八岐の大蛇退治〕

〔裏座〕

釣り場の舞〔恵須が供奴をからかう〕。河童を釣り出し、河童が三番叟を舞う。

鍛冶屋の舞〔鍛冶屋が弟子の向う植で刀をきたえる〕。

風上げの舞〔風を上げて遊び興する〕。

種播きの舞〔農耕の過程を演する。豊受神を中心〕。

大工の舞〔袖人と大工が出て舞う〕。

子守りの舞〔夫婦で子守りをしながら練ひろげるコミック風のもの〕。

〔表座〕

水継びの舞〔問答があり、赤城神社の由緒話を語る〕。

火の神の舞〔鉢と鉢を採物にして舞。曲はあまだれ〕。

山の神の舞〔大山祇の神。刀を使う。曲は四つ拍子〕。

天児屋根の舞〔白式舞〕。採物は扇。曲は四つ拍子。住吉の舞〔御幣と鉢が採物。四つ拍子〕。

弓矢の舞〔八幡の舞〕。武神の舞。

像儀の舞〔二人で問答をしながら神社の由来を語る。弓と千木と笏が採物。曲は六方を使う〕。

ちょっとと明けて外を見たとき、待つていて一気に岩戸を押し開いたところある。この曲目も、手力雄が天照大神を外に連れ出すところを主題としたものである。曲はかまく

昔は祭典のとき十三座をやったが現在は六座しかやらない。なお、鹿沼明書『荒砥村誌』によると、座は次のように記されている。

〔式舞〕

遍倍（へんぱい）。四神舞。宇都女の舞。岩戸の舞。迦吳土の舞。ぞうぎの舞。山の神の舞。弓矢の舞。天児屋根の舞。住吉の舞。計九座。

〔中入舞〕

〔愛嬌舞〕

打出の舞。釣出しの舞。大工の舞。刀鉛治の舞。玉取の舞。稻荷の舞。計六座。これを昭和七年に再興した際の記録である。

〔神樂秘書〕に掲ると

(一) 猿田彦大神の舞(四人) (二) 四神の舞(四人) (三) 天御女命の舞(一人)  
人 (四) 天手力雄命の舞(一人) (五) 水つぎの舞(二人) (六) 八岐大蛇  
退治の舞(五人) (七) 隊人の舞(二人) (八) 湖神の舞(二人) (九) 天古  
星恨命の舞(一人) (十) 八幡大神の舞(一人) (番外) 組笠大神の舞  
(十一) 山神の舞(一人) (十二) 住吉大神の舞(一人) (番外) 大国玉命若彦  
命の舞 (十三) 遍吳土の命の舞(一人) (十四) 象儀の舞(二人)

以下表座

(一) 打出しの舞(五人外に一人) (二) 種蒔の舞(三人) (三) 取取の舞(四  
人) (四) 魚釣場の舞(四人) (五) 河童の舞 (六) 鉛治屋の舞(三人) (七) 玉  
取の舞(三人) (八) 针打の舞(三人) (九) 大工の舞(三人)

以上裏座

このなかで組笠大神の舞は蚕の曲目であつて珍しいが現在はほとん  
どやられていないようである。

今回の調査では実際の演出は見られなかつたが、曲目の中にある「釣  
り場」であるが、「このとき釣上げられた河童の演する「河童三番」の入っ  
ている点である。しかもこのときの離子に式三番の中の三番の舞のと  
きの曲の入っていることは芸能の関連として注目しなければなるまい。



泉沢の神楽獅子

(三) 泉沢の神楽獅子

名称 泉沢一人立獅子

所在 前橋市泉沢町神楽保存会

由来・伝承 泉沢の虚空藏神

社の祭礼に付属する神事芸能となつてゐるが昔は必ずしも祭典と一体のものではなかつた。むしろ、悪魔払い的な芸能として行なわれていた。二人立獅子が悪魔払いの使として村の戸毎をめぐる例は安中

市上磯部新寺、吾妻郡吾妻町萩生などにその例が見られる

から同じ系統と見てよい。すると他の二例が小正月の年祝行事として行われている戸毎めぐりの悪魔払いとして発生したものという推定ができる。年の始めに障りな祟(たたり)をなす魔をその家から追い出すといふ協同体的目的を持つ者が非常に多い。道祖神祭りで、吾妻郡長野原町広桑では大きな御幣束を持ったカシラを先頭にして一軒一軒をめぐり、座敷の中での御幣束を振り、悪魔退散を叫んだ(大正中期)。佐波郡玉村町上福島では今も黒つけ祭りで戸毎に悪魔払いをしてまわる。泉州の神楽獅子もそつした悪魔払いとして行なわれたという民俗芸能史上の特長が見られる。それが演技の中にある長獅子のように、最後に虚空藏神社の境内で興舞としての舞と奉納したことから祭典の余興と結びついだのではないだろうか。

上演時 いまは四月一日。以前は九月一日の八朔にやつた。一年だけ

月一日となつたものである。

舞の構成　泉沢の若衆によつて維持されてきた。現在青年団が繼承してすっかり覚えてしまつた。舞は「四方固め」あるいは「庭舞い」という曲目と、「長獅子」とよばれるもの二つから構成されている。庭舞いは戸毎に悪魔払いをするとの曲目である。四月一日の当日に戸ごとに訪れる。各戸では正座し、撒米と錢を用意して待つてゐる。先ず一行の人が、つぎの唱え言をいふ。

いさや獅子を参らせる。獅子は勿体なくも、村主（すぐろ）さんなる大明神のおんみ神舞。

獅子は三尺の御幣を持って悪を払う。こう唱え「ア、ア、ア」と言つて天と地を払つてから門口を入り、家の中の惡魔を払つて、家族の一人一人の頭を噛む真似をする。終るとお賽錢と撒米を行に進ぜる。こうして各戸をめぐり歩く。これが「庭舞い」である。戸毎のめぐりが終ると、神社の境内に入り、拜殿とか時には掛け舞台をして「長獅子」の舞に移る。長獅子は一人立の獅子（各地で神楽獅子といふ）とヒヨットコに扮した四人で演ずる。泉沢の場合は曲目の演し物は一つしかない。多く動作はない。はじめから無かつたのか、途中で略してしまつたのか明らかでない。泉沢の長獅子は居眠りの場面だけである。眠つてゐる獅子に対してヒヨットコが鼻をくすぐつたり、脚榆林たりする。獅子がヒヨットコを捉えようとするあたりが興味の中心である。二人立ちであるからもちろん前足の者と後足の者一人で一匹の獅子となる。途中にヒヨットコの三番叟がある。

獅子方は、笛と太鼓のみである。以前大太鼓も使つたという。この舞の中で特に注目されるのは、ヒヨットコの舞の中に三番叟があり、式三番のときの三番特有の獅子が入ることである。城南地区の民俗芸能にこのように能における「翁」の三番の曲が採入れられることには十分注目してよいことである。

道具　獅子頭は一人立の獅子よりはるかに大きい。現在新・旧二個の頭があるが、旧の方は高さ三一センチ、奥行三五センチ、巾三八センチであるのに対し、新しい方は高さ三八センチ、奥行三一センチ、巾四〇センチあり、旧の獅子頭の方が奥行が浅くつくられている。高さは旧の頭の方がはるかに大きい。現在使用しているものは三代目というから、最初の頭もあるはずであるが今は見られなかつた。旧の頭は朱と黒のウルシで彩色されており、耳は着脱式になつてゐる。頭の毛は白麻を用いている。被る風呂敷はほかの二人立と内じく唐草の大風呂敷である。

座の構成　現在の座の構成は次のようになつてゐる。

（獅子担当）  
カシラ　井上登（一一）　本間克美（一二四）

後足　別にきまつてしない。

ヒヨットコ　須藤裕一（一二一）　小沢敏明（一九）　須藤秀夫（二〇）

○　茂木一雄（二五）　吉田孝夫（一九）

（獅子担当）  
笛　喜楽茂雄（二二一）　須藤謙一（一九）

太鼓　青木忠男（二二一）　青木恒男（二〇）　須藤敏信（一九）

## 四、地芝居

### (一) 鮫土井の地芝居

由来・伝承　現在は鮫土井の地芝居は行われていない。農村歌舞伎舞台は現在してゐるが（後述）、昭和九年に社務所を改造したというからそれ以前に芝居は行われなくなつたようである。大正末年までやられたのは確かであるが、その頃はすでに買芝居で地芝居は演らなかつたという。その頃の記憶によると、衣裳は佐波郡赤堀村五日牛の衣裳屋から借りて来た。見物席は撥ね木で天井をつくり、土間は蓬を敷いたという。関係の

飯土井の歌舞伎舞台



飯土井の歌舞伎舞台



飯土井の義太夫台本

から興味ある事項を整理してみた。

(一) 安政三年の花帳

最高二朱、大並二百文、十六名で一両というのもある。花を入れた村名をみると、波志江、今井、新井、石山、下触、東大室、二ノ宮、西大室、八坂、宮子、大室、田中島、下大屋、下増田、岡屋、舗、赤堀下原、中屋舗、曲沢、十二天山、宮貝戸、足軽町、下波志江、荒子、中ノ面、五目牛、西久保、茂木、大屋などと総額二両三朱と拾武累九百文。この中儀札として他の若者達からのものをみると、下触村若者、二ノ宮村若者、波志江若者、東大室若者、下大屋若者、二ノ宮白井若者、新井若者、西大室村若者、岡屋舗若者、中屋橋若者、官見戸若者、下波志江若者、西原舗若者、中屋若者、中ノ面若者、十二天若者、大屋若者等の名が見える。その他の収入を入れて五両一分三朱と六拾二文となつた。

(二) 安政五年の入用帳

太夫賃金一両三分一分三朱をはじめとして他は飲食代で酒、米、饅頭、豆腐、竹の子、味噌、醤油、そうめん、玉子など。この計四両三分と七百二十七文、花が一両三朱と十五貫七百文、差引一両二分が不足し、これを関係者三十人で平等地に負担し一人前三百三十文ずつ提出した。花返しは当日すし、餅を配った。

(三) 文久三年道具立帳

(一ノ谷二ノ切) 門口、小柴垣、みの笠、煙草、盆、きせる、槍一本、短剣、桜の枝  
(同三ノ切) 門口、制札、懷剣、切首、鎧機、十手、捕縄、笛、煙管、煙草盆、采配、腰掛  
(廿四孝) 挈子、鍵、挟み箱二つ、下札、龍、鎌、棒柄  
(同三ノ切) 義持、つい(杖?)、笠、傘、挟み箱、しら木の箱、鉛、鉛、煙管、煙草盆、炬燵、三宝、たら、小鳥四五羽、鳩、竹、竹の子、白旗、腹切り、小束、手洗石その他

(恋女房) 小凧、手燭、わり竹、手向石、その他

(手習鏡) 煙草盆、煙管、机、文庫、六字の旗（注雨無阿弥陀仏）、重箱込み、位牌、その他

(忠臣蔵) 腰掛、三宝、腹切刀、桜の生け花、しきみの枝、白布、本床、なおこのほか俄、角力大会の帳面もある。

安政三年正月吉日に風祭という祭が行われ、そのときは賣芝居をした。一冊がある。四両二分が芝居一座を買った金である。そのほか品物を購入したものと記載している。明治四十二年の芝居会的世話人による戸別取立帳をみると、当時の戸数割等級別によつて芝居の費用を割当てたことを示している。一等の家が七円六十銭、二等五円六十銭、三等四円六十銭、四等三円八十銭、五等三円二十銭、六等二円六十八銭、七等一円

二十銭以下十四等三十六銭までに点をついている。

大道具など引幕が二通りある。一つは明治三十三年の年紀が楷書による。縦三メートル一〇、長さ七メートル四〇のもので、寄進者は「進上 波志江村医士高野藤庵」とある。伊勢崎市波志江の医者が寄贈したことわかる。

一つは明治四十二年小鶴氏寄贈で、松竹梅が六曲屏風の図柄で染められている。紺屋は「いせさき稲葉製」とある。水引幕は一ツ縦七八センチ、長さ九メートル七の反物の並巾を染めぬいてある。舞台の出入口に使う揚げ幕（切り幕）も一つ保存されている。引幕の新調からみて、明治三十年代から四十年代にかけてかなり盛んであったことがわかる。同時に、そのあと地芝居は廃絶したものと推定される。安達三」や「太十」に使われる引戸はまだ完全に遺されている。衣裳やカツラの類は一切ない。



飯土井歌舞伎舞台の屏風



飯土井の歌舞伎舞台引幕



飯土井の歌舞伎舞台引幕

舞台 舞台は飯土井神社の境内にあり、社殿に対し南面して平行に建てられていて他の農村歌舞伎舞台のように直通に配置されている。五間に三間という大きさであるから他の村の舞台と同じ大きさである。屋根が他の地区的舞台では四注造が多いが、飯土井の舞台は切妻入母屋造となつており、屋根型に特長がある。破風の構造などかなり緻密である。見物席は舞台の前に昔のままの広場として造られているが、やや傾斜

を見せてはいるほか特別の工夫はこらされていない。

義太夫語り 裕土井には芸名竹本理太夫（本名吉田広蔵）という義太夫語りがいた。この人物はすぐれた義太夫の語り手で沢山の弟子を持ち、

近在近郷で有名であった。裕土井の共同墓地にその墓があるが、墓は彼の生存中の大正四年九月に弟子達五十三名が寄付して立派な墓を建ててやったことがわかる。本人はそれから二年後の大正六年十一月二十六日七十八歳で逝去したことが追記されている。理太夫に教えられた淨瑠璃語りは相当の数にのぼっている。弟子の二之宮の高砂太夫に理太夫の芸名を譲つたあと、竹本理太夫は理広齋と称したという。理太夫の師匠は伊勢崎市田中島の竹本理太夫で、師匠の芸名をそつくり譲られて二代目竹本理太夫ということになつたらしい。二之宮の高砂太夫は本名を下境貢藏といった。

城南地区にはほかに、西大室の竹本三輪太夫（本名千吉良初太郎）竹本勝太夫（本名石分勝次郎）、二之宮に竹本亀松（本名黒崎亀治郎）らの喉自慢がいたといふ。

義太夫台本 集会所に遺つてある台本はほとんど字本で刊本はありません。勘亭流の台本では読みなくなつたので読み易く写しかえたものであろう。写字の一部を掲げると、

奥州安達原（二段目・三段目）  
本朝廿四孝（氣火・三ノ切・勘動物語）

年号である  
假名手本忠臣藏（三・四・七・九の段。明治三十一年から三十二年の

伽羅千代林（二冊）  
御所桜堤河夜討（二冊）

桂川連理の壇

太功記（二冊）

この台本からみてもほとんど時代物が語られていて世話物の少いことがわかる。世話物は素人にはむずかしいので自然時代物中心となつたと

思われる。県内大部分の地芝居がその傾向を持つてゐるのと共通している。

## 〔二〕 二之宮の地芝居

由来・伝承 二之宮地区には現在地芝居を物語る遺品や資料はほとんどない。ただ赤城神社境内に南面して本社の向つて右に西面した立派な常設農村歌舞伎舞台が遺つてゐるだけである。鹿沼明書「荒砥村誌」に提ると、地芝居の役者が二之宮にて芸名まで持つてゐた。すなわち中村重次郎（本名國鉄平）、坂東鰐十郎（本名星野孫八）がそれである。前者は女形が上手であった。明治四十年十二月に引退興行を行ひ、二之宮赤城神社に奉額をしているのも二之宮の地芝居の存在を証してゐる。関係史料として遺されているものの一つに明治十六年九月南勢多郡二ノ宮郷官西組連中の「俄語費私割賦記載簿」というのがある。「俄（にわか）」

といふのは一般には俄狂言のことと、明治時代に各地で行われたが、県下では地芝居と同じに使われてゐる例が多いので地芝居と解される。本記録にも最後に歌舞伎の台本が記されているし、本文中に太夫、三味線、カツラ師、顔師御礼などといふのもむしろ歌舞伎と解したい。この史料で非常に興味のあるのは、警察に無断で興行したために関係者が取調べられ、处罚されていることである。當時地芝居は彈壓を受け、鑑札の無い者の中興行は罰せられた。すると、二之宮のこのときの俄狂言は違法のものであったことがわかる。こんなことも理由の一つでだんだん衰退していったのであるが、地方芸能史料としても興味深いもの



明治 16 年の地芝居記録

このときの俄狂言は違法のものであったことがわかる。こんなことも理由の一つでだんだん衰退していったのであるが、地方芸能史料としても興味深いもの

でここに掲げておく。

明治十六年九月俄諸入費賦課

一金九円也 太夫三味引式人私

一金九円也 金五拾錢

一金九円也 金九円也

一金九円也 金八拾錢

一金九円也 金八拾錢

一金九円也 金九円也

太夫三味引式人私	一金九円也
カツラ師私	一金九円也
おは（や）し私	一金九円也
林屋私	一金九円也
角星私	一金九円也
福田幸助私	一金九円也
丁子や私	一金九円也
駒形宿御屋私外二諸壳り共	一金九円也
伊セサキ買物	一金九円也
金銀紙中村糸藏私	一金九円也
同上茂木善八私	一金九円也
手拭四筋	一金九円也
岡与三郎私	一金九円也
諸品代	一金九円也
つけきや私	一金九円也
中村佐治郎私そふり七足	一金九円也
伊セサキ買物私	一金九円也
中村佐治郎私そふり七足	一金九円也
岡佐平私	一金九円也
貢料小鮎吉五郎私	一金九円也
貢料米升代	一金九円也
中村佐治郎私	一金九円也
割木附八人分	一金九円也



明治 16 年無断で興行したと  
いうことで警察に召喚された  
費用の記入がある帳面（カ）

岡与三郎私 下邨御札  
太夫御札 三味御札  
カツラ師私 顔師御札  
おは（や）し私 宮本連中  
林屋私 伊セサキ買物  
角星私 犀川清太郎御札  
福田幸助私 岡与三郎御札  
丁子や私 床屋御札  
駒形宿御屋私 宮原組にて入花岡佐  
伊セサキ買物私 平出し。中村十治郎  
中村佐治郎私 高橋清太郎御札  
岡与三郎御札 剣佐平出し  
中村佐治郎私 田中九八御札

一金武円也

一金武円也

一金武円也

一金五拾錢

一金五圓也

一金六旧六拾七錢

一金武拾錢

一金武拾錢

一金七拾錢

一金武拾錢

一金武拾錢

一金武拾錢

一金武拾錢

一金武拾錢

一金三圓也

一金三圓也

一金三圓也

一金三圓也

一金三圓也

一金三圓也

一金三圓也

三口合金拾七圓六拾錢三厘  
差引金五拾四圓四拾五錢三厘

割社

小船儀助御札

岡港十郎御札

中村十治郎御札

中村かつ御はやし御札

伊勢崎警察署署課費

伊勢崎警察署諸費

岡市五郎御札

田所卯之吉席料御札

中村佐治郎行燈御札

太八立替

伊勢崎警察署ヨリ召喚状史員令料茂木

比代トシテ御札

小船吉五郎□行代

宮子村小船儀助殿之御札

中村屋 払

波志江村角屋兼三郎 扯茂木多吉立替

角屋新平 扯

はやしや 扯

小酒屋幸助 扯

よしや 扯

現(原)米堺儀組四五入

組内拾四人世ハ方より入花

金四拾三円九拾八錢三厘

人名拾三人出但し老人ニ付金三円三拾

八錢四厘ツツ

四人出分但し老人ニ付金武円拾七錢七

厘五毛ツツ

金武円也

金八円四拾七錢也

来ル十月十日取立之事

太八立替

明治十六年九月廿八日

茂木 浅八

(以下十七名略)

十八人

世八人

富田 藤平

(以下十三名略)

茂木 浅八

（以下十三名略）

（以下十三名略）

（以下十三名略）

（以下十三名略）

（以下十三名略）

（以下十三名略）

（以下十三名略）

（以下十三名略）

泉沢では常設舞台ではなく掛け舞台でやった。昭和二十年の終戦の前の四月一日に、久しぶりに地芝居をやろうというので、人形芝居の赤城座でやっていた人たちに教えてもらいやつたのが最後である。衣裳はなんと人形芝居と衣裳を使つたという。義太夫もちゃんと入り、演じ物は「太十」「安達三」「忠臣蔵三段目」「阿波の鳴門」「義儀千本桜」「弥次喜多道中」「いさり勝五郎」などを者からよくやつたという。ことに東組が主力で地芝居をやり、西組の人たちは主として新流をやつた。

## 五、人形芝居

泉沢の人形芝居

名称 泉沢操人形芝居  
所在 前橋市泉沢町

由来・伝承 明治二十年頃、四国徳島県の人上坂角太郎という人物がふらりと村に住むようになった。はじめは大胡町千賀沼石井氏の養殖業の手伝いとして働いていたが、阿波屋という居酒屋を開き、村民と交わっているうちにいろいろの芸能を披露した。なかなかの芸人であったが、話が人形芝居になると、皆の衆がやる意志があるなう人形を見つけて式揃えてやると申出たので、村の若い衆は人形芝居をやって見ようといふことで一式の調達方を上坂という人に頼んだという。しばらく旅に出たと思うと、間もなく人形のカシラを沢山持つて帰ってきた。そこで本人を師匠として仲間が集まり人形芝居の練習を始めるようになった。当時義太夫語りは村内にも近村にも沢山いたので人形淨瑠璃の一座ができていった。座名を「赤城座」と命名した。このとき上坂の持つた人形のカシラが、徳島県和田村（名東郡）住人の形師天狗屋久吉の作が大部分であった。久吉は「天狗久」といわれ、阿波の人形師の中で名人とされた人である。淡路系のカシラであるから、関西の大坂あたりのカシラより一まわり大きい。江戸系のカシラももちろん淡路系には及ばない。近世の町民が支持した人形芝居の全盛時代に幾多の名作を遺した人形師が江戸時代から居たが、天狗久は明治期における人形淨瑠璃のカシラの作者として一頭地を抜いていた。上坂角太郎は明治四十一年二月十六日に正式荒砥村に籍を移した。役場の戸籍台帳によると徳島県美島郡重清村露口一二番より転籍している。明治二年十一月一日生となっている。四十一年に泉沢の石田とみという女性と結婚し、大

正十年四月十五日泉沢で死亡した。昭和三十年八月に萩原によってこの人形カシラが発見されたことが徳島新聞に伝えられ、徳島の研究家によつて、おそらく上坂という人物は「箱廻し」の一人であろうということとであつた。「箱廻し」というのは、一人で人形を七個も八個も箱の中に入れ、自分で組んで立つたり、各家を訪れて人形芝居をやってみせる旅芸人の一種で、明治二十年代まで徳島県からこういう職業芸人が諸國に出たという。淨瑠璃も自分で語り、三味線を弾くことのできる者が多かった。しかも、阿波の箱廻しが箱根鉢を越えたという例は極めて稀だそうであるから、もし上坂が箱廻しだとすればその珍しい例の一つになる。とにかく、一人の阿波国の住人がはるばる泉沢村にきて土着したことからこの人形芝居がはじまり、しかも名人天狗久の作品を遺すことになったものである。ほかに、やはり名人といわれ天狗久の師匠であつた人形富のカシラもある。

赤城座は泉沢の山田豊次郎、喜楽長太郎、吉田樹一郎といった人が中心で結成し、「赤城人形大一座」と名乗つて、近村まで興行して歩いたもので一時は有名であった。もちろん三人は遠いで淡路まであるから入形も大振りであるから演出効果は満点であった。

現状 大正十年頃を境にして中絶したまま一式は虚空藏神社に収納されたままになつて、昭和三十年の発見後カシラは一時群馬県立博物館に依託していたが現在児童文化センターに寄託している。カシラは天狗久作の女形カシラ、主役カシラをはじめとして、人形富作のカシラなど多数がある。ことに女形カシラは絶品であるが傷みがひどい。今のように補修しておく必要がある。この外肩板、胴輪、手や足などもあり、淡路系の淨瑠璃人形としては県下にその例を見ないものである。（萩原進）

## 六、城南地区の伝統音楽と諸芸能

富田の紙團扇子であるが、神田団扇子と目黒団扇子の混合したものである。

県下の囃子を見るとき、一つの流派の囃子（例えば神田囃子だけ）のものに少ない、その理由の一つとして、明治期に祭り囃子の競演が行なわれ、屋台を引き合をして、なりのよいものを好んだ。それがために流派の混間したものが多いため、県下の囃子の特徴といえる。また民謡關係であるが、田植唄、棒打唄など、城南地区のどの村にも残されている。

これらは、現にこれらの歌をういたがら二十数年前まで、これらの仕事にたずさわった方々が多いことからである。特にこれらの歌は、表面的には、歌詞内容のかたいものを歌うが、反面誠にユーモラスなものが多い、こうしたことは、それらの仕事が過酷な労作業であったことが伺える。

民謡は、つらい仕事にまつわるものは必ずといっていい程、ユーモラスな歌である。

反面仕事が楽なものにまつわる歌は、かたいうたが多いのである。またこの地区の田植唄は、先歌と後歌の音程と、県内地区的田植の過程の比較は今後行なって、城南地区的田植唄の系統をみる必要がある。

伝統音楽として、この城南地区に特別すぐれている特徴あるものはみあたらない。今後あと一步深めて調査を行なつてみたいと考えである。

### 富田の紙園囃子

由来 富田町原中組の紙園囃子は、天正十六年富田町の吉田忠左衛門の身内の者が、京都から来て教えたとも伝えてられる。

古くは大八車より少し大きい車に屋台を付けて、福荷様まで引いて行なつたというが、明治十一年に、福荷様、春日様、赤城神社を合併し、三柱神社とし、この祭りの十月十六日、十七に行う。

古くは屋台を組むのは、福荷様の拌殿で組み立て十六日の宵晩に「引き寄せ」とい、上組、下組、吹地などの屋台のある組から屋台を引き寄せる。屋台が集まると、オタビ三日のやり方でクジ引きにより、先頭

にたつ屋台を決める。このくじ引きは「くげんしゆくに行なわれる。

先頭に立つ屋台が鉢をたたき出さないと、他の屋台はたたけないきまりになっていた。

飾物 上州の屋台囃子の特徴は、屋台の屋上に武将などの飾物をするところにある。

原中組の屋台の飾り物は、武州本庄から借りて来て行なつた。義経、きつねただのぶ、鬼が島などであつた。しかし、下組ではほとんど組の者が飾り物を作つて屋台に乗せた。

北下組の飾り物を例みると、ここでは手作りで

明治四十年十月九日に 蕁音機  
明治四十四年十月九日 勘平。

大正二年十月十七日 赤垣源藏、とつくりの別れ  
大正八年十月十七日 平和会議。

太正十一年十月十七日 桃太郎鬼ヶ島  
大正十五年十月十七日 ラジオ。

昭和八年十月十七日 国防会議  
昭和二十七年十月十七日 きつねただのぶ  
以後なし。

このように、屋台の飾り物によって、その時代の事象を知ることもできる。

引きこ 屋台を引く者を「ヒキコ」といった。引きこは、原中組では村の男衆は全部出て引くことになつて、足にわらじを付けすべらないようにして行なつた。引く者はほとんど酒を飲んでおり、道端によつぶれている者もいる程だったという。

この祭りには特に酒が多く出される。それは、この村からヨメをもううと、祭にナハを出すならわしあつた。そうしたことから、四斗樽で酒をあけ、飲みほうだいであった。

練習 屋台をその年に出すか否かは、各組の代表が出て決めた。三組

のうち、一組が「ぼんでも、他の二組に同調しなければならなかつた。

練習がはじまると、子どもは学校で机をたたいて星台の練習が移つた。それがために、勉強は「よくおくれた」という。星台の青年が中心だが、この星台は「青年と子ども衆」の混合で行なう。子どもには大きな丸太をたたかせて練習させた。ある程度出るようになると、子ども一人ずつたたかせて試験し、できのよい者から、一號組次に二號組三號組と分けた。

星台のサンテコ、神田囃子は子供が当日、星台の上で行なつた。練習は九月末から行なうのが普通であつた。

座敷 サンテコ 神田囃子 大間昇殿（笛は入らない） サンテコク  
ズシ 神田クズシ 錦倉見殿（つづみが入る） 夜からぐら籠まる（三味、  
大皮、小皮、が入る）

樂器 大胴一、締太鼓（つけ）四、笛一、鉦二、小皮二、大皮一、三

味線一、

これらの樂器によつて演奏されるが、星台を引き出す時はサンテコ。

道中もサンテコ、止ると夜神樂、神社までは神田、サンテコで入る。

特徴 この囃子は、神田囃子系統のものであるが、目黒囃子も混入さ

れている。特に合間に大声で「ヤーオー」と掛け声を入れるなど、はつ

きり目黒囃子の特徴をそのままなぞなぞしている。

また一般的に、関東の囃子は、大胴一、つけ三、鉦一、笛一、小皮、小皮と入つてゐるのが特にめずらしい。こうした樂器類が多く入つてゐるが普通であるが、ここ原中組の囃子は、それらに三味線、大皮、小皮と入つてゐるのが特にめずらしい。こうした樂器類が多く入つてゐる程、その芸能が、庶民の生活にみつ着してゐるなりによりの証拠である。

星台囃子は、町にも村にも盛大に行なわれ、星台に舞台を作り、そこで地芝居を行なつたり、またひょっこ踊りを行なうなど、星台囃子は、かつて庶民の心の寄せどころであった芸能であったことがうかがえる。

伝統音樂の要素の深い祭囃子である。

神樂や獅子舞音樂の中にも、日本伝統音樂の要素を見出すことができるが、祭囃子程、その要素の深いものはない。形式的にも、星台、錦倉、昇殿、にんば、神田丸などと、日本音樂の形式を解明していく上に、西洋音樂にもまさる、りっぱな形式をそなえている。

また演奏形態やその技巧からみても、星台囃子の演奏者は、観衆が熟習してくれば、現代ジャズ奏者が行なうよくな「即興演奏」も行なうのである。それはすべて「笛方」のリードによるが、樂符もなく口から耳へと伝承されている囃子奏者が、このようなすばらしい外国音樂に共通する要素をもつてゐることは、こうした面の探求が、現在まであります。それらはすべて「笛方」のリードによるが、樂符もなく口から復等が、十数回も行なわれているが、それがわれわれの耳に、少しきこちなく聞えるが、こうした反復」とりあげてみても、星台囃子がすぐれた音楽的要素をもつてゐることが伺い知れる。

## 七、田 植 噴

前橋で田植唄が歌われたのは、太平洋戦争終戦直後まで歌われた。大正期に入つて、田植をするときに「田植なわ」の出現をみると、田植仕事の様式も変つた。しかし田植なわのない時代には、田植仕事の早い者が、先頭になつて二、三作を担当して植え、次々にあとに続き、声で後つたを歌つ。掛け声は田植え仕事に参加しているすべての者がうたつた。

田植唄とは、朝の唄、昼の唄、夕の唄、間の唄などあるが、一つの田植唄とは、朝の唄がはじまると、その日一枚が植え終るまで「朝の唄」を歌う。田植唄が當時田植に参加した人々に多く歌われ知られているのも、こうしたことからである。

田植唄の中には、一般的に歌われている歌詞内容のものと、地芝居などの影響から、忠臣蔵などを歌つたものや、ユーモラスな歌詞内容のなどもある。これらは、田植仕事がごく大変なことのために、少しでも仕事の疲労度を少なくするために、田植唄は歌われたのである。田植は協同作業で行なわれ、幾日も田の中にひたつたるので、ひえから腰の痛みがひどく、そのうえアビにさされる。こうした苦痛をともなうので田植唄をきいていると、あきさせず、仕事の能率の促進を田植唄によつて行つたのである。

玉村の出口の茶屋でヤーハノ三味がなる。三味がなる。

夕暮れに浜辺を行けば千鳥鳴く千鳥声くらべ  
夕暮に浜辺を行けば千鳥泣くもつと泣け泣け声くらべ  
おさなぶり  
君が田と吾が田の水、吾が田に廻れおさなぶり（荒口）

## 八、棒打ち唄

麦打ちは、午前十時から午後三時頃の間に行なわれた。この時間帯が特に麦のノゲ（ノギ）の落ちがよいので、庭に大麦の穂を二十七センチ程の厚さに広げ、近所の家と協同作業で行なつた。数人で向い合つて麦打ち棒（クリリ棒）で打ちながら、麦打ち唄を歌つた。声好しの者が歌い、

合いの手は参加者全員で歌つた。一通麦が打ち終ると、麦を足でひっくり返して打つた。麦打ちも過酷な労作作業であり、夏の炎天下で汗にまみれ、ノゲが肌について痛がゆく、こうした苦痛な作業を麦打ち唄でおぎなつた。

麦打ち唄の中で、特にユーモラスな唄が多いのも、麦打ち仕事がより

大変な作業であることが伺える。

赤城から沼田を見れば、沼田煙草は花盛り。

富士のおへ振袖きせて、奈良の大仏様にむことる。

お江戸見たくば世良田へござれ、世良田七宿七小路。

おばさんどこへゆく、三升だるさきて、嫁の在所へ孫だきに。

おれが隣りの味そ玉娘、嫁に行くとて、せんたくましたかが、へそが

出べそでヤレきらわれた。

へその出べそはヤレよけれども、しりがお棚でやれきらわれた。

しりのお棚はヤレよけれども鼻がおしでヤレきらわれた。

鼻のおしはヤレよけれども、□がわに□でヤレきらわれた。

富士の白雪は朝日とてける、とけて流れ三島で落ちる。三島女郎衆のヤレ化粧の水、ハーギツコケ、ギツコケ。

浅間山から鬼が尻出して、なたでぶつ切るような屁をたれた。ハーギッ  
コケギッコケ

どうせなら大きくなことなぐれ、世界質において〇〇〇でもなく  
れハーギッコケ、ギッコケ

盆はばたもち、昼まはうどん、夜は米の飯南瓜汁よ、ハーギッコケ、

ギッコケ。（荒口）

## 九、わらべ唄

### （）まりつき歌

高いとこのたけのこ、ひくいとこのひきがえる。

海ばたのなます子、煮てもやいてもなまぐさい。

うちの猫にくれたらば塩がからくてたべられぬ

酒屋のきつねにくれたらば塩があきくてたべられた。

今ちよい食べたいすここん、こん

てんとさ、てんとのおちさん、ころへんじ

鎌倉街道通るとき、白鳥、黒鳥、真黒々鳥

高崎、やしろの、やっこが米つく、粉糖がはねる。

一ちょめこめこさんき、一ちょめこさんさ。

こんやくぶらぶらーかんさん

提灯ぶらぶらーかんさん

一すけ、二すけ、三すけ、四すけ

こぼうのにつけ、まずまず一かんかしました。

おばんことつちやは何するの  
あした、およめが、来るからね。

栗一升、とんとことん、米一升とんとことん

ひいたりついたり、ごくろさま。  
ひいたりついたり、ごくろさま。

朝起きて、酒屋を見れば十七、八の小姑娘が、

一杯おり、お客様さま、一杯おりお客様さま

三杯目には肴がないとて酒だるるころがして

ひやふみやよ、五つむなや、このとう  
丁度一かん貰しました。

内のお婆さん、四十九で島田

嫁に行くとて孫衆が笑う、孫衆が笑う。

そことうやの林兵衛様は何か見たいのに  
包んで、包んで、ゆめの羽織かたとへ羽織が思つて

錦の鏡を鏡を、その鏡を誰にやるのじや  
お浜女郎衆にやるのじや、やるのじや

お浜女郎衆はどこへ嫁に行く  
錦の鏡を鏡を、その鏡を誰にやるのじや

お浜女郎衆はどこへ嫁に行く  
錦の鏡を鏡を、その鏡を誰にやるのじや

すず木すばらへ嫁にゆくすず木すばらじや  
松で目をつく、茅で手を切るほんこくりよほんこくりよ

下方へ嫁にやるのは夜機織るのが辛いよ、辛いよ  
糸きれで管を見それで油しめて

とうろとうろともつともうかいなら一夕

そこ四屋の水屋の亭主蛇に命をとられて

その蛇はどこよと聞いたら唐橋山の青大将

木にからまり柳にからまりうらの椿にからまり。

あれ見いさい、向う見いさい、いびよう風立てて、すころく  
すころくに九番まで二度と打つまい鎌倉々々へ上る。

雨宿々々のこ亭主様はどこへお茶のみにこ座るか、  
お茶よりも、お茶がしょりもかたわらの嫁が目にたつ

目に立てば、だいてねやんせかたわらの  
お経箱枕に、お経箱じや罰があるたる。

製袋と衣を枕に、製袋と衣じや髪がそそげる

ちゃんとお手々を枕に朝起きて宿を見れば

七つ姫がはた巻く、はたもまいたが管もまいたが

あやのかけよつを忘れて面白いとて鳥川へ身をなげた。

身は沈む髪は浮きる次第で流れた

おんどう泥々猫さんお前と私と駆落しよう。

どこからどこまで、駆落しよう

吉原園の真中で小間物屋でも始めしよう

一や二、三や四、五の六、七八九十

とうから下つてお芋さんお芋は一升いくらだね

二十五文にまけてやる、今よつとまけないかいちよらかばんよ。

お前のことならまけてやる隣のおばさんお茶のみおいで

頭を切るのは八ツ頭、尻尾を切るのは唐の芋

おらが前の白柳一本柳に金がなる

金のえから、ひしやひしやとタベもらつた花嫁御

芸者の座敷へ出したらばへちょへちょとお泣きやる

何が不足でお泣きやる何も不足じやないけれど縮緬着物に血がたれ

た、血ではあるまい紅だらう

洗川で洗つて、ゆすぎ川でゆすいで絞り川でしばつて

庭へはせば人が見し背戸へ干せば犬がみるし

うまやへ干せば馬がみるし、二階へはせば

かんかんちねずみが巣をつくる。

あれ高山新のわづらいの米ちゃん

をすらつて医者にかよとほんぱくしょ

医者もはいしやも私いやだ赤いたすきをねいちゃんに

はおの雪駄を赤ちゃんに、鉄砲なきな父さんに

雨のふる日もやらちらと雪のふる日もやらちらと

やや一、三や四、五、六、七、八、十丁度一貫貸し申した。

しんこしんでん、かみしも祭り寺は大寺坊さん一人  
姉さ姉さとかけをといで、箱根の山へとはせを並べて

お茶をたてて寄つてお上り、お茶でもお上り

お茶も煙草もきらいじやないがうちのお千代にくれたいものは

紅か白粉、梅香の油つけてよいが役から見れば

髪が八寸、島田が四寸、前の前髪一寸五尺

千両万両まづまづ一貫貸しました。

こんこんこ様のお嫁にはこんこん小袖が百七つ

これほど求めてやるからお嫁に行つても出でてくるな

朝は早起き七十五枚の戸をあけてすまからすまで掃き出して

手元のあかりで髪ゆつてじにさん、ばばさん起きさせ

今朝のおかすは何じやいな、四ひきの油をよそらうか

豆ふ一丁買つて來い、千両万両

とんとんたくは誰さんだ、新町米屋のおとさんだ

何来たの、ぞうりが切れて賣いに来た今頃ぞうりがあるもんか

歯かけ下駄でもはいて行きなびっこ、しゃこ、びっこ、しゃこ

ちよいと一貫貸しました。

あのやしまの光るものは月か星かはたるか

月ならば拌みますし盤ならば手にとる

もつともさうかいなら一夕

おほもんぐらから あげやの前までいわしわたいこんのかいこのとき

大きな きつねが すここんこん すここんこん

おほもんぐらぎやまらみのうらたかうら

米屋のきみきみ道中みことなことはるさき

向へば花むらさき 相川 千代川あいいろにそめて

信濃の善行寺やのせ このせ やつこのこのせ

あれみいき向ふ見ればほかけ船が一ちよう続く 二ちよう続く

つづいたお舟に お女郎のせておん客のせて

あとから やかた押しかける押しかける船頭がとめる

とめてもあいらにこしよいらぬ おんごしよいらぬ

あいらにかまふと日がくれる日もれようがお月も出ようが

さんしきやしきに出てはやす出てはやす お江戸ではやす

お江戸の名主の仲むすめ色白で桜色でいろさ庄屋へもらわれて

あの庄屋はだての庄屋で何々着せてあげましよう

絹袖に金らんどんにあやむらさきが七かさね

七かさね 八かさねそろへて染めておくれよ船屋さん

船屋のやくなら染めてもあげましよう張つてもあげましよう

お形は何々おつけやる うしろには雄子のめんどり

前には白さき 白ねずみ

おらが後の千松は 京へ上つて舟下し舟は何舟 かんと舟

かんと続いて支那まで支那の土産は何土産

一に香箱 二につづら三にさらしのお雑つて

誰に着せようと買つて来たおこよに着せようと買つて来た

おこよが死んだら道心ぼう道心なんぞといふのは

青竹 枯竹 枝にしてはまをはかせて裏まいり 向う山のなく鳥はちゅうちゅう鳥がめんどりか

忠三郎のみやげ、なににもらつた銀のかんぎしもらつた

やぶのかけに置いたらば忠々ねずみがひひつた

どこからどこまでひいて了縫街道の真中で

蜂に○○○をさされて 痛いともいはずかぬいともいはずただ泣くばかり

ますます一かん かしました（荒口）

## 〔二〕 羽根つき歌

おひよ、おはよ、おしめと女郎とどこへいざる。

お江戸へござる、お江戸の道で羽のはえた鳥と羽のはえない鳥と

ぎし、ぎし、はさ、はさくるりとはつて一かんさ。

一人来な、二人来な、三人来たらば寄つといで

いつ来てみても、ななこのおびを

やの字にしめて、くるりとまわちや一貫せ。

お正月の三日の日、大師様のお祭りで

おばさんのとこへ行つたらば、芋煮でつん出した。かぶを煮てつん

出した。いまちも食べたいといつたらば杓子で顔をつづついた。（荒口）

「お正月は三日の日、大師様のお祭りで、おばさんとこへいつたらば、いもを煮てつんだして、大根煮てつんだして、もうちつと呉れといつたなら、横目で睨めた。」

羽根は、ギンナンの実に鶏の羽を指したり、石を紙で包んで縛つたり

してついた。（下大島） 子もり唄 子守りつて樂なようで辛いもの。

雨風吹く時や宿はない。

人の軒場で日を暮らす。（下大島）

## 十、馬子唄

一にや追分、二にや輕井沢、三にや阪本、ままならぬ、ハイハイ

馬方しなくとも世に営業がなければ、私が一人立過すハイハイ

畜生どこを通る、木崎の宿よ、端には狸の穴もある、ハイハイ

伊香保出てから水沢までは、雨も降らぬに袖紋る、ハイハイ

私や太田の金山育ち、外に木はない、松ばかりハイハイ（荒口）

## 十一、機 織 歌

今はやりのはたおり娘主と梭と藍みじん。

可愛い主さん小筆で招く私や機織、おさで招く。  
主は正宗、私や鎌刀主は切れても、私や切れぬ。（荒口）

### 十二、その他の芸能・娯楽

藝人 ダイカグラは前橋中町の丸一が来た。浪花節、祭文語り、囃家、

（天山が来た）猿使いなどが来た。  
三河万才が来た。乞食万才という。二人一組で来て門付をした。

蒲原獅子は親方一人、子供二人の角兵衛獅子で、親方になぐられたり

可愛相だった。ゴゼは三人一組で一人は目のいいがいた。杖につかまつて饅頭笠を

かぶり着物を尻ばしょりして脚判を巻いていた。三味線を背負つて來

た。宿は大体決まっていて一晩が二晩とまり、そこでゴゼ歌を歌つた。

門付けもやつた。語り物は人情噺してしめっぽいのが多かつた。（下大島）

祭文語り、デロレンが来て、薬師様に泊つた。

神樂、三河万歳、春駒なども時期時期にやつてきた。

人形芝居はきたことはない。（荒口）

村に来た芸能人としては次のものがあつた。  
ゴゼ 盲とその手をひく人とがあつた。この村に一度に五人も来たこと  
があつた。三錢でも五錢でもくれてやると、いくらでも歌つた。たくさんく  
れると越後獅子をやつた。踊りもできたが、この方は目あきで  
あつた。

芝居 高浜喜久義が二の宮の青果市場へよく来て興行した。

浪曲師・曲芸は（一）、左衛門も来た。（西大室）

大神樂 前橋の丸一興業の大神樂が、下にはよきしたものだつた。

マルイチは前橋の飯田の興行師で、一年に二回車を引いてやつてきた。

泊る宿を求めて、そこでいろいろな演出をやつた。（荒口）

丸一神樂 前橋から来た。昭和になって一回、神社が出来たとき頼んで來てもらつた。（荒口）

三河万才 六〇年前まで來た。最後は三年づづけて來て終りになつた。（荒口）

十人ぐらいが一座になつて、二月ごろ巡回してきた。宿を一軒きめて泊り、新築などの扱い事のあった家と一晩いくらで賃貸して興行した。

三河万才のほか、芝居や民謡、踊りなどを、座敷を借りて演じた。昭和十一年ころ、十円だったのを五円にまかしてやらせたことがある。楽器

は鼓・胡弓・太鼓などを用い、かなりエッチなことを演じたので人気があつた。見物人は無料だつた。（下大屋）

正月にかぎらず、春になると毎年上の四・五軒にきまつてやつてきた。

重箱に米をやつたり（おさ）、五錢くらいひねつてやつた。村うわを流すとつぎの村へいった。泊ることはなかつた。（荒口）

カドツケ 三河万才、正月の終りから二月にかけてきた。昼は各家を廻り、夜はヤドでやつていた。（下大屋）

正月のうちに三河万才が一人組んで各家を回つた。才蔵が米を集め

た。（下大屋）

春駒 春、蚕の出る前に一人で来た。女だつた。男は見ない。馬の頭

を持って鈴をつけて、各家を門付けしてまわつた。

春の始めの春駒なんぞ、蚕の繁昌、ハネコメ、マイコメなどとメテタ

イ言葉を言つた。（下大屋）

鈴をつけて「夢にみていたは……」と歌いながらたまにやつてきた。

女衆が一人か三人だった。(富田)

祭文語り 観音堂の中で、デエロレンなどと語つたことがある。

錫杖をかついだり、鳴らしたりしながら、個人の家に泊ることもある。た。「せえもんせえ」なんていった。(富田)

虚無僧 めだつた家をえらんで、尺八をぶうーとやって、門付をしていた。(荒口)

福儀 「ヒトコロガシが千儀」などといながらころがした。何か芸があるともらいがよけいになつた。(富田)

ゴゼ 戰前は正月ごろ、越後からゴゼが回つて来た。宿を予約して泊り、荷物を置いて、から身で家々を回る。子どもがゴゼの手引きをしてくる。毎年同じ人が懇意になつた家へ来ることが多かつた。ゴゼは中年の女で首も、眼あきもいた。幾人かが組んで来て、泉沢へ二人、下大屋へ二人などと分かれ。昼間は近所の家々を回り、夜は宿に近所の人を集めて歌つた。門付の時に「一銭か二銭くれたが(いくらでもよい)、夜もお金をくれる人がいた。宿の寝泊りは無料で、ゴゼは固いから色恋に走らず、男は受け付けなかつた。(下大屋)

新潟(越後の蒲原郡)から来た。一人眼の見える者がいて、三・四人が一組になつてゐる。食事は四人が来れば四戸でたべ、食事を出した家で布団を宿をする家に運んで寝る。宿で唄をうたい、二十銭位与えた。屋根やの文ちゃん(吉原文治氏、親が越後の人で、夏は越後、冬は当地に住み、後に当地に住みいた)の家によく泊っていた。(下大屋)

二・三人が一組になつて来た。一人位目のいい人がいる。子供が多い。大体泊りつけの家があつた。固い家に泊つた。大体一晩で帰る。三味線をひいて淋しいような歌を歌つた。若い衆が集まつた。(小屋原)

決つて宿をする家があつて、泊つていつた。夜になると近所の者が寄つて、ゴゼの唄と三味線をきいた。(荒口)

毎年きた。同一人物がくるようだつた。泊めるといえ、荷を置いてひとまわりまわつてかせいできてから、宿に近所の者が集まつてきて、

お茶でも飲みながら歌をきいた。いくらかおひなりにしてやつたものだ。

(富田)

ゴゼが来て村の中に泊つたときは、宿に村中が集まつた。ゴゼの宿はほぼきまつていたが、宿札は金で払わず、ウタを歌つて払つたもの。もはつた金は出さないというゴゼの考え方だつたようで、その時分のハヤリ

ウタ(流行歌などを歌つた)。(苦子)

芝居 荒子の中でも舞台の人は、村の名前通り芝居の好きな人が多くてやつた。大正十三年に、いろいろの問題の解決がついて、その棍に芝居をしたことがある。青年が舞台つくりをしてにぎやかにやつた。(荒子)

明治時代には、飯土井にはシバヤキチゲエが大勢いて、一週間通じでやつた。仲間が五十三人いて、警察の取締りを受けたので東京へ出て行き、東京に寄留して手綱きをして鑑札を受けてやつたらしいである。

芝居をやるときは、ひとまわり三日、それを三回連続するもので、舞台かけには飯土井だけではなく、新井からみんな手伝いに來た。親せきだけではなく、その隣り近所の人たちも一緒に来るので接待も大変だつた。

ハナは半返しといい、返さなくともいい人の分は、金品の額を十倍にして書き出し、返しても二倍には書き出して披露した。ハナガエシは簡略なものはフタ(金券)で出した。舞台近くに露店が出てるので、店で買って間に合わせたこともある。(飯土井)

飯土井で芝居をやるときは、小屋つくりの手伝いに行く。(新井)特に曾我物語をやると雨が降るといわれ、あれのがつらいので、ローソクを上げて祀つておいた。(荒子)

浪花節 大正時代に青年会で毎冬のよう浪花節の興行をした。伊勢崎の桃中軒菊之助、花丸などを連れて来て、農家を借りて二晩も三晩もやつた。(下大屋)

猿廻 初午のころ、猿廻しが回つて来た。一銭くらいられた。(下大屋)

ノラボウ 乞食をノラボウといい、産泰神社のお祭りには、ぶつかりそきなほど集まつた。(下大屋)

引っぱりもん 見せ物で、大蛇などを持つて産泰神社のお祭りに来た。

(下大屋)

獅子舞 始めの獅子はわら細工で俄パンを作つてかぶり、ハイ繩でバ

クバクさせて悪魔払いに使つた。現在、神社に二組ある頭の古い方は京都から持つて来たもので、百年以上前、二度めは信州から持つて来たもので、やや小さい。二人立て、前の人のが頭をかぶり耳から鼻を吊り、模様を口でくわえる。後の人のが胸に入る。(荒沢)

獅子舞はシモの方から、あがつてくるようだつた。(荒口)

盆踊り 舞台をかけてやつた。学校騒動、白井権八、国定忠治、ママ

コ三次などを歌つた。

関東震災の日にやつていた。東京の火事が見える訳がねえと言つて、ポンテをかついで出かけた。

旧勢多郡内位の盆踊りには遊びに行つた。(小屋原)

義太夫 明治までは盛んだった。今年の年寄りの親の代には地芸居も

やつた。農家でやり、関係のある人はハナを包んだ。十銭包むと三十銭

という風に三倍に書いて披露した。

太閤記の台本などが残つてゐる。(小屋原)

力比べ 上の境内

に、六角の石塔だの、

真中がふくれてゐる

石塔のがあつた。ど

れも二十五六貫ある。

遊びに行つちや、

爆りにかついだ。

(二之宮)

力くらべは二十二



力石(東大室)  
(撮影)

貰はある供養塔で力くらべを行なつた。夜遊びの行きや帰りにかついで持歩いた。(荒口)、(今井)

若い衆は、力があつて腕ぶしの強いのが自慢だつたが、特にいせいのいいのをあればといった。外には、遊びにいけないので、村うちでよ

く遊んだ。(つきのよな遊びがある。

儀かつき競争、軍動会ではほかに、醤油樽に水をいれて、ふたつき

てかけるのがあつた。これは腕に力がないと足にぶつかって走れない。

軍隊では、軍装は六貫目もあつた。素手でかけてはおそいもので、軍装

するとはいのがいたが、たいていそれは百姓だ。

力くらべ、すもうや一升ますの上に立つて、儀をかつて石をかつ

いだりすることもやつた。石塔をかつぎは、二十四貫もある石塔をかつぐ

のだが、ついとかげばいいのを胸のところでゆするのかいた。あれは余裕があつたのだろう。たいていは半てんの標を切つたりして、女衆に

あたられた。(荒口)

相撲 インキヨの前の方でやる。土俵をついてやつたもので、我こそ

はという近隣の村々の力自慢がやつて來た。こうした人たちの間で八幡

講というのがあつて、殖蓮の人が中心で、この村からも二人入つていて、

大会をやるとみんな来た。相撲甚句もやつた。

村の人で八平さんが新井川、富田の人には庚申山という人がいた。(新井)

井 火花大会 村の中に火花師がいて、稀荷山に火花筒を二十本くらいふ

せておいてやつたといふ。筒の口径は四寸二分、ソクシン流といふ流派

と伝えられ、高く上がって下の方まで続いて光るものをつけついていた。

火薬をうんと使つた火花だつた。利根とはさんで東西対抗をしたことも

あり、日高のお宮の大会で優勝した額もあつたというが、火花で身上を

終らせた家もあつた。(新井)

映画館のハナ 昭和の初ころまでは、映画館に個人で入るよりも、团



二子山由来和讃の一部（西大室）

体でまとめて出すと、座ぶとんを出して、紙に書いて貼り出しえよろこんでくれたものであつて（飯土井）和讃 念仏と同じようになくとをしらべて、せんごのふたこはみなどもにせんごのふたこははやしのなかにしづまりてあかのふたこはぬまにつまれるごうごつしまれあたこのかふのそひがしりやうまる（西大室）

きみようちようれい こうづけのふたこのやまの ゆらいをばはせたのこうり おむろのふたこのやまの ゆらいをばたづてみれば そのむかしかたじけなくも じんのうは十一だいの おんみかどすいにんていの みよのことあづまのえぞを をししづめあまねくぶんかを ひろめんとすめみことよき いりひこのみことをはじめ こしそんをみむろわけや あらたわけそのぶんぶの いくさびと

くだしたまふて すまわせばこのけのくには みことらのおんとくあまねく おさまれりそのごおよそ にせんねんおんみささぎの しれざればちよつていては りやうもうのくにじゅくまなく しらべけりころはめいじの ととせあきまへふたこを ほりたにあまたのときや はにわなどこだいのしなじな いでにけりとどけによりて ないむしょくないしょうなど そのすじのかかりのひとや がくしゃたちとくとをしらべ なしたまふせんごのふたこは みなどもにはやしのなかに しづまりてなかのふたこは こりやうなるねまにつまれ こうごうしふたこのやまの そのひがしこれいじんじやの さいじんはみにむろわけの みことにていつきまつられおはしけり二子のやまは 三つありまへなかあとの みつにありかたちはいづれも おなじにてせんぼうごえんの たかきつかそのいしむろの つきかたや

いでたるしなにて ふたこことそ

とうときかたの みさきと  
すいでいるに かたからず

ろうじんかいの ひとびとは  
くるとしことの ひがいに

ごくのかみと たふみて  
ねんぶつとなへ あげるなり

なむあみだぶつ あみだぶつ

一伍流小太刀 浅山一伝故が編み出した流派で、赤堀の本間派のも

のより上位にあつたといわれ、招ばれて行つても上座についたといつ。

本間から頭を下げて目録を見せてもらひに来たということである。(文書

は石拂家にある)(飯土井)

子供の遊び 竹馬。独楽回し。鞠つき。お手玉。細螺

モンヅケ(トッコのこと)。皮のままの落花生を一つずつかけてやつた)

タコ上げ 秋から冬にかけてやる。

コマ 夏を除いてよくやつた。

ネツクイ 木の棒でつくり、角が出るようにした。

ブツツケ メンコのこと。戸などにぶつけて返つて来たものが相手の

ものにぶつかると勝つた。

オコシ ブツツケのかわりに下にある相手のものをへガス(裏返しする)

と勝てる。

竹トンボ 菊式のときなどにハヤカゴなどをつくった残りの竹で大人た

ちがつくってくれたもの。(荒子)

ハジキ昔はした。動物に握られてはいけないといつので。(下大島)

子供喧嘩 川をはさんで石の投げっこをやつた。山王の猿っ子などと

相手を馬鹿にした。(下大島)

草花の遊び お寺や神社の庭で、「ござをしてハツバでワニコを作つ

て、松バをハシをお客さんごっこをした。(富田)

ぶつちめ まわりが山だったから、ぶつちめをたくさんしかけた。学

校がえりには、ぶつちめまわりでくらくなつた。(荒口)

竹馬 てんかおとしをよくやつた。また、年上の者が大将になつて、

「どこまでもおれの後をついてこい」などといつて、一列になつて強

行軍をやつた。たいてい小さい子は途中でおちてしまつて、泣きたい

ほどだつた。(荒口)

竹トンボ かわかした竹でこしらえる。なれないと小刀で手を切ること

があつた。(荒口)

ネツクイ よそんちの山の木を切つとばして、ネツクイをつくって遊

んだ。おもしろいから、半日くらいネツクイのしどおした。(荒口)

あて字 ④の字を書いて、その上に砂をかぶせ、ぶつぶつと吹くと④

がでてくる。そんな風に遊びながら、学校に行けぬ子供も字をおぼえた。

親がそろつていれば、学校へ行くこともできたが、学校へ行くことも

なければ、おばあさんが針じごとをしているかたわらで、遊ぶことが多かつた。(富田)

草博美 子供の遊びで、草を刈つて、山にしたものの中に繩の輪を入れて、これに縫をさして当たものが草の山金龍を自分のものとする

ことができる。大当たしたものは、自分では草を刈らずに籠一杯にした。(馬の飼料の草を刈るのは、子供の仕事であった。(下鉄團)

着せかえ 小切れで人形の着物をこしらえた。どうもろこしのある時期には、とうもろこしの皮で着ものを着せて、毛で頭の髪をこしらえた。(富田)

あだ名 多くはない。村が大きくなることも関係しているかもしけない。

せんまんやん(二代の名前をつづけて)、すだれ、もちやもとひげ。(荒口)

男の子の遊び 兵隊ごっこ、竹トンボ、竹馬、ズングリゴマ(木で作つ

た。金の心棒、麻糸で紐を作つて回す。遅くまで回つた方が勝ち。相手のコマにぶつける。(水デッボウ、ハジキデッボウ、紙デッボウ(竹)裁にある、リュウノヒケの実を入れてつ。(ケットバシ)(シンゴをかいて、片足でケットバシを○印の中に入れる)。(下大島)

明治十三年四月 座敷淨瑞理興行願

座敷淨瑞理興行願

東京府下品川区南品川六丁目式百拾七番地

鶴沢清六 外三名

一、木戸銭 大人式銭 小人毫銭

右之者相属当村四拾四番地木村庄助宅ニテ本月六日ノ夜ヨリ同日八日夜迄三夜間興行仕度木戸銭之儀ハ前書之通申請御規則之趣堅ク相守り税金御上納可仕候就テハ不取締無之様且火之元別而注意可仕候間何卒右願之趣御聞済被成下度此段奉願上候以上

頼人 木村庄助 ㊞

明治十三年五月四日

根取群馬県令殿

南勢多郡下大屋村

頼人 鯉登将曹 ㊞

明治十三年四月廿二日

根取群馬県令殿

前書之通申出候ニ付奥印仕候也

戸長

阿部章作 ㊞

頼之趣聞届候条不取締無之様可致事

但所管郡役所へ届出日税上納可致事

明治十三年四月廿二日

明治四十二年三月下大屋村祭典に付規約

(下大屋区有文書)  
荒砥村大字下大屋村神社祭典ニ付燈籠連ヲ設ケ左ノ規約ヲ置ク

第一 条

一、燈籠連ハ大字本村之祭典費ヲ以テ神社祭典ヲ

献之前後取方付ヲナスヲ以テ道ニ定式トス

但シ費用ハ神社祭典費ヨリ支払フルモノニテ持役ハ社懇代是ヲ担任



木馬(キウマ)子ども手製のもの  
(阿久津宗二 撮影)

前書頼之趣相違無御座候間奥印仕候也

戸長 阿部章作 ㊞

頼之趣聞届候条不取締無之様可致事

但所管郡役所へ届出日税上納可致事

明治十三年五月四日

浮節興行願

御管下西群馬郡高崎新田町式百四拾八番地

吉川繁吉 外武名

一、木戸銭 大人毫銭六厘、小人八厘

右之者相属当村第式百四拾八番地木村六郎次宅ヲ借受本月廿四日夜ヨリ廿八日夜迄五夜之間浮節興行仕度木戸銭之儀ハ前書之通り申請御規則之趣堅ク相守り税金御上納可仕候就テハ不取締無之様且火之元別而注意可仕候間何卒右願之趣御聞済し被成下度此段奉願上候以上

南勢多郡下大屋村

頼人 鯉登将曹 ㊞

明治十三年四月廿二日

根取群馬県令殿

前書之通申出候ニ付奥印仕候也

戸長

阿部章作 ㊞

頼之趣聞届候条不取締無之様可致事

但所管郡役所へ届出日税上納可致事

明治十三年四月廿二日

明治四十二年三月下大屋村祭典に付規約

(下大屋区有文書)  
荒砥村大字下大屋村神社祭典ニ付燈籠連ヲ設ケ左ノ規約ヲ置ク

第一 条

一、燈籠連ハ大字本村之祭典費ヲ以テ神社祭典ヲ

献之前後取方付ヲナスヲ以テ道ニ定式トス

但シ費用ハ神社祭典費ヨリ支払フルモノニテ持役ハ社懇代是ヲ担任

タル事

第二条

一、燈籠連之年齢ハ拾才以上武拾才限り且ツ他ヨリ妻子トナリタル者ハ武拾五才ニ満タザルハ老ヶ年ヲ限リ加名スルモノトス  
但シ加名スルハ月日産泰神社祭日ヲ以テ是ヲ定ムモノトス

第三条

一、前二条ノ場合ニヨリ其年限内ニ於テ不正ノ所意アルト認ルトキハ一  
應連中ニ於テ説論シ若シ止マルトキハ總貲之決議ヨリ除名スルモノナ  
ルベシ  
但シ除名者ニ對シ後日朋友之交リヲナサザル事

第四条

一、例年祭日ハ左ノ順次ニヨリ  
一、産泰神社 春秋武期トス

二、八坂神社 七月拾五日トス

三、諏訪神社 八月武拾七日トス

御神燈費度分諸費金武円トス  
以上記載之外ハ臨時祭典トス例年之祭日ハ例年之祭典方法ニ依ルモノト  
ス若シ変更セントセントキハ其旨担任者へ届出担任者ノ同意ヲ以テス若  
シ同意ナクシテ猥リニ行フ事ヲ禁ズ

第五条

一、燈籠連ハ他ノ大字ニ於テ芝居又ハ諸祭典ニ付キ招待ニ出席スルトキ  
ハ其入花金祭典費中ヨリ負担セラルヲ以テ独立ノ権利ナキモノトス  
但シ本典ノ場合ヲ明知シ他人集合又ハ旅行者へ對シ猥ニ暴行又ハ悪  
口ヲナス事ヲ禁ズ

第六条

一、前五条之理由ヲ永久ニ継続スルノ目的トシテ毎年加名及退名スル時  
之ヲ良縁シ後任者ヘ言伝ヘ置クモノトス  
但シ後任者ハ前任者ノ相続者ナルヲ以テ認知スルモノトス

右之条ヲ大字協儀之上是ヲ定ム

明治四拾弐年春月參拾日

社總代

萩原

常五郎

岡田

連太郎

八木原

福太郎

● ● ● ●

裏書  
明治四十二年三月定定  
下大屋村 燈籠連規

(下大屋区有文書)

# 民 家

## はじめに

前橋市城南地区は、地区内のほぼ中央を東西に国道五〇号線がはしり、

国道は近年特に自動車の往来が激しく、朝夕は前橋市中心部への通勤者の自家用車も加わって、信号待ちの車が蜿々と長蛇の列をつくるありさまである。

今回城南地区の民家調査に入つて、まず、骨を折ったのは、明治初年

から江戸時代に満る民家を探すことであった。近代化が著しく、極めてめずらしくなった草葺農家を探して、第一表に掲げた各家の調査を行なつた。表中の石綿益太郎家は昭和四十五年

とり壊されてしまったものだが、解体直前に記録をとつておいたので、それを使用した。

第1表 地域別による調査民家の棟数

	地名	調査民家の所有者	棟数
合計	飯土井	石綿益太郎・石綿啓作	2
	二之宮	田所増徳	1
	荒子	高坂喜久治・森下わさ子	2
	茂木	茂木真太郎	1
	田沼	田沼彦一郎	1
萩原唯雄			
8	1	1	
下大屋			
合計			

調査にあたつて、暑い中を連日案内していただいた木村行正氏に感謝するとともに、農繁多忙中にもかかわらず、家の隅々まで早く見せていただき各家の持主に心から感謝の意を表します。  
(桑原稔)

## 一、調査遺構の分類

第一表に掲げた八棟の調査民家を復原平面によつて分類すると、次のようになる。

(1) 広間型……高坂喜久治家・田所増徳家・森下わさ子家

(2) 喰達四間取型……石綿啓作家

(3) 田字型……茂木真太郎家・石綿益太郎家・萩原唯雄家

(4) 五間取型……柿沼彦一家

次に以上の各形式に属する民家を順次説明する。

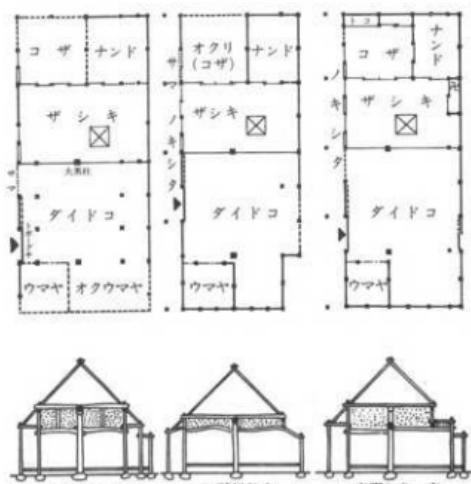
### （一）広間

広間型は全國的に広く分布する古民家の代表的間取であるが、本県でも平野部に分布する古民家の代表的な平面形式である。今回の調査では八棟中、三棟が広間型の平面形式であった。

#### 1 高坂喜久治家

三棟の広間型遺構中で最も古いものと思われ、復原すること古民家の特徴である閉鎖性が最も強く、ダイドコには上屋柱が一間ごとにたつていたことが知られる。

当家の平面および構成の特徴は、宮城村大字柏倉にある阿久沢秀夫家



図一、広間型復原図（平面図・断面図）

これらの草分けと伝えている。

当家の建築年代は、前述のように建築的立場からみても十七世紀に瀕るところから、いい伝えのとおり、高坂弾正忠昌信の孫「与五右衛門」が建立したものとみてよいかも知れない。

## 2 田所増徳家

復原平面（図一）によれば、柱間装置は高坂喜久治家に次いで閉鎖的である。例えばオクリ（コザ）の表側は半分を土壁とし、残りを「サマ」（註1）とするが、ザシキ表は高坂喜久治家にあった土壁の部分をも開放とし、前面に比べて建具を入れている点が注目される。また、ザシキとコザ境の間仕切では、差鷹居（註2）を使用して中柱を除去する新しい架構法を採用している。

梁間は高坂喜久治家と同じ四間であるが、表側に半間のノキシタを設けているため、ナンドとザシキの分だけせばめられている。

ダイドコ内は裏側に塗柱（註3）が一本独立してたっているだけで、高坂喜久治家のように多く独立柱がたっていない。その大きな理由は裏側では柱間に梁を入れて中間の柱を抜き取っていることであり、表側ではノキシタが設けられているため、外壁が半間後退し、本来ならダイドコ内に独立すべき上屋柱に外壁が設けられているためである。

当家は今日でも家号を「間屋」といい、江戸時代に間屋をしていた旧家である。屋敷の南側には立派な草葺の門と土蔵が接してたっており、間屋の時代をしのばせている。

当家には建築年代を証明する古文書やいい伝えなど全く残されていないが、建築様式から判断して十八世紀初期頃の建立と推定される古い遺構であると思われる。

## 3 森下わさこ家

当家は前述の田所増徳家よりさらに開放的になっている。例えばコザとナンド境はこれまで閉鎖されていたが、当家では半分を開放し建具を入れている。したがって、ナンドはザシキとコザの二方向から出入ができる。

（国指定重要文化財）のそれとよく類似しているところから、阿久沢秀夫家と同年代頃の十七世紀中期から末期頃の建築と思われる。

当家に伝わるい伝えによれば、先祖は武田信玄の率いる武田軍の四殿り隊をきり崩したことと勇名を馳せた。また、「甲陽軍鑑」の原本は彼の作といわれ、天正六年（一五七八）に没している。

荒子町に落ちついた初代は、海津城主、高坂弾正忠昌信の孫「与五右衛門」といわれ、当地に高坂の姓を名乗る家が四十数軒ほどあるが、そ

能となり、ナンドへの採光条件もそれだけよくなっている。

ナンドの機能は寝室であるため、古くは出入り口を除いた他の部分を土壁でおおい、暗く落着のある静かな部屋とした。しかし次第に社会生活が向上すると明るい活気のある空間が要求された。こうしてナンドに限らず各室が時代とともに徐々に開放されてゆくのが民家の持つ特徴である。

コザの機能は客室に相当するため、当家では西側にトコとトダナが設けられている。

サシキは中央部のダイドコ寄りにイロリを設け、このイロリを開んで、家族の団らんや軽い来客の接待が行なわれた室であるが、また、収蔵も主にこの室で行なわれた。さらに、脱穀された穀は湿氣をさけるためザシキに山積し、ダイドコで粗挽した原糸もやはりサシキに山積みされた。このよう広間型におけるサシキは、居住空間でありながら生産空間でもあつたため、機能的にダイドコとの結びつきが強かつた。故に広間型におけるサシキとダイドコ境はどちらも建具を入れてはいる。

当家はダイドコの裏側の上屋・下屋間に太い梁を入れて上屋柱を省略している点が構造的に新しい点である。

当家も建築に関する記録やいい伝えはないが、建築様式から一八世紀末期頃に建立されたものと推察される。

## (二) 喰邊四間取型

### 1 石締磨作家

広間型におけるザシキの裏側に奥行の浅い小室を設けたものが喰邊四間取型で、広間型が発展して生まれた形式と考えられている。

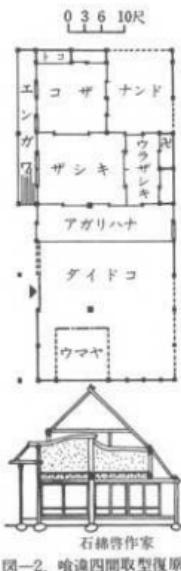
当家はダイドコの上部に二階を設け、ダイドコの上部前面の屋根を中央より妻折まで切り落としためずらしいかっこいい屋根形式をつくり、こより二階れ採光している。

コザとナンド境の間仕切では土壁の部分が消滅し、總べて建具になっ

ているなど広間型の新しい造構よりさらに開放的になっている。また、

コザとザシキの前面には当初よりマレーン形式のエンガワが設けられていた。

当家は平面および構造の特徴から、一九世紀中期頃に建立された造構と推定される。



図一-2. 喰邊四間取型復原図  
(平面図・断面図)

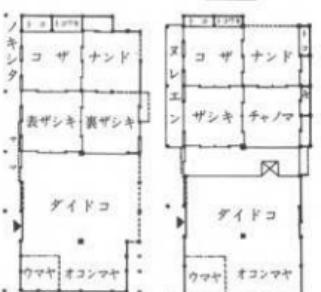
当家は田字型では古い造構に入るもので、表ザシキの前面にはサマを残しており、コザ表とコザ、ナンド境およびカンド、裏ザシキ境の各間仕切に中柱をたてている。また、ダイドコと表ザシキ境の間仕切には建具を入れているが、ダイドコ、裏ザシキ境では建具を入れず旧態を残している。

小屋組は特殊な架構をして小屋裏を利用できるよう考へられている形を示している。

当家は以上のよう平面および構造の様式からおよそ一八世紀末期から一九世紀初期に建築された造構と推定される。

当家は家号を「鴻ノ池」といい、江戸時代には「組頭」役を勤めていたもので、それを証する「田畠水報」等が残されている。

0 3 6 10尺



石綿益太郎家

百万遍という驚異的な「願掛け」を行なっている。当家の西側、道路端にはこの願掛けを伝える石碑が今日でも家、屋敷を見守るかのよう立っている。

その後、儀八富章は前橋藩の剣道指南役に登用され、多くの門人を育てたといふ。

当家に伝わるい伝えによれば、宝暦年間伊勢崎藩に属する隣村と石綿家が名主をする飯土井村(旗本領)との間に水利権をめぐる争いが起つたが、当村の方が勝ったといふ。しかし、争いに負けた人たちの腹いせによって放火され、石綿家は全焼した。そして、宝暦二年(一七五二)に儀八富章の父親が建つたのが、前破風造りの住居であると伝えるが、建築様式から推察すふともと新しいようである。

民家における前破風造りは他にみられない貴重なものであったが、時代の波と生活様式の変化に追いつけず、関係者に惜しまれながら昭和四十五年十二月ととりこわされてしまった。したがつて、ここに掲げた当家の記録はとりこわされる前に調査した記録を用いたものである。

#### 四、五間取型

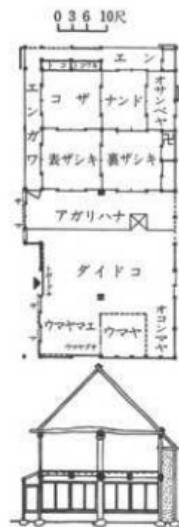
##### 1. 植沼彦一郎家

当家は桁行約十、五間、梁間約五間で民家としては規模が大きい部類に入る。

平面形式の基本形は、田字型に入るべきものと考えられるが、ナンド

範の免許皆伝を受けた。

武士ではない者が剣道師範の免許皆伝を受けるのは、当時大変むすかしかつたらしく、免許を受けるのに先立つて、儀八富章の母親はなんと三

図4、五間取型復原図  
(平面図、断面図)

の裏に奥行一間の「オサンベヤ」を設けているので、五間取型とした。

ダイドコではウマヤを裏側寄りに設け、ウマヤの前面を「ウマヤマエ」と呼び、表側にサマを設けてこより採光し、ここで主に糸を訪いた。

また、ウマヤに接して東側にはトボーグと区別して、ウマヤグチが設けられ、主に人間の出入するトボーグと馬の出入のためのウマヤグチが別個に設けられているのも新しい方法である。

部屋境の柱間はどれも一間にとられ、中柱を除去して差鶴居を用いている。

ダイドコには「アカリハナ」が張られ、奥の方にイロリが設けられて、裏ザシキ、アカリハナ間の間仕切には建具も入っているなど新しい手法が随所にみられる。

架構ではサス受梁を二階床より七尺以上も上に架けて広い二階を造り出し、屋根は赤城型として南面中央部より採光している。



高坂喜久治家（広間型）



高坂喜久治家、トボーグチのすぐ内側に立つ上屋柱（袖摺柱）



高坂喜久治家、ダイドコの裏側に立つ上屋柱（蓋柱）近くにみえる「シメナワ」は蓋神様をまつたもの。

以上のように当家は民家としては、最も新しい様式を示し、民家における一つの完成された姿を表現していると考えられる。

いい伝えによれば当家の建築は、明治一年に着工し、同六年に完成したものであるというから、完成以来今年で百一年目に当る。（桑原 稔）

〔註〕

1……窓の一種で、窓台の高さを床面から約一、五尺ほど高めて、この上面に格子棒をはめた窓のこと。

2……中間にある柱を取り除くために、梁をかねた背の高い鶴居を使用し、中間になつべきはを、この鶴居の上にのせる。このように梁をかねた背の高い鶴居のことをいう。

3……この柱の近くに昔はカマドがえらんでいたと考えられ、そこから来た名前であろう。時にはこの柱に蓋神様をまつてある家もある。

4……勢多郡宮城村幕毛石には現在の子孫がおり、当主は北爪政則氏である。道場は当主頭削ぎになつてから閉鎖したといふ。当家は江戸時代から明治・大正・昭和の初年頃まで剣道場を開き、神道流・荒木流・一伝流を伝えた。



森下わさこ家（広間型）



田所増穂家  
「間屋」の時代をしのばせる草葺の門と土塀



石綿啓作家（嘘連四間取型）  
土間上部を2階とし、2階の開口部を中央より土間  
部の妻桁まで広くとっている。



田所増穂家（広間型）



石綿啓作家の大黒柱



田所増穂家の梁柱



柿沼彦一郎家の「大黒柱太く立派なものである。」



茂木真太郎家（田字側）  
屋根の形式は2階開口部の背が大変低く初期の「赤城型」を示すものである。



柿沼彦一郎家の「トコ」と「トコワキ」



石綿益太郎家（田字型）  
屋根前面の中央に千鳥破風を設けたもので「前破風造り」といい大変めずらしい屋根形式であった。  
昭和45年12月とりこわされてしまい現存しない。



柿沼彦一郎家の2階、高いところに小屋梁が架けられ、内部は広々としている。



柿沼彦一郎家（五間取型）  
2階開口部の背が高く、幅も広くとられ発達した「赤城型」の屋根形式を示す。

## はじめに

調査にあたっては、当初から生産・生業に關係した用具、特に農耕、養蚕に関する用具に焦点をしぼつてあたることとした。したがつて分類も次のようにした。

## 一、直接の農耕用具

## 二、脱穀調精用具

## 三、運搬用具

## 四、養蚕用具

## 五、製糸用具

## 六、わら加工用具

城南地区は、地理的には中毛に属するわけであるが、赤城の南麓に位置する天水場の農村地帯であるため、農具の中にもそれが現れている。即ち、桑園の中耕に用いられるクワバラマンノウで、一般的にはテンガ、エンガを使用する中での所見であるため、さらにこのひろがりを追求してみる必要がある。また開こん用具としてのクロクワも、トウグワ（唐振り）との関係が問題となる。ナツマンガとアキマンガ、ヒトリマンガ、フリマンガも興味をひかれるものである。

脱穀用具のクルリ棒のことをボウチボウということは、城南地区で初めて聞いたことであるが、棒打ちの棒がクルリ棒になつても、その名称がそのままクルリ棒にうけつがれることにおどろいたわけである。養蚕具の中では、桑の葉をもいて蚕にくれるために使つた桑もきぼうちょつがある。古くは、枝を切るために使つた桑切り鎌あたりを転用してみられる中で、専用のはうちようを持つていたことはおどろきである。また桑を入れて運ぶエカキ（一種の背負いかご）が、嫁のお節句の長さ四五cmのイモホリマンノウ 里芋、さつま芋、じゃが芋、こんにゃく芋などの芋振り用の万能鉢。耕う機やテンガで振りよりも芋をいためず、しか

贈答に關係し、タナモンゲエシとして実家から贈られるることは、養蚕地帶らしい習俗であり、東毛などで其を贈るものと対比される事例である。

伊勢崎、前橋にはさまれて、早くから糸ひきや貨機がさかんに行なわれたこの地区で、製糸、機織りに関する用具がみられなかつたのは、用具が大きいため、不用になつた時点で早々に処分されてしまつたため、オサのように上棟式の祝い品として棟木に結びつけられて姿を消したものもある。

本調査にあたつては、飯土井の石総信雄氏方に所蔵される農具その他の資料を利用させていただいたことを付記したい。（阪本英一）

## 一、直接の農耕用具

クロクワ 畑専門で、開こん用や、桑根つ子振りに使う鍬。よく切れ扱い良さからさかんに使われた。刃先が減るとボウヤへ行つてサキガケをしてもらつて使う。柄と刃の角度はかなり大きい。

開こん鍬 クロクワの後に入つて来たもので、トウグワとはほぼ同じじうであるが刃の巾が広い。開こんと桑根つ子振りの道具。

トウグワ フつうに使用される道具で、こぼうやにんじんを掘るもの。柄の長さ九〇・〇cm。

クワバラマンノウ クワバラ（桑園）専門のマンノウで、クワバラのサクキリ（中耕）をする道具。昔は、春（六月）と秋（十一月）の二回中耕をしたが、最近は春も三月に一回やるだけで土の中（草を埋めこむこともなくなつた。

柄の長さ一二〇、刃は三本、四〇cm。

テンガ 農作業一般に使用される。フロ鍬で柄の長さ一二四・五、刃の長さ四五cmのイモホリマンノウ 里芋、さつま芋、じゃが芋、こんにゃく芋などの芋振り用の万能鉢。耕う機やテンガで振りよりも芋をいためず、しか



クワバラマンノウ（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



開こん鋤（阪本英一 撮影）



クロクワ（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



柄グワ（下大屋）(関口正己 撮影)



テンガークワキソゲがついている（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



シャクシ（鋤）（飯土井）(阪本英一 撮影)



イモホリマンノウ（飯土井）  
(阪本英一 撮影)

も能率的である。

柄 一〇四、刃 二五

柄歎 小豆や大豆畑をうなつたり、アキッパタケウナイといつて大根などをまく畑をすき起こした道具。ひとさくを往復してやるもので、一日一人で一反くらいやれた。柄のつけ根の方にクワキソゲとよばれる竹べらをつけておいて、刃についた土を落して作業した。足をかけるところのフミ板がある方が使い良かった。柄 一七〇、刃 九八

シャクシズキ スキがシャクシのよう見えることからこの名がある。明治・大正（末ころまで）使用したもので、中央のくさびの位置を上下することによって深くも浅くもすきおこせる。また左右の両方にすき返すことができる。

チヨウナ シャクシズキの後、大正末から昭和二十年ころまで使用されたスキで、大工の使うチヨウナに似ていることから名がついた。小形化して扱いやすくなつたが、一方ガエシしかできないので、田の中を円形におこしてまわることになった。

ナツマンガ 田植えのときは、飯土井の辺では田を二回かくといふ。ナツマンガで田をかいてアラクレをしてから水をしぶり、再びすきおこして（ナカスキ）から肥料をふって、もう一度水をはりこんで仕上げのシリカキをしてようやく田植えになる。田が固く、水も不足するので、うやつて水もちをよくして来たわけである。水のある中で田をかく用具であるため刃が短かくつられ、秋の麦まきに使つマンガと区別するためにナツマンガといわれる。

柄 六五・〇

刃 一五・〇

高さ六〇・〇

横 六一・〇

金長一三三・五

ムツゴ ロッポンゴともよばれるが、六本の刀をもつことからついた道具。鍬やアサクワ（くさかき）で掘りおこした草をかきよせて集める

平鉢。トロイモ（ヤマイモ）掘りの鍬といふことからトロホリの名がついている。

柄 四八・五

高さ六〇・〇

横 六一・〇

金長一三三・五

アキマンガ 麦まきの整地作業のときに使う用具。すきおこした田をアキマンガでおこしてこなし、その後アリマンガとよばれる重いものを使って仕上げをする。ナツマンガとちがい、水のないところでかくので

刃が長くつくられている。

柄 六五・二

最大巾九三・〇

刃 一九・五

ハヤオカケ 二五cm（木製）

フリマンガ 苗代づくり（オカ苗代）のときなどに、マンガで跡土したあと、さらにこまかく碎くために使用する。環にひもをつけ、二人で向き合ってなわの長さをそろえ、気を合わせて左右にふり、かにのよう横に進むもので、夫婦マンガともいわれる。

五三・六×七七・五cm

刃は九本三列、八本二列

ヒトリマンガ 三月の彼岸ころ、麦畑の中に残っているオカボのカツバをこなして出すときに使う。両手でマンガの柄をにぎつて左右にふつ

て、オカボのカツバをつかす（はじき出す）ようにたたき、その後はムツゴ（ロッポンゴ）でかき集めて畑の外へ出す。

柄 四八・五

高さ六〇・〇

横 六一・〇

金長一三三・五

ムツゴ ロッポンゴともよばれるが、六本の刀をもつことからついた

名称。鍬やアサクワ（くさかき）で掘りおこした草をかきよせて集める道具。

ムツゴ ロッポンゴともよばれるが、六本の刀をもつことからついた道具。鍬やアサクワ（くさかき）で掘りおこした草をかきよせて集める

アキマンガ 麦まきの整地作業のときに使う用具。すきおこした田をアキマンガでおこしてこなし、その後アリマンガとよばれる重いものを使って仕上げをする。ナツマンガとちがい、水のないところでかくので



オオブリマンガ（上増田）（中村和三郎 撮影）



チヨウナ（鋤）（飯土井）  
（阪本英一 撮影）



コマンガ（上増田）（中村和三郎 撮影）



トロホリ（飯土井）（阪本英一 撮影）



ナツマンガ（飯土井）（阪本英一 撮影）



ムツゴ（飯土井）（阪本英一 撮影）



アキマンガ（飯土井）（阪本英一 撮影）

で、刃が馬蹄形になつており使用法はサンボンゴと同じであるが、馬小屋の敷きわらを出したり、堆肥を扱つたりするときにも使用される。

柄

刃 二四・五  
柄 九〇

オカナエカキ オカナエシロ（水を入れずにつくった苗代）をつくつて、種もみをまくと、その上に土をかなりの厚さにかけて種もみをかくすように覆うので、芽が出るとかぶせた土をかきとり、同時に草とりをしてしまう。そのときに使う道具がオカナエカキで、麦さくの間にまたオカボの場合には、ふたつ葉くらいになつたときにこれでかくと草がはえなくてよい。板に釘をつけて自分でつくる。柄は大きいものもあるが、片手で使える小さいものもあるという。

柄

刃 一五（曲がり部分一〇 cm）

タコ 新田をつくったときに土手をしめてクレ（芝草）を植えるときに使つ。土手がぬけてしまつたときもこれでついて固める。木はひのきの丸太で、柄は先の方でひろがるようにつけておく。一人使いの道具である。

柄

刃 二三八

二すくぎを三列ほどに打つ

二九・五×八・五 cm

タコ 新田をつくったときに土手をしめてクレ（芝草）を植えるときに使つ。土手がぬけてしまつたときもこれでついて固める。木はひのきの丸太で、柄は先の方でひろがるようにつけておく。一人使いの道具である。

全長 一〇〇  
本体絶長 一三・五

ジョリソ 川砂利をさらつてとつたり。春秋の道普請などで使うのに都合のいい道具。つるのところを一方の手でかけてつるを上下して刃の角度を変えて使えるよう、つるは柄に固定しないで動くようにしてある。トウが細みこんであるので水のこけがよい。

柄 八〇、刃 一二四  
ジョリソ トウを使ったものよりずっと最近のもの。重いので力は入るが、砂利道をかくにも、水の中のものを上げるにも、角度の調節もできないのでぐあいが悪い。

ガソメ 飯土井辺は用水の末端にあたり、水に苦労しつづけた米作りをしてきた。田植えのとき水を入れた程度で、田の中がひび割れ、雑草が一面にはびこる夏には、養蚕以外はすべて田の草とりをすることもあつたという。こうしたときガソメが頼りであった。

柄

刃 一二二

アサクワ 草とり専門の農具。刃が七寸（二一 cm）くらいが仕事がしやすいという。一日アサクワで畠をかけば、相当量の仕事ができる。

柄

刃 一二一・五

刃巾 六・五

七・〇

尺タテナワ 田畠のサクをたてるときにサク巾をきめるための目盛りを棒につけてあり、これで尺棒を兼ねさせている。ナワはミゴナワを使つた。

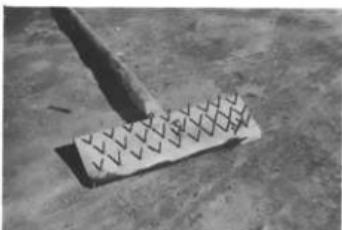
尺棒は一二六 cm

田植えなわ 田植えをするとき、さくをきめるために目印のなわをはつてやるが、水の中でもしつかりはつておける金属製の田植え繩を使つようになつたのはひかくのことである。足が一本のものと二本のものがある。（上増田）

シャクリ棒 田植えのとき、植えつけのさく巾をはかるものさしにあたるのがシャクリ棒で、これに合わせて田植え繩をはる。（上増田）

鎌カケ 鎌にも草刈り鎌、麦刈り鎌、桑刈り鎌、稻刈り鎌など各種、多數使用するので、その保管にいろいろの工夫がある。板に切りこみをつくつてこれにかけるのや、麦わらを束ねてこれにさすものの外、刀架のよう鎌をかけるのもくられ、安全、へんりなようにしている。

カマ 戦後、酪農をやるよくなつてから入つて来たカマで、牧草刈



オカナエカキ（飯土井）（阪本英一 撮影）



ニホンゴ（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



ジョリン（飯土井）（阪本英一 撮影）



タコ（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



ガンヅメ（飯土井）（阪本英一 撮影）



ジョリン（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



田植え繩（上増田）  
(中村和三郎 撮影)



尺たて繩（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



アサクワ（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



カマ（飯土井）(阪本英一 撮影)



シャクリ棒—田植に使う（上増田）  
(中村和三郎 撮影)



牧草カマ（飯土井）(阪本英一 撮影)



镰かけ（下大屋）上から1、草刈り镰、2~5、水刈  
り镰、6、稻刈り镰、7、桑切り镰 (開口正己 撮影)

りに使つるもの。

一八〇

柄

刃

三一

巾

七

cm

牧草ガマ 五年ほど前から使い出したヨーロッパ系のカマで、両手でにぎる柄がついていて、腰を立てたままで牧草を刈ることができる。砥石も専用のものがついている。

柄

一四七

刃

七六

cm

巾

高さ

一

cm

目

〇・四一〇・五

cm

径

六〇・一六

高さ

一・三・五

cm

二、脱穀・調整用具  
カナゴキ 千歯(こき)のことはカナゴキといい、足ふみ脱穀機の普及する以前(大正ころまで)はこれで穀(こき)をした。これは、「若狭国産寺川別撰正鋼請合」と銘があり、木製のふたがセットになっているものである。

巾

高さ

一

cm

目

一・八

cm

刃長

三二・三

刃の広がり

三三・二(刃数一本)

ボウチボウ クルリ棒ともいうと、一般にはボウチボウという。麦・大豆・小豆の脱穀用具。暑い日に、庭へ麦をひろげてまわりから並んで打ち、ぶちきると円形に足でかいて返して乾かしておき、さらにも打つた。これをふるいでふるって、唐箕にかけて仕上す、俵づくりをした。大正末ころまで使つた。

柄(竹)

一六二・くるり

一〇・五

フルイ スズ竹製のフルイであるが、近年使つていないので何を選別するためには使つたものかわからないという。フルイの目からみて米・麦

用とみられる。

経 四二・五

高さ 一〇・五

アメブルイ 大豆の収かるとき、ボウチボウでぶつた豆を、アメブルイを使ってふるって調整する。スズ竹で編んであり、軽いが丈夫なものである。

高さ 六〇・一六

目 一・八

cm

刃長

三一・一

ケブルイ・スナブルイ フルイ(籠)にも何種類があつて、小麦粉を

ふるうコナブルイ・麦蓋に使つて石灰ブルイ、米や麦の中に入つた砂をふるうための砂ブルイ、麦をふるう麦ブルイ、豆の豆ブルイなどで、それ大きさ、籠の目の大きさでちがう。またスズ竹製、布アミ、金アミなどのちがいもある。(上増田)

万石 米の選別に使用される用具。(下増田)  
斗ますと斗かき棒 穀類を重さでなく、量目で依装したり、取引きし

たりするときには、一斗という量がさかんに使用され、マスの上を水平にするための棒(斗かき棒)と組み合わせて「斗ます(斗ます)」が使われた。

斗ます

高さ二七・五

cm

棒 長さ四四・五

cm

高さ六・二

石臼 粉ひき臼で、大正のころ、赤堀村の品田石材店で注文生産した

もの、少し小さめで石臼の穀を入れる部分が浅く、下臼は底部がやや未

広がりになつてある。

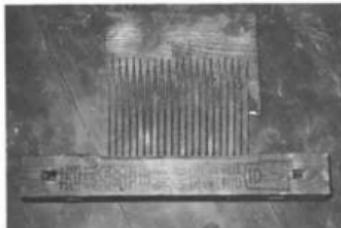
上径 二九・五



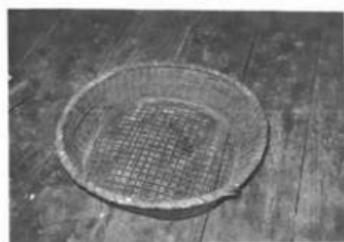
万石（下増田）  
(中村和三郎 撮影)



棒打ち（上増田）  
(中村和三郎 撮影)



カナゴキ（飯土井）(阪本英一 撮影)



マメブルイ（飯土井）(阪本英一 撮影)



石臼（飯土井）(阪本英一 撮影)



斗枠（下増田）

(中村和三郎 撮影)

文久三癸亥正月吉日求  
上野國勢多郡  
下増田村  
板垣伊右衛門  
志斗入  
升かき  
二寸六分  
深五寸八分八厘



左の二つがケブルイ、右がスナブルイ（上増田）  
(中村和三郎 撮影)



斗ますと斗かき棒（下大室）(間口正己 撮影)



カナツノ (メドウシ) (飯土井)  
(阪本英一 撮影)

高さ 一四 (下臼)

一一 (上臼)

三六 (柄をついた場合)

カナツノ メドウシともい、

タワラゴサイ (儀表) をするとき

に繩を通すための針にあたるもの

で、エゴ、またはウシコロシ (マ

ユミ) の木を使用して自分でつ

くる。メドウシ作業は雨の日とき

まつており、秋の雨降りの日に、

二階に上ってやった。少し曲った

木を使い、全長二一・二三cm、一

### 三、運搬具

ツミザマ 田畠で堆肥をツム (まく) ために使用するかこのことをツ

ミザマという。底にナワをつけて左手をかけるようにし、肩からはカタ

カケナワをかけてツミザマの前方にひっかけて安定させて使う。カタ

カケナワは、雨の日に裾むもので、三本のわらでクミに編む (真田ひも

にする) ので肩にあららないようにしてある。

口径 四四、深さ 一二六

ジユウロウター 龍を背負う時背中にあてて用いるわら製の用具。両手を通して着用できるようにつくられ、一見チヤンチヤンコ風のもの。

(泉沢)

たて 五一  
巾 一二四

カサカケ繩 草刈り籠の上部に一本のなわをつけておき、草を籠に山

になるよう積むと (カサカケル) これをしばるのに用いる。(泉沢)

ヤリ 杉丸太を利用し、両端をとがらせたもので、麦稭や稻束、あるいは草束などを集めたりするときに使う道具。稻束に突きさして両方に

つけて担ぐので竹でつくることもある。

長さ 一九五・五

ニナイモッコ 担架式に二人で運搬する用具で、家中にあった馬小

屋から厩肥を運び出す作業に使用することが中心になった。柄は杉丸太、

アミ部分は繩で編むが、ものの大さきに合わせて次のものをつくるといふ。

柄の長さ 一三三五

アミ 中 八七

長 九八

ピク 姦まき肥料運搬に使う馬用の運搬具。馬の荷輪の上にのせ、ナワ

アミを下に下げて、ツミザルに八杯ずつ入れて運搬し、おろすときは同

時に下の口を開けて落す。(積みこむときは一方に突っかい棒をしておい

て交互につめる) このピクには、ハシゴとよばれる木枠の部分の中央に

支柱を入れず、ナワの廢物を利用してるのが珍しい。

一四一×五二・五

荷輪 馬の背にのせて固定し、堆肥を運ぶピクをつけたり、木の葉を

運ぶコノハモッコなどをつけて運搬した。(下増田)

シログラ 田植えなどで鉤や代鉤を使うときに馬に背負わせる輪。主

要な部分の木はコウカンボウ (ネブタ) を使い、マンガやオングをひか

せるためのなわの端は、シログラの前方にアソビとして巻きつけてお

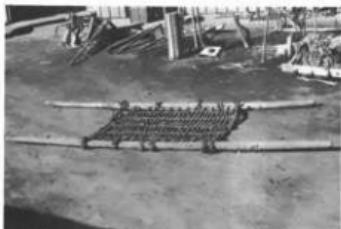
く。このなわのことはハヤオナワといい、正月十一日に、ダイドコハ

シゴをおいてそこになわを下げてない、なった部分をハシゴのコマの向

うに下げるようにするのをきまりとした。

馬のハモ 馬耕用の用具で、馬の首につけて鉤をひかせるのに使つた。

(下増田)



にないもっこ（飯土井）（阪本英一 撮影）



堆肥用の籠（下大室）  
(関口正己 撮影)



びく（飯土井）（阪本英一 撮影）



ジュロータとカサカケ籠（下大室）  
(関口正己 撮影)



馬の荷ぐら（下増田）（中村和三郎 撮影）



しろ鞍（飯土井）（阪本英一 撮影）



やり（飯土井）（阪本英一 撮影）



馬のハモ（下増田）  
（中村和三郎 撮影）

#### 四、養蚕用具

**蠶欄** 条桑育が普及する以前はすべてカゴ飼いだったので、家の中に蠶室をつくり、蠶欄を組み立てて飼った。蠶枠を立て、竹をなわで結びとめて組み立てるものが中心で、一列十段のものを三列のときは三十棚、三列なら二十棚とした。最近は稚蚕期と、上簇に使われる程度、カゴ台 蛹室時、給桑やウラトリ（除沙）作業に使用する台。ひろがりすぎないようになわをつけて高さを調節している。ウラトリ作業には二台必要。

イキヌキ 蛹室の天井にかけて（二階に）室内の悪い空気をぬく道具。下の温度により、イキヌキの上によたをかけたり、とつたりして調節する。

底部	三六・三×一九・一
上部	一九・八×一六・八
高さ	六〇・〇四

**種箱** 蟹種保存用の箱。この中にタネ紙をさしこんで春まで保存する。自家製とみられ、中のじゴは欠損している。蓋に墨書きがある。「明治參拾三歳四月拾七日新製、群馬県勢多郡荒砥村大字飯土井、石綿養蚕家器具」

たて 二九  
よこ 四〇・五

高さ 三〇

きたケゴ（稚蚕）を蚕座に掲きおろすもの。鷹の羽根が最高という。

小	全長 四一・〇
柄	一一・五
大	全長 四九・〇

柄 一三・〇

稚蚕箱。特に一齡期の飼育に使われる箱で、側は松または杉木で箱とし、底にはトタン板をはつてつくる。大工に頼んでつくってもらうことが多いが、器用な人は自分でもつくる。二齡になるとカゴに入れ

て飼う。

たて 六〇・〇

よこ 九〇・五

深さ 一〇・二

桑きりばうちよう かつてさかんに養蚕をしていた當時、稚蚕飼育には、桑の葉をこまかく刻んでくれたもので、そのためのはうちよう。刃

の四角のものは全長三五・〇、三角のもの三七・〇 cm

桑もぎばうちよう 春蚕の五齡ともなると給桑が大変になるが大正末年ころまでは、桑こきの良いものが多く、カゴ飼い用の桑は、昼も夜も、桑もぎばうちようで枝はらいをしてもらってくれた。長さ三〇・一三二・四

桑こき ほうちようで桑もぎをした苦労からの発展で、桑の枝を桑こきではさんで、こいて枝おとしをするようになって相当能率的になった。小さいものが全長一三・五、大きいのは一五・三四

桑ぶるい かつての養蚕では、桑をこまかく刻んでくれる飼育法がさかんで、給桑用の桑ぶるい（肺）が使われた。一齡、二齡、三齡に応じた籠がありこの中に刻んだ桑を入れてふるうようにして給桑した。



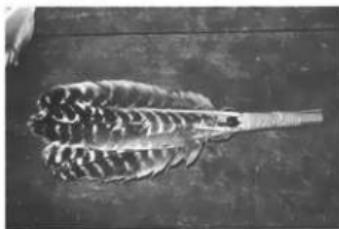
飼育箱（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



イキヌキ（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



蚕棚（下大星）  
(開口正己 撮影)



羽根ぼうき（飯土井）(阪本英一 撮影)



かご台とかご（飯土井）(阪本英一 撮影)



桑切りばうちょう（下増田）(中村和三郎 撮影)



桑もぎばうちょう（飯土井）(阪本英一 撮影)



種箱（飯土井）(阪本英一 撮影)



エカキ摘み桑を入れる（下増田）  
（中村和三郎 撮影）



桑こき（飯土井）（阪本英一 撮影）



桑ぶるい、右から1令、2令、3令用（飯土井）  
（阪本英一 撮影）



桑くれざる（1貫勿用）（飯土井）  
（阪本英一 撮影）



木鉢、溝28.3、高4.3（下大屋）  
（間口正己 撮影）

エカキ（クワトリカキ）　養蚕用具の一つで、摘み桑を入れるかご。大正時代にはサマを使っていたが、昭和になつてからはエカキを使うようになつた。ザマより軽くて、ケツ（底）がしつかりしていくわれずらくて使いよい。底はアジロに編み、まわりはカゴアミにしてある。（お節句のときの実家からのおかえし——タナモンゲエシにはエカキを贈るのが多い）（飯土井）

底部 四九  
口径 六〇—六一

桑くれざる　村内の竹かご屋に注文して生産してもらつたもので、桑

の葉を入れて糸をのときに使う外、マユカキにも使用する。

七百匁ザル

口径 四〇（底径三一）

高さ 一四

一貫匁ザル

口径 四七（底径三八）

高さ 二七

木鉢 粿の上糠用に用いる道具。荒物屋などから買ひ求めて使用。

点あつてそれぞれの直径は、三一・二、三〇・七、二九・五cm 最近はアルミ製や、プラスチック製のものを使用している。

## 五、製糸用具

巾 横 六六・八cm

ヒロメキ グルメキともよんだというがヒロメキが一般的呼称。糸の揚げ返しや巻きとりのときに使うもの。

高さ 七・五 厚さ 五・五・三・六

牛首 柱 高さ 一七・五 揚げ返しや、糸巻きのときに糸棒をかけておく道具。

台板 高さ 一七・五 揚げ返しや、糸巻きのときに糸棒をかけておく道具。

たて 三三・八

よこ 二二・〇

高さ 七・五

巾 七・五

ノシアゲ棒 座織りで糸とりをするとき、鍋の縁に接して立てておき、糸の口をみつけたり、薄皮まゆになつたりして出るノシ（諸糸などくず糸）を巻きつけた糸棒と台。

高さ 九六・五（下部は杭状）

首 二六・〇

糸まき車 前橋市城南地区は、織物の町伊勢崎に近くさんんに貨機をやっていた時期がある。これは糸車の輪に竹を使い、ひもを編んでいたものであるが、いまではひもがなくなり、そのままになっている。（下増田）

糸車 機械のとき、緯糸をクダに巻きとする作業（クダマキ）に使つた糸まき車、ひかく的新しいもの。

金長（台）八四

高さ 二八・五、たて 二八・五、横 四四・〇cm（柄とも）

座織り 上州座織りの一般的なもので、アヤをとる首ふりは歎車を用ひ、動力を伝える芯棒に丸い輪をつけ、みぞを切つたものを利用している。つづみ棒はあるがつづみはない。

たて 一四・二

イザリバタ 明治時代には使われたものといわれるが、仕上がりがて

い niede、台機にしつかりした角材を用いて、腰かけ板の下に物入れ箱を兼ねる箱をつくり、腰かけ板を外すとその中にオサ・ヒ・シン・腰帶などを格納できるようにくずしてあって、使いよくしてある。オサヅカはあるがオサは見当らないが、それは、当地方で家を新築する際、上種祝いにあたってオサを、他の女の持ち物と一緒に結びつけて祝うことが行なわれる所以で、そうした時にくれてしまつたのでなくなつたのだろうという。

(飯土井)

たて  
よこ  
高さ  
一一四  
六六  
八六・五



綿繰り（下増田）  
(中村和三郎 撮影)



牛首（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



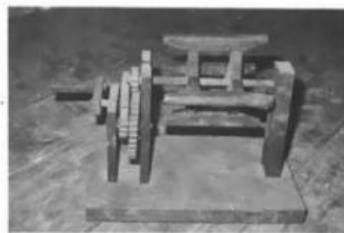
座繰り（飯土井）(阪本英一 撮影)



糸とり鍋（飯土井）(阪本英一 撮影)



糸車（飯土井）(阪本英一 撮影)



座繰り（飯土井）(阪本英一 撮影)

## 六、わら加工用具

養蚕用具の中でもアミ類は、カゴ網いをしていたときは毎日のようにアミを使ってウラトリをするので、稚蚕期用のイトアミ、

壯蚕期用のナワアミをさかんに利用した。蚕網つくり台は、ナワアミをつくるための台で、夜なべになった細なわをこれにかけて編んだもの。

針は各一九本、長さ一七一・五cm

まぶし折り 手折りのシマグマブシを折る道具。針金の間に生ずるわを入れておき、まぶしにするわらを入れて火ばしのようなものを使って手前の方に折りまげ、さらに火ばしを入れて向うの方に折り曲げる。交

互に曲げて最後はハゴイタで打ってひもでしばって仕上げとなる。

ムシロオリ ムシロの中でも養蚕用に使つminaガフムシロは、農閑期に各家庭で織つて間に合わせた。麻糸を用意してオサに通してムシロオリにかけ、にぎりを持って手首を上下すると糸のアヤがとれ、サンゴとよばれる竹の棒でわらを交互に入れて織り上げた。(下大屋)

ぞうりづくり台 ソリをつくるとき、両足の親指になわをかけてひつばることが原形であるが、それを道具にしたのがぞうりづくり台で、



ノシアケヰ (飯土井)  
(阪本英一 撮影)



糸まきぐるま (下増田)  
(中村和三郎 撮影)



蚕網作り台 (下大屋)  
(間口正己 撮影)

径一六一・五・五cm  
柄 二九・五

これならば固定することができて、ぞうりの仕上がりも固くできる。台板には柄鉤の板(エンガベッタ)を再利用している。(下増田)  
ヒイラギの木を使ってつくつてあるので珍しく、ヒイラギ材は絶対に割れないといわれる。



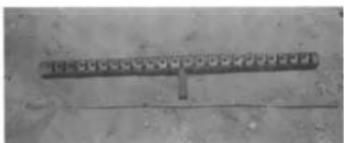
いざりばた (飯土井)  
(阪本英一 撮影)



ワラハタキ（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



まぶしおりとたたき板（飯土井）  
(阪本英一 撮影)



ムシロオリ下大屋（中東彰子 撮影）



草覆を作るのに用いた道具、台にはエンガベックを使っている。(下増田)  
(中村 和三郎 撮影)

資料

- 1 荒砥村郷土史  
2 木瀬と其の附近の子供組  
3 赤城大明神実記  
4 赤城從行  
5 赤城信仰に関する伝承  
6 産泰語之事

1 荒砥村郷土史

伝説

大字富田村 少将塚

「聞見漫録」に言う。(信沢右近衛少将直隆卿妻弥生長男三代丸) 同村南端に少将塚あるを聞く。昭和六年下富田水車業大島巻司氏の案内に依つて此の塚を見る。安永年間信沢先祖神を奉上刻す。建一尺六寸石に三位帽子を着せし人形像あり。たしかに公家方ならん。思うに信沢家は古昔上富田、此處は下富田南端也、實に信沢の祖ならば掃除手入もなく不敬の事、全くの公家を宿泊し、死人を荒砥川西岸に埋葬なすものと考うと。又別に伝える所に依ると、富田の東南端、荒砥川の西ほどりに少将塚という小塚がある。信沢右近衛少将高家卿の墳墓と称している。(或は延沢に作る) 之れ応仁乱後、朝廷の御賛徴甚だしく諸国に流浪して野に下つた。高家卿も諸国放浪の末、この地に止つたと伝えてい。高家卿の長子に御代丸と云う人があつた。天正年間に及び族類繁延し、富田村を作したものの、(現今下富田の地ならん) そうして一字を定め立し、正法院と言つた。なお氏神春日明神を祭り地方の豪族となる。(正法

院は天保十三年焼失し、東原(中組)の地に移す。現、持地山延命寿正法院之なり。春日社は明治十年東原の地に移し、現在の三柱神社となつた。現に少将塚は富田村の祖として里人崇敬し、塚の草木を伐り、或は塚をくずすことをしない。若し塚地を汚すようなことがあると、神罰があると言つてゐる。二、三年前或る青年、塚の雜木を伐るや忽ち重病にかかり、家人にも死ぬものができたと言うより、一指も触れず、塚に昇る道もなく雜木は繁茂のままである。因に信沢氏の系図等は下富田の塩沢重次氏の家に保存せられてゐると言う。

梅花桜天神

西大室字地田栗に菅公を祀れる天神様があつた。明治四十三年西大室神社へ合祀す。老松の茂る邱上に岩石重疊して其の上に宮が立てられて居た。此の境内に梅の木を植付けると、一年にして桜に化すと言う伝説より、この天神を梅花桜天神と称した。現に梅を植えると桜樹の如く化し、桜に似た花梗長き花を開くのである。土質のためか。

阿弥陀井戸

大字下大屋中部柳井戸と称し、地、清水湧出せり。安永年間馬場弥平の祖先用水の便に供せんと堀りした仏石(板碑)出す。青石にして丈二尺三寸幅五寸五分、厚さ七分、蓮花の上に梵字あり。其の下に康安二年十一月日と記せり。依つて寺僧に一見せしめしに阿弥陀井なりと云えり。爾後里人阿弥陀井と唱え、柳井戸の名称消滅するに至れり。

虚空藏と鰐

大字泉沢の住民は古昔より決して鰐を食すことなし。これ泉沢円明寺に虚空藏菩薩安置せられ、この菩薩は鰐を以て着服となす。故に鰐を食う者は其の罰を蒙りて失明するものと迷信あるを以てなり。偶々鰐を捕らるるも虚空藏の池に放つ。

片葉の藪

大字二之宮南部に片葉藪とて茎の一方にのみ葉を生ずる藪あり。古來より伝説に、此はもと利根の流れにて増田が測定と称したり。昔此處へ赤

城家業の娘を枕めしに、其れより此の姫の怒罵にて片葉の蘿を生ずと云う。

### 金糞沼

大字二之宮にあり。此處はもと沢なりしが、これを距る西北約二丁ばかりなる處に、椿の大樹あり。其のうちに大蛇棲息し、時々この沢に来て水を飲めり。里人いたゞくを恐れ、鉄は蛇に毒なればとて其の来る避くるが為に此處に多くの金糞を捨てたり。後此處に溜井をほりて此の溜井を金糞沼と称す。

### 村主の清水

昔いつの頃か里の百姓が赤城へ薪取に出かけたが毎日一枝の薪取らずに夕方になつては帰つて来た。おまけにぐでんぐでんに酔つぱらつて家の者が何を聞いてもただ、にやにや笑つてゐるばかり。そつてしまいには真赤な顔からくさい酒の息をはきながらくうくうと寝入つてしまつた。其れが一人や一人やぎりではない。其の村から赤城へ登つて行く者は誰も彼もがそうであった。生れつきお酒の嫌な者でさえ、口のきけない程酔つて帰つた。村の人達は不思議に思つて或る日の事そつと薪取の後をつけて来てみた。ところが薪取の男達は皆道傍の芝の上に寝ころんで、どこからかいっぱいお酒をいれた腰をもつて来て飲みはじめた。後をつけて来た人は、こんな處に酒屋があるのかしらと思つて様子を見てみると、又一人の男が腰をさげて酒をとりに行くらしい。そつとその男の後をつけて行つてみると小川の渓から流れ出る清水を腰にくんで帰つた。後をつけて来た人は、其の泉の傍へ行つて手に清水を摘んでどつくりの一口のんでみた。不思議にも其れは歯にしみ通る程冷たい処の酒であった。薪取が一枝の薪も取らずに、皆酔つぱらつて帰るわけがわかつたので、その人は落ちていた馬の糞糞を拾い泉の出口へ突込んでとつと村へ帰つて來た。今日もおいしいお酒を腹一杯飲んで帰ろうと薪取の男達は三度目の酒を汲みに來た。けれど泉の口に馬の糞糞が突込んであるのでぶつぶつ言ひながら其れを引き出して小川の中へ捨てた。清水は

こんこんと一層勢よく流れ出したので又一ぱい裏にくんで来た。しかし此の三度目の清水をのんでは、ちつとも酔わないばかりが今までいい氣持に酔つて来たのがすっかり醒めてしまった。ぶるぶる寒気がしてきた。之はきと三度目に汲みに行つた男がいぢわるをしてあの清水をとらすにただの水を汲んで来たにちがいないと一回は腹を立てて清水へ行つてみた。そつしてめいめい清水を飲んで見たがどうしたことか、もつ誰にもお酒の味はしなかつた。

### 俚謡

いただくものは夏も小袖  
坊主だませば七代たたる。

いりまめに花  
ばた餅を背負つて砂糖の木にのぼる。

屁と火事はもとからさわぐ。  
鳥なき里の蝙蝠。

豆腐にかすがひ。  
提灯に釣鐘。

提灯持ちはあとにたたず。  
盗人に鍵。

男は度胸坊主はお経。

河童の河流域。  
用心は臆病にせよ。

金持ちと掃き溜めはたまるほど汚ない。

用心は臆病にせよ。

宵張りの朝寝坊。

鷹は死すとも穂をつます。

爪で拾つて糞でこばす。

牛の小便十八町牛の尻がい。  
親は死んでも食休み。

おだてもつこにや乗りたくない。

繪屋のあきて。

小姑人は鬼千疋。

麻の中の蓬。

貧の宵っぱり長者の朝起き。

百日の説法屁一つ。

方 言

(方言)

イーダニ

よいのだ

イキバル

えらぶる

イケル

埋める

イシツコロ

石乗る

イツカル

裁せる

イツケル

行ってみよう

イツペイ

沢山

いやらしい人

大變

むし暑い

けむい

いやしい人

危ない

他人をだます

奇数・撮わぬ・めくる

迷つ

強く叩く

タバコ

張りひっくり返すの説

吸う音より出る

ハシヤグ

ニシ

ホウタロ

ホソッコ

ホダ

ボックム

ホジル

ボッコレ

ボット

ボンツク

ホウッコ

ヘア

ヘアール

ヘル

ヘコタレル

ヘツボコ

ヘゲ

ベットウ

ヘッタ

ドドメ

ドボー

トマル

トウサン

バッコ

ドウヅク

チミタイ

チヨチヨバコ

乾く・浮かれる

お前

蟻

萌え出る

細紐

そうだ

入れる

掘る

壊れる

偶然に

平凡

頬冠り

蠅

灰

入る

啖れる

挫ける

吠える

逃げる

搔かれる

啖る

啖る

桑の実

物の底

果実が熟する

通さぬ

打つ

つめたい

凹み重れる

チヨチヨラ	チヨキ	チヨツキラ	チヤゾツベ	チクラツベ	チンコイ	ジャパンボン	スクティ	ヌカス	ヌカリツタマ	オコサマ	オサゴ	オシメ	オシー	オタマンゲロ	オツカネー	オカマケナンショ	オツペナス	オツチャレル	オツバシツタ	オツチデメタ	オツクデル	オツベシヨル	オバンシ	オヒヤラカス	オーキニ	オランゲー	オサンカラ
-------	-----	-------	-------	-------	------	--------	------	-----	--------	------	-----	-----	-----	--------	-------	----------	-------	--------	--------	--------	-------	--------	------	--------	------	-------	-------

落着かぬこと	恰度	茶菓子	虚偽	小さい	華式	暖かい	言つ	ぬかるみ	散米	蛋	おむつ	みそ汁	おたまじやくし	恐ろしい	お嫁ぎなさい	貶す	叱られる	行つてしまつた	おしつけた	下駄	だるい	掘る	非難する	空きかん	ございましよう	なめる	急いで	蜥蜴（トカゲ）	病氣	悪事をする	微夜して	娼婦	馬鹿者	おどりいた	ふさける	大きい	尖る	噛
--------	----	-----	----	-----	----	-----	----	------	----	---	-----	-----	---------	------	--------	----	------	---------	-------	----	-----	----	------	------	---------	-----	-----	---------	----	-------	------	----	-----	-------	------	-----	----	---

おいらの家

オヤゲナイ	オコンヂョ	ワッチ	ワリメシ	ガイロ	カクネッコ	カジケル	カックラセル	カツコ	カツタルイ	カツバク	カツベナス	カマギツチヨ	カンカラ	ガンショ	カンナメル	カセイデ	カナヘビ	カゲン	ヨタラスル	ヨツビテ	グルマ	タラツ	ソツケツタ	ソベール	ソラツベ	ヅナイ	ツノツボイ
-------	-------	-----	------	-----	-------	------	--------	-----	-------	------	-------	--------	------	------	-------	------	------	-----	-------	------	-----	-----	-------	------	------	-----	-------

可哀そう	意地悪き人	私	砾割麦の入った飯	蛙	かくれんば	凍える	人を打つ	下駄	だるい	掘る	非難する	空きかん	ございましよう	なめる	急いで	蜥蜴（トカゲ）	病氣	悪事をする	微夜して	娼婦	馬鹿者	おどりいた	ふさける	大きい	尖る	噛
------	-------	---	----------	---	-------	-----	------	----	-----	----	------	------	---------	-----	-----	---------	----	-------	------	----	-----	-------	------	-----	----	---

かきなめる

ツヨ	ツンモス	ツラヌキ	ネンジン	ナイゴ	ナカンベ	ナンショ	ナタ	ナリンボ	ラントバ	ムシ	ウヌ	ノノコ	ノツベリ	ノラボワ	ノンノンサマ	グイラ	グシ	クタベリ	クツツケル	クビカカリ	クド	クネ	ヤアベー	ヤシンボ	ヤマ	ヤッコイ
----	------	------	------	-----	------	------	----	------	------	----	----	-----	------	------	--------	-----	----	------	-------	-------	----	----	------	------	----	------

露燃やす	納税	人夢	いなこ	まい	なさい	巡査	痴患者	痴患者	墓場	ねえ	脅すこと	汝	拂入れ	なめらか	乞食	一人前に足らぬ人	無理に	棟木	ばかばかしい	炊きつける	炊きつける	ばまど	垣根	行きましょう	食いしんぼう	森	柔らかい
------	----	----	-----	----	-----	----	-----	-----	----	----	------	---	-----	------	----	----------	-----	----	--------	-------	-------	-----	----	--------	--------	---	------

老人が主として言う  
延べの音便

ヤツツスツトコ	ヤベ	ヤン	ヤツトコセイ	ヤツチユート	マキツタ	マギメ	マメツチヨ	マンカラ	マンバチ	マケツチヨ	ゲイロツバ	ゲー二	ブルキ	コキノメス	コヂヨハン	ゴロゴロサマ	コワイ	ゴテッバラ	エスキニ	エンダラ	デー	デホ	デレスケ	デンボ・デ木	アシコ	アンモ	アテコトモナイ
---------	----	----	--------	--------	------	-----	-------	------	------	-------	-------	-----	-----	-------	-------	--------	-----	-------	------	------	----	----	------	--------	-----	-----	---------

ようやく	行け	さん	忽ち	死んだ	眉毛	小さい	嘘	通失の事	おおばこ	強く	巡査	叱りつける	雷	疲れた	たくさん	大変	中間の食事	不規律	感動を表わす	でたらめ	馬鹿	偽り	足跡	餅	途方もない
------	----	----	----	-----	----	-----	---	------	------	----	----	-------	---	-----	------	----	-------	-----	--------	------	----	----	----	---	-------

北部方面  
デーでつかいな

アリヤコリヤ

\*

あべこべ  
心配はない

アンチャネー  
アクト

\*

寝  
探す

サガネル  
ザマ

\*

背負龍  
袖無半天

キツチヨ  
キジリ

\*

馬追虫  
薪置場

メカイ  
メド

\*

背負龍  
袖無半天

ミヤマ  
ジクナシ

\*

日蔭山  
意氣地無し

シコードル  
シブッカキ

\*

呆れる  
氣どる

シラヂ  
ジンジキ

\*

小穴  
意氣地無し

シヨウベーナシ  
ヒヨウガル

\*

すりばち  
括鉢

スカキ  
シヨウタレ

\*

すっかり濡れる  
すりばち

スカキ  
シヨウタレ

\*

さくらんぼ  
意氣地無し

こと

東昭和十四年十月三十日

編纂・荒砥第一尋常高等小学校郷土史調査研究部員

## 2 木瀬とその附近の子供達

一、木瀬村気井

イ組織

小学五年から中学二年まで、中学三年になると止める。

口行事

灯籠 近戸神社内石尊大権現。（祇園祭の時七月廿八日）（祇園の前夜神社にとまる）

近戸神社、四月三日（この日は村中で神樂をする。）十月十七日（オクンチは寺院本堂にとまる。初午の晩には泊らす。）

七日（オクンチは寺院本堂にとまる。初午の晩には泊らす。）金錢關係、毎戸寄進をうけに歩く寄進が足らなかつたときは

氏子幾代の人が金を出してくれる。

天神講 各小字毎にする。宿は年長者の家、翌朝素足で近戸神社境内の天神宮に参拝する。

ハ公認の悪戦

混合戦 昔は下長機としたが今はしない。

二、木瀬村上増田

A字大塚田

イ組織

小学生、中学生男の全部、任意入会中学三年生が親分。

口行事

灯籠 調訪神社（浅間神社）七月廿七日、十月十七日

世話人（当番制）の人が一切の世話をしてくれ、金は大塚田中で出す。子供は灯籠をつけるのみ。

天神講 翌朝調訪神社内の末社天神宮に御参りする。

B字宮下

イ組織

小学一年から中学三年まで

ロ仕事

灯籠 十月九日、おせんじゅ様（千手觀音、近戸神社境内にあり）

費用は毎戸寄進による。大人が助言する。（係の人は毎年交代）

天神講

小学一年から中学三年まで翌朝千手觀音にお参りする。

C字、宮下

灯籠 天神様

D字、東組

E字、宮原

イ組織

学年、年齢不問

ロ行事

灯籠 薬師（茲は奉納相模をしたが、タタリがあり薬師様は勝負事

がきらいだというので今はしない）

天神講 六年以上中学三年まで

F大字全体として

イ組織 小学一年より中学三年まで

ロ行事

大学全体として近戸神社の灯籠をつける。氏子總代が金を心配してくれる。

○小学生が自治的組織をもっている事子供がその役目を祭礼方面で果している。

○鎮守が大字統一の目標としての役目を果している事。

三、木瀬村大字下増田

A中屋敷、奥原

○神社掃除、小学三年以上の男性

日曜毎にする。

灯籠も天神講もなし（戦後）

○子供は学校の行事以外に村の行事に参加していない。

B阿久津須永

四年以上中学三年まで

ロ行事

日曜毎に墓地の清掃をする。但し須永では一月に一回程度。（戦後にやりだした）

四、木瀬村小屋原

○現在子供は神社掃除をする程度

天神講 昔は子供が関係していた。一晩宿が家に泊って翌朝未明天神

様に御詣りにきた。今は大人がやっている。

○小屋原も下増田と同様戦後子供組の機能が著しく感じたようである。

五、荒砥村荒子

六、荒砥村荒口

灯籠 薬師 八月七日

庚申様（猿田彦） 十月十五日

神社 以上別にとまらない。

○小学三年以上小学六年まで、一切大人は関与せず子供が全部するようになつてゐる。村中お札をもつて巡つて金を集め。（木暮元夫君談）

イ組織

小学三年から中学三年迄の男、一戸一人。

ロ行事

ドンドン焼

（十月十七日の晚神社です。毎戸まわって薪一束鬼もら  
い、十七日の晩神社で燃し、その夜泊る。翌朝村の人の  
上げる赤飯たべて帰る。）

灯籠 大黒様 二月十四日

ハ 観音様（村祭）

ハ 公認の悪戯

おせんさげ 十五夜にお月様にあげたものを盗む。（塙田光君談）

子供の民俗あれこれ

一、村人への挨拶

朝夕の挨拶、天気の仁義。たつたそれだけではあるが村人への仲間入りのしるし。昔は高等小学校を今は中学を卒業してから早速それだけは実行しなければならない。先輩達も卒業と同時に実行したのだという概念がこの不文律の生活の規則を次々に新しい世代におすすめで行く。

「××さんは体は小さいが仲々丁寧な仕方がうまい。」これは卒業まもない頃村人達の間にきかれるのであるが、××さんのその挨拶がすっかり板についてもう誰にも奇妙に感ぜられなくなつた時××さんはすっかり村人としての一人前の資格が与えられているのである。

二、神式結婚と子供

祝儀のある客に最も力となつてくれるのは伍組の人々である。伍組の中から晴の儀式に立会う一人の男女の児童が選ばれる。この男姓女姓となる子供は「親が揃つて居なければならぬ」。

三、花嫁に対する悪戯

○花嫁への罵声

四、葬式の日に

人が死んだ場合その人の小遣錢は葬式の日に竹で編んだ丸い籠（竿の

先につける）の中に入れ、何回か庭先と墓地の広場で振つてその金をもらとす。これはその時に来た子供に自由に拾わせる。死人が成仏すると云つて家人は喜ぶ。又拾つた金は家へ持ち帰らずすぐその足で使つてしまつ。

五、子供と言葉

「オス」ということ

戰時中子科練生が使つた朝の挨拶（お早う）一ぎいります→お早うす↓オッスだというこの言葉はまだ村の此所被處で聞かれる。極く親しい者があえは「オス」をはじめに云いかわす。そればかりでない。何か事がうまく行つた場合など「おいオスじやねえか」など次第に挨拶として言葉から変化しようとしている。この間も草刈の子達の間で二人の事がきかれた。二、三人のものが草刈をしている處へ彼等の友達がやって来て「オス」と云つたら相手のものは「メス」と答えた。たくましい言葉の前衛戦士としての子供をそこでも発見したような気がした。

「アマイ」と「開戦」、「ゴイロ」と「タイム」

戦後間もなくの事、子供達が陣取りをしているのを見ると、ゲームを始める時「開戦」と云つていた。最近はその様な遊びもなくなつたと見えそぞう云う事も聞かなくなつた。それと共に私達がもとよく使つた「アマイ」という言葉はもつどこかへ行つてしまつたようである。この「開戦」という言葉が從来の「アマイ」と云う言葉に代つて使われたのも戦争の影響が子供達の世界に即した一つの現象だつたかも知れない。

それと私達が鬼ごっこをする時分は野球でいう「タイム」という事を「ゴイロ」と云つたが今では「ゴイロ」は全く忘れられて皆「タイム」と云つている。先日九才十才位の子供に「ゴイロ」という言葉を知つているかと質問したら「それは英語か」と反問されて驚いた。木瀬村東上野小中学生について調べたら「ゴイロ」を知つていたのは六年生以上のみであった。之は六年以上は戦時中に入学してそういう遊びをしていたが戦後急にそれが止んでしまつた故である事が知れた。

時流のまにまに生きてゆく子供達の姿を知つた。（一九三〇・三）

戦後の言葉

戦後の混亂時村の青年達の間で言葉が相当荒んだ。青年と交渉の多い子供達がこの影響を受けたのは当然のことだった。これも日時の経た現在ではもう日常の言葉として聞かれるようになつたが小学二、三年生の間にそんな言葉の聞かれる事は、たとえ子供達が新奇なものに対する憧憬の念に満ちているとは云えまだ荒んだ世相を子供達の間にみるような気がしてならない。

次にその一、二について抜き書きをしてみる。

言葉	意味	ゴツイ	強いこと大きい事
ヤバイ	都合が悪い	ハクイ	美しいこと
ゴロ	喧嘩	マブイ	"
ゴロマク	喧嘩すること	マツチ	"
ヤキイレル	なくること	テッカリ	"
シケテル	けちんばうのこと	モク（主として上級生）	煙草
イツコ	この他事物又は地名をアベコベに云う（例高崎サキタカ）又言葉を略して（主に終りの言葉のみ）云う（例前橋パン）	スケ（主として中学生以上）	娘
大イツコ	この他事物又は地名をアベコベに云う（例高崎サキタカ）又言葉を略して（主に終りの言葉のみ）云う（例前橋パン）	ヤレ（リ）	青年
オシン	お金のこと	ヤジ	親父
ヤリ（勢多・柏川）	一のこと	サマジイ	先生（教員）
フリ（〃）	二のこと	インキョウ	小さいこと
チギ（〃）	三のこと	サイチー	大きいこと
シャリ	米	カイダイ	サキタカ（サキタカ）
ナガシヤリ（柏川）	うどん	六、子供の村の自治への参加	青年団ででている
サーコー	盗みのこと	○危険物箱の設置とその処理	木瀬・女屋・上増田・東上野・下増田・駒形（木瀬下増田）
ハッパカケル	なくること	○墓地の清掃	木瀬・女屋・駒形、上長磯、下長磯
ペテン	頭脳のこと	○神社の清掃	木瀬、女屋、駒形、上長磯、下長磯
盜むこと	逃げること	○害虫駆除	木瀬、女屋、駒形、上長磯、下長磯
ズラカル	逃げること	七、子供の遊び（主として木瀬村）	これは少年団や学校の関係で大部分の字でしていた。
トンズラスル	逃げること	かくねくしょ（かくれんば）	かくれんばのかくれる者とみつけるものはジャンケン（チッカという）

もしいつまでもかくれたものがみつかないときはみつけるものが大きくなる

きな声で「鬼に子をくれた」と云い、かくれた者が出て来る時「チユツチユツ」と云わないと子をとるぞ」と云う。かくれたものはその通りする。そして又同じメンバーでかくれんばる。

#### 鬼(二つ)

やはりジャンケンで鬼をきめる。もし逃げる者が事故ある時は「ゴイロ」と鬼に向って云う。そうすれば鬼はその人はつかまえない。又ゲームに参加する時は「ナシタ」と云う。

#### 天下落し

これには二通りの方法がある。一つの方法は日当りのよいところなどに横に並び手拭を二つ折りにして一人のものがとる間に立ち並んでいる者に両手を上向きにして軽くもたせ、片手で急にその手拭を上から手をふりおろしてうばはいる。防ぐ方はとらまいとして急に手拭を握つたり放したりする。もしとる方が勝てばその次の者に移り同様なことをくりかえす。もしとれない時は両人の位置は交代され、今迄のどると方の者が勝った者の位置につき勝った者は順に「天下」に向って攻めて行く。尚天下は初めてジャンケンで決めてその列と離れた方に位置している。列で一番強い者が最後に天下に対する挑戦者となるのであるが、もし天下に勝てば天下になれるが負ければ逆もどりである。「三回天下」の地位を守り得れば一番強い者を「子分」として招きよせ自己の防壁とする。従つて子分の處で負けたら又逆戻りである。もし子分天下二人共負ければ両者其の地位を追われる。

今一つの方法は手拭を用いずジャンケンで勝抜いて行く。ゲームの進行は前回機。

#### ゴロイ

ジャンケンで二組に分け互に右手を以て切り合いをする。ゲーム始めの時「アマーリ」と云い休む時には「ゴロイ」と云う。相打はジャンケンで勝負をきめる。一方の子が相手の体の部分に触れれば「タダ」と云つ

て相手は文句なしに「コロサレタ」ととなる。

#### ブツツケ(ベンチ)

もし絵が剥け又破けている場合それが半分以上の破壊の時は「通行」しない。

#### タマ(ビー玉)

玉の大きさ及び中の模様によって一回玉、二回玉、三回玉、四回玉という階級があり一回玉同志なら当ればそのままとれるが一回玉で三回玉をとるには三回あてなければとれない。大きい玉で小さい玉にあてた時はそのままとれる。

#### 鬼虫(甲虫)とり

甲虫は夫々女、ナタ、ノコギリ、武田、上杉という名称がつけられ、その順に成長進化したものと考えられていた。強さはこの逆で上杉、武田からノコギリ、ナタ女と弱いと考えられていた。

#### 釘さし

ガエロッバの茎(花の)を二つに折りツバや砂をつけて強くして一人で引合い強さを競う。

#### 字かくし、棒かくし

#### ドカン

上図の如き形に砂をもり、棒きれの小さいのを四、五本宛用意しその一本を「地雷」として互に相手に知られないようにして任意の場所に埋めておく。(その時は交代にうしろを向いている)地雷を埋め終るとジャンケンをして通路を棒をさし乍ら自由に歩きまわり任意の處で止まってそこへつきさしておく。次々とそのようにして相手の地雷の上を通れば敵側にとられる。早く棒のなくなつた方が負とする。又相手方に地雷の在り処を知られた時も鬼となる。地雷の上を通つた時「ドカン」というのでかく呼ぶ。

本ノートは、井田安雄さんの前橋高校在学中の民俗採訪帳の一部分であります。上毛民俗の会員、諸賢の此の方面（子供民俗）の御研究への資料として、同君に御願いして発表していただきました。井田さんからは会員諸賢の充分なる御批判を仰ぎたとの申添がありました。

今後も会員各位から此種採集帳の御発表を乞い相互協力の実をあげてゆきたいと存じます。

（昭和25年5月20日発行 上毛民俗ノート第一輯、井田安雄稿なお、ガリ版刷りのものであるが、今井善一郎氏の手になるものである。）

### 3 赤城大明神実記

#### 目録

- 一家成公上京之事
- 并ニ御臺御病死之事
- 一御臺御謀叛之（事脱カ）
- 并ニ大胡大室
- 三人之姫君増田之潤江沈メ之事
- 一家成公赤城山ニテ御他界之事
- 一八王丸殿髪變
- 并ニ御病死之事
- 一深津城之事
- 并ニ山上八郎武勇之事
- 一繼母更科江被捨事
- 并ニ根津望月打死之事
- 一野田伊香保上京之事

一家成公赤城大明神ト被設事

三人之姫君二宮三社大明神ト被設記

夫我朝ハ神國ニテ何れ之神々も御利生あらざるハなし。爰ニ上野国

赤城山大明神の由来を委尊奉する人王十七代仁徳天王の御時、上野国勢多郡深津之城主高野部之右大将家成公ト申奉るハ上野彦ヶ国之主ニテ萬民草木之なびくが如く隨けり、シカルニたぐひなき姫君三人持せたま

けり、第一女をいさよの君、第二を八弥重の君、第三を桜の御前とテふよふのかんはセ、柳のまゆ、いと□んぜうなる御姿、扱又家の執見ニハ伊香保藏人貞良、野田之三良重則、大室政勝、大胡四郎重持、鷹五郎重桐山上八郎重勝其外普代外様之諸子參勤怠らず、扱其頃ハ五歳七道の御城主年番ニ相勤め帝を守護シ奉ける。家成公御臺所ニも仰げるハ我今年當番ニテ都江登り候故三人之子供能きになぐさめくれと申置、野田の三都重利を御供ニテ都をさして登りける、御臺所ハ見送りテ余りの事に四万のけしきを御観被遊兄弟の者へ仰きけられる。今度我夫の御留主いときびしく殊ニいつ御攝城なさる、やと只ばふせんと見へたもふ、姫君達ハきこしめし、是はいとなる仰かな、今を初ぬ御留主故さのみ御心をいたませたもふな、やがてかゑらせたもふらんと供いたわりたりたまえども、あわれなるかな比の方はのミ積りたまへけん、ふしげに心くるはシくもたへてもふぞいたわしき、姫君達ハ取すがり是のふいかに母上さま、父上の御留主ニモしもの事がある時ハ我々供へいかならん、必死でたまわるなどいたわりなげきす、むれどそのかへさらんあらざれハ、御臺所ハかをあけ、これのふいかに姫共よ、自此世に運つて迷途の旅へ行程にかならずなげく事なけれ、我つまかゑらせたまへなばさゑ期の次第申立、世にま、母のあるならへ、後の親を大切ニ孝々尽シ申べし、伊香保・大胡・大室を此姫共の行末をよきに見そだてくれよとて、なみだと共ニ暇乞し草葉の露と消たもふ、人々御死がゑに取付て十方沮にくれたまい年も足らぬ我々を捨置きたもふ、なきなや、我等も連行たまわれともだへなげかせたまいいける、おそばにあり合人々も御道利様やと斗ニ而しばし沮にくれけるが、わざといきめのこゑはほましいか程なげきたもふとも死生の程わせひもなし、ぐすのいたりに候とおんなきがらをいだきユケ野辺のけむりとなしたものふ、御僧あまた供養しテおんとむらへのあわれさわ姫君いはゑにむかせたまへ、悲歎の沮におん袖をしほりツ、香花さ、けよきにばたへをといたもふ御有様であわれなり

家成公御下向ニ付維母謀叛之事

是ハさて置キ右大将家成公早其年もくれければ君より御暇たまわりて、早都をバあとに見て道中筋もつ、がなく深津の城についたまれば、姫君初めのとちおとらじと出向へ御悦のかきりなし、悦なばかりに姫君達父上に取付て只さめくとなげかる、父上仰らる、よふ我目出度かゑりしに沮のいろハ何事ぞ、いかに／＼とのたまへバ姫君達も漸々沮にむせぶかを、あけ、母上さまにすきおくれ便りなぎさの小夜千鳥、今父上の御顔を見る三つけいと、おもへのまさるおり、あらなつかしの母上さまと一度にわつとなきたまら、おん心ねのいたわしき、父上仰らる、よふさらバ病所ニまゐらんと弾重の上のあなひにて御病所さして出る、既ニかしこになりぬれば家成公は妻の無所なるかと香花たむけしづ／＼と下向被成ける、かくて月日も立ぬれば一門達も集りていかに御家に御臺所無てハヤまだ、幸州更科の次郎の妹にて勝の前と申こそよぶがんびれいにましませば此姫君を向ひんと相談とみにきわまれバ、急き使者をそ立にける、更科殿もきこしめし吉日をあらミ夫占深津の城へ送ける、人々數多立出て奥御殿江しやうじツ、酒ゑんの御座ぞにぎわしき、すでに年月過きぬれば御臺所ハ御くわいた、はやりん月二もりなりぬれハ玉のよみなる若君をやすと御たん生、御名を八王丸と付たもふ、はや才二成りたまへばそれがしあ當番ニテ部へ登り申なり、三人の姫や八王丸を隨分よきに見そだて候へと此の方にも暇乞して都をさして登りける、かくて都に成ぬればいき参勤被成ける、皇帝御きげん不斜なんじハ姫を三人持シとき、姫ハ常陸の内侍、妹ハ武藏の小将、末ハ上総のさいしやうニテ合せばそれがしあ當番ニテ部へ登り申なり、リ難有しとりやうしやうしめ本國さして下向ある、最早国ニもなりければ御臺所近付テかよふかよふの次第也、家の面ぱく身の榮花、西上州デ姫共に得さんと思ふや先一門を基メ御祝儀の益なすへしと、野田・伊香保其外御普代外様の面々と御盃をたまわりて御悦ハ限りなし、招光陰ハ矢の如し、既ニ其もくれければ家成公仰出されけるハ、我又都へ登故政

道におこたりなく取計へとのたまいば野田・伊香保御供ニて都へこそは登りける、跨にうとり北の方思まわせばまわす程あの姫共ニ西上州を得さするハ何共無念の至りなり、何卒かれらを失なわんと根津・望月を召出しなんじらをよびしわ余の儀にあらず、そのさいわ三人の姫を害し上州宅ヶ国を八王丸にあさせんと思なり、姫共の事なんじら向人ニテ能に計へ申べしと仰ける、根津・望月ハこわ一大事なる仰かな、されども大胡・大室ハ当家普代の者なればかれらの所存計かたし、早速右ノ次第を仰付られ、もしいなと申べ其座をさらす打とりて申と事もなげに申上げられ、御機嫌不浅大胡・大室兩人を召出されれば何事ならんと御前へしふシでシケレハ根津望月言を揃へ申よふ、此度三人之姫を害し候て御はふびのぞみ通に得せんと申ければ、兩人ハけしきを損ジヨリ高録をいたゞきありながら主君へてきとふいわれなし、生根付けられし畜生侍、一塵もけがれとた、とんとせしが根津望月大ゑにいかり大事をあかしかまししたなら後日のさまたげ、それあますなど声掛ケレハカくし置キタル廿五騎、弓手手手においてとる卷兩人さわがず、招行々数据舞かな、たとへ何方騎ニテ向共忠義の切先おほえしれと兩人左右に立ちかれ、四方へさくと押散す、矢ばせの五郎となりかけ武人目掛け切かゝる、心へたりとわたり合三の大刀にてまづかふわりニツに切られ死にてり、詠訪の三郎あまさじと飛でかゝるを車ぎり手島の七郎こらゑかな、獅子のあれたるいきをゑにて四郎が首を打おとす、政勝今ハ只老人七郎に渡行上段下段ひちつをつくしてた、かへける、七郎大刀請はづし首筋きられたたをれける、根津望月はがみをなしか、れやかれと下知すればハ大勢一度にどつとよせ、引つかんと人つぶで冬の嵐の木之は武者皆立ちちりに逃うセキリ、大室政勝申よふ我数ヶ所の疵を受ケ人手にかゝり死せんよりいきぎよふさしらかゑ、名を末代に残んと重持目掛けつき通し勇者のさあいさきぎよし

三人の姫君増田ノ測江沈る事  
飢わぬより出て鏡を□□あだも情も我身ヨリ我身をかゑさずとや、天

の道なる人ハ天ヨリ是ヲ生すといふ事稀なるかな、爰に高野辺の天道みだりの御計へニテ三人の姫君を測在沈んと仰ける、一人ハはツと承りよくに心のひかされて姫君たちをいざなへつ、増田をさしてそきける、野邊のけしきを御らんありてさゝめあるぞいたるをわし哉、後のあわれ増田なる測辺へこそわづきにける、根津の判官申様部の父君の仰にハちぶさの母にはなれしよりおのが心のよしにまに、日天ほきせいをかけちぶさをてふぶくするときく、かゝる不道のものなればしづめにかけよと仰につき御じんセラに此測へ御しづみたまると申ける、姫君達ハおどろきたまといかに父上のおふせとてゆめにもしらぬ、むし口のつみしぬる命ハおしまねど心得がたきおふせかな、いかさまえ母の計ひにてかゝるうきめを見る事か、我々むなしくなるならば父のけきわいかならん、世の中にい子けい母ハ計ひはどかなし事のあるべきかと御沮にくれながら、これのふいかに人々よ、自古人此測江みくづとなして姫君を助てたべととりすがりなげきしとふぞ道利なり、姫君今ハ是遠と西に向ひて手を合せ南無十方三世仏、めいどにまします母上と一ツははずのれんたいにすくひとせたまわれと御目をとおてまちたまへば、なきけをしらぬ人非人、湖のそごとつま込ひ八目をあてられぬ次第なり、根津望月ハ悦て深津の御所へ帰りける、天道孝子を捨てまわす観音地藏化身二てへたゑ龍王頭にさゝげ大木の根に直し置き測のそこにぞ入二ける、姫君ゆめの心地ニテ只ほふせんとおわしける、かゝる所へ衣かん正敷神の天下らせたまゑつ、汝等まさしく千手觀音・地藏菩薩の再来にて衆生を守らせたもふ方便により、かりに人界に生じたり、父上も衆生を守りたもふべし、まろハ是天照大神の本地大日如来と光を散したもふ、人々信心きもにいじ御あと三度札拂し宿有方へとたどり行、日も西山にかたむけば今宵いくつにあかさんとあなたこなたを見たまゑば、しづがいおりに立稚芝のあみ戸に立寄て、行くれし旅の者一夜のやどをかしてたべとのたまへば、主じ夫婦へ立出て招々やさしき女郎達、只人とハ思われぬ、牛部屋同前此のいおりもつたゑなし、外ニ御宿を

召たまへと申ける、姫君是を聞たまへ必ずくるじく候わん、ひらに宿をとのたまは左様なればおん人と曰をならへ其上に板戸をのやらこもしき姫君達をしやうじまいとする、其の時ヨリして此里を白井の郷と申とかや、夜もしらしと明ぬれば何卒部へは登り父上様へ此の事を申上人と思召、主夫婦に暇乞して出たもふ、右大将家成公もすでに月日も過ぎてはや御塔城になりぬれば、御臺若君出向へ御悅のかきりなり、家成公のおはせにハ姫君ハ何れにぞかれらもよんで祝セよとのたまはば、北の方聞召され御留主ニテかわりし事のあるものかな、姫共ハ北の山ヨリ天狗飛来無二無三ニひつさらあ行方しれずなければ、大胡・大室両人もあるとをしとふておい行しがかれらも天狗の為メに相果候と語りける、なにぐひんめがさららしとふびん之次第をきく事やと御沮にくれけるが、にく天狗のしわざかな、よし此の上ハ赤城山におしよせ天狗にあだむをいふんと己に意ぞしたりけり、集る勢へたれただぞ、闇の重郎国勝・田面ノ興市重勝・生次九郎武重・山上八郎を始めとして赤城山へぞおしよせける、既ニ山二もなりぬればあなたこなたと尋ねるに行方更に知れさればしばしこ、ゑと陳を取りまくを打三日間滞留被成ける、夫故此所を三夜沢ハ社大明神といわひこめられたまへしそ、ありがたき次第なり

井二八王丸殿贊斐之事

家成公赤城山ニテ御他界之事

山の天狗共我領地ニ住ながらわれらにてきとふいわれなし、三人の女子共只今こへ出さすんば一々うきめをみせくれんといかりに御声高らかによばわつて、尚山深く入たもふ、とある所にまく打セししばらく休居たまへしが御身もつかれ御心持常ならず、人々大ゑにおどろきてかゑはふ尽し候へども其かが更にましまさず、我はかなく成ならば高野辺の家八王丸にテ相焼すべし、聞の政道つ、がなくたのみ置事、是斗りと又よわよわと見へたもふ、かゝる所へ天狗共御前まちかく飛來り我々わ當山

の天狗共ニテ候也、姫君の事わ我々のしわざに候わす。全ク繼母の斗へにて増田の測へ沈め候と申けり、報我々わ子細有て周防國へまゐりけりしがおんいきとふりおもゑやられ、早速參上仕君此所にて御病死被成候は当山の神と祝申さんと言ツ。いつともなしに飛去リシハしゃうしなりける次第也。去程に八王丸君ハ姉君達の御菩提をとむらわんと思召。ひそかに御所を出たまへおんいわしの旅のそらいと。おもへ増田なる測辺にこそわづきたもへ、八王丸君里人に近付て過キつるこそ此の測へいふにやさしき女郎達を沈メたもふときかさるかととあバ、里人さん候、深津之御所ヨリ女郎衆四人沈めに掛けられしと聞で、若君さてハうたがゑあらじとて測のきわまさしのぞき、是のふ、いかに姉君達邪見の母の計へ二て此の測へ沈められたまうとき、明けくれかなしさ身にあまり母上と一ツでない申説ヶ、只今おんなき跡の御菩提をとむらわんとはるばるたづねまよりたり、必ず必ズわたくしおばうらみたもふなどみだながらに南無十方三世佛、何卒姉君達成仏なさしめたまへやと寺(立寄、上人を御願ミラス)じとなせし黒髪を四方淨土とぞりこほち、測の辺へ寺を立さびしき住居をなされしハおんいわしき次第也。いかなる前世の約束かつもりつもりて病となり、かしづくものもなきま、に今を限りのおくるしき、辞世のおんうた、諸共にくわせたま五郎院如来、誠の道にいたまると十四才を一期となしついにむなしくなりたもふ、里人数多集りておんなきからを取納メおんとむらゑも不浅、末世末代此の君を八王子大権現といわひける

### 深津城之事　井二根津望月打死之事

御家形には若君の見へたまわねばあなたこなたとたづねける、おん行方の知れざれば御臺ハ余りのかなしさにあこがれこがれ地ニ伏して、もだへなげかせたまえける、女中數多のいきめにて一間にこそ七入ともふ、兼チ仕組し野田・伊香保三千余人を引率し深津をさしてをし寄せける、根津望月驚きて御臺所の御前に進みかよふかよふの次第故、先信州更科殿へ落たまへど、郎等共ヲは捕へ信州さしておち行ける、すきもあらセ

づ。野田・伊香保三千余人一同にときをとハとぞあげにける、城内ニてもさわぎたち時の声もしづまれ野田の三郎重持一さんにかけ寄て、いかに望月おのがれ悪心ゆゑ高野辺の家をたゑてハなす書きツくい千萬也、御臺が首打て渡しなんじわいさぎよく切腹いたせ、さなくば我々ろうせきせんとよばれば望月大藏やぐらの上ヨリ、事おかしや、野田・伊香保鱈を蟻がねらふが如し、それもの共打取と下知すればはやりきったる若者共ぬきつれつれ切て出、てきもみかたも入りみたれ火花を散してたつかゑり、此の時寄手の陳所ヨリ六尺ゆふよの男武人しすしすと立出る、那波七郎重春・安田源内北國也、我と思わんものあらば手並を見せんと仁王立城内ヨリも信濃五郎是を見て、一門次に打かる、那波・安田事ともせずはらはりとなぎ立れば信濃五郎兄弟もてあらましそ見るにける、又々城内ヨリ市川五郎と名のりかけ兩人目掛けて切かる、ころゑ安田に打たれける、小林・源田にかけ來り安田が首を水もたまらず打落す、七郎重春はつと思ひ小林がもうすねなきたをし首打落立上る間次すかづ弓おつとりはなす矢先にはなまなづ、秀国がむないとにはつしと立きう所の深手にたまりかね、つゑにむなしくりける、山上八郎是を見て飛が如くにかけ來り間次が首を打落シ多勢の中いわって入はらりはらりとなぎ立る、手本ニ當る無者共廿三人打てる、身方の源ハ是を見テ天晴なる振舞ぞと走りか、つテむんすと組押伏せんとする所へ、八郎笑て申よふ、とてもわれにハ叶まじ、急仮もふせと言ながら弓手のかたゑなぎたおす、判官今ハ是までと糸か、ツテちやうと打心得たりと請流しこをせんと、た、かゑり、根津も元ヨリつわ者ニテさすがの八郎もてあまし、伊香保の藏人判官に渡り合火花を散してたつかゑける、山上八郎後右判官が首打落す、望月大藏是までと獨子ふんじんのいかりをなし両人目掛けテきりか、されとも横しま無法の刺ぎふしきに天地めいどふし大地いどふたをれけり、誠にしんじんきもにめいじ天を押し地をはいし、首かききつたたつ所へ打もらされのぞふ兵共一度二どふとに入を、山上まかべをい散す、野田・伊香保家形之内江かけ入

て御臺の有かたづぬるに行方更にしれされば、其時手おゑの侍にハ山川兵藏・佐川太郎・またの五郎・田面の與市四人の者共今をかぎりの深手也、野田・伊香保・山上・まかべ其の外も子鶴萬亀税ひよろこび、信濃の国い趣きける

### 羅母更科山へ捨らる事

井二家成公赤城大明神と被殺事

援も其の後北の方信濃の國更科家へぞまよりしが四郎五郎の兄弟ニテ世を納メテぞくらしける、人々しあへて定メツ、世の中に繼子繼母の有なれと沈めに掛けしためしなし、かゝる邪見の其人をかくまゐをかば高野辺の郎等共の恨をなさんハ必定也、しょせん世上のみせしめに奥山へ捨たまう、自作しつみなれとしいのはのふもいあがり何卒して四郎五郎をとりころしてたまわれともつたへなくも日天へきせゑおかけていのりける、かゝる所に天地俄にめいとふして東の方ヨリ黒雲・柳引渡り、家成公子丈余り大鹿にめさせられいかにかづら三人の姫共をよくも沈めにかけしよな、其の上我をもたばかりてなきものにせん計事なんじがいきのある内にせめて仇をむくわんと、大石取てなげつけたまゑばなにかわ以てたまへき、みじんにうだけて死たりけり、其時ヨリシテ此の處を娘捨山ともふすなり、援又三人の姫君ハ都のそらを立て本園いそ壇らる、測名の宿とゆふ所にはしやすらいたましが、めのとあをゑの病死より姫君達はとほにくれ父家成様ハ我々の事をなげかれて、赤城山の奥にて空しくおなり被成しと何卒赤城山へたづね行、七めての事におんはかへさん拌せんものとかの地をさしていそき行、大屋の里と言所に一夜を明かさたまへケる、其時此の地ニ三泰大明神といおふ也、既ニ其夜もあけぬれば赤城山へといそぎける、漸赤城へたづね行何國におはかの有事ぞ、そこよこ・よとさまよいはふしきやそばの岩間より牛毛頭あらわれて山奥さしてあゆみ行、人々ふしきに思召跡をしとふて行にける、くだんの牛ハ其のま、に消が如クにうせにけり、去によつて此の所を牛石坂とぞ申也、扱ハ墓所ハ爰ならんとあららこちらと見たまゑバ

草木しげりし御墓あり、姫君遂ハ伏しおがみおがみしばし前後もわかぬおり、たちまち天地めゑとふし右大将家成公昔の御姿ありありと水の上にそらわれたまへ、それなるハ姫共か、我父家成や、邪見の母の計にしてさぞや浮目にあゑつらん、某ハ扱果て衆生を守らせんと十丈程の大

じやに召され、池の中いぞ入にける。人々かんるいきもにめゑしなごりおしやとおん跡を三拜し涙ながらに立いで、二ノ宮といふ所に住居をおして居たまゑしが元是仏の化身ニテ衆生をすくわん為めなれば、履中三年壬寅七月十五日に兄弟三人諸共に一ツ所にはかなくなりたもふ、かゝるおりしも野田・伊香保あなたこなたとたづねしがこに來り問ひければ「三人共にむなしくならたまゑしときくよりなみだにくれける、今はなげくもせんなしとおんきがらを取納メ、援それよりも兩人ハ更科殿へしこふしと事の次第を申上、都へ登りさんだゑし右之趣き言上」

皇帝ふびんに思召、前代未聞の事なれば其儘にも捨置れず右大将家成ハ赤城正一位大明神といわゑ申へし、又三人の姫共ハ二宮三社大明神といわゑ申へしとお、セ渡されけり

群馬県上野国南勢多郡荒砥村大字二宮之住  
本書は伊勢崎市立図書館所蔵のものである。  
赤城神社縁起は他に次のものが現在確認されている。  
(一) 調田希雄氏蔵「上野国赤城山御本地」(室町時代物語集) 所収  
(二) 白井永二氏旧蔵「上野国赤城山之本地」(東洋文庫文「神道集」) 所収  
(三) 稲川村女測竜光寺蔵「上野国赤城山正一位大明神御本地」  
(四) 稲川村女測竜塚西次郎氏蔵「上野国赤城山正一位大明神御本地」  
(五) 伊勢崎市立図書館蔵「赤城大明神実記」

これらについての詳細な検討は福田晃氏「赤城山御本地」諸本の伝承（大谷女子大学紀要第一号、昭和四十三年四月）にある。（一）（八）までの諸本は同稿による。

本資料は井田安雄所蔵のコピーを丑木幸男が筆写した。（一）内の註は丑木があつた。

#### 4 赤城従行（三十一歳）

題名 写本ノマ、但シ「玉能御声」ニ「安永六年丁酉、冬十月三十日、赤城従行」ト記シタル表紙ノ写シアレバ原本名ト考ヘラル。

範囲 自安永六年十月三十日至同十一月三日。

原本 現存セズ、「玉能御声」解題ニ「高山大人赤城従行、安永六年丁酉十月三十日よりおなしく十一月十九日に至るの記、冊子のかたち前図の如く、原紙四つ折、横本十二葉にして終る」トアレバ當時ハ所在セルコト確実ナリ。

写本 イ 静嘉堂文庫所蔵「高山仲繩紀行集」所収——幕末ノ頃常陸国筑波郡小村ノ長島尉信ノ筆写ニ係ルモノ、長島ハ高山彦九郎ノ友人篠又七ヨリ友人相良一雄ヲ介シテ借受ケタルモノト考ヘラル、小宮山楓軒藏書ノ一トシテ静嘉堂ニ移リシトイフ、校訂ニ於ケル異本トナス。

口 「玉能御声」卷十一所収一筆写徑路ハ長島尉信本ヲ再写ス。内容 横里ニ近ク而モ崇敬セシ赤城神社ニ詣アルタメ叔父持長藏正業ト共ニ登山参拝シテ帰宅スルマテノ記事ニシテ、「赤城行」ト併セテ参照スペキモノナリ。

赤城従行自安永六年十一月一日至同三日  
安永六年、丁酉、冬十一月朔日に赤城の神社を押し奉らんと正業叔父思ひ立給ひ我も従行の定ありぬ、これによりて十月三十日とくより起き

家人に旅の糧などした、めしめ叔父至り給ふを待奉りぬ、また夜半過る頃にて暫して趣告げける、我こたひのみにしもあらぬといね侍りても旅立時はねむることあたはす。（中略）

旅装しして叔父を待奉りけるに辰の時斗に則正を具せられ隠宅に到り給ふ、例の如く祖母公孟を賜る、我荷を負ひ出で立ち侍る、両家みな門外に送り給ふ、漆橋を経て由良村といみやなるを過ぎ大道へ出ツ、西方へ一丁斗ゆき店二三軒是より乾へさし細道へ入、稻荷の社を右に見正へ行き原二ツ経て脇屋に至る、観音を左に見島地にかゝれハ西にハ遠く信州浅間けぶりはなくて雪白々とみへ東ハちかく金山（中略）

小金井村の人家をすき笠掛野にかかる（中略）  
原の中程より左へきれ大原道、右ハ大間々の道大原の宿江出で、右に金性寺少ゆき左長建寺宿の左近江やといふ酒店に休ひ糧をひらき酒のみ時を移す、八ツ時頃宿の上左大湖道あり左に大原寺を見行左へ転し百頭村人一家三軒左伊勢石右ハ大間々桐生江の道なり、間の谷村を過北に大豆の岡を見天神山を右に見西農田へかゝりゆく、間の谷村ハ佐位郡にしてこ、ハ新田郡也、香林村へ到る是も佐位郡也、里つ、きて野村是も勢田郡也、武井村入口小鷹宮あり、小林村に至る、右石宮司の社是を過て左へ行き松林を乾に見其所に到れハ道の側に大岩一ツあり、松林に入猶乾にゆけハ勝村龍原寺南向也、門前の松敷樹其中三株すぐれて奇也、美なり、般若台の碑石大也、龍燈櫻三かい斗古木にしていとよし、大門閉ぢたり、洞宗にて酒山門に入を許さず、門入東小さき石橋を過ぎ小高き所に小堂みゆ、大門の脇に鐘樓在、庭に白椿樹當寺の名木と、又いうの大木三かい余有へし、叔父と、もに見出で月田村に出ツ、右に近戸大明神の鳥居有、こにたてる石に穴あり、又四角なる小穴をほりたるハ何の用かしらず、左畠中に古墳有何人の墓なるか大也、月田の人里をすき川あり精川といふ小野湖も流れ出、土人の曰、赤城の裾野今年六月始大水こ、もともと水の為に新谷川をなすと語る、川原の中新たに流のあとあり、是を過ぎ馬場村に至る人家南北に連なる、一尺余の溝里中を

流できよし、すべて脇の辺りとなたの流みないさきよし、赤城の山中より出でハ也、暮に馬場村の酒店に休み酒なし、旅中の興こ、につき客より持したる種のあまりを出し叔父とわから食して飢を救ふ、田家の旅行飲食に乏しき事常にかくの如し、此所より西少シ南へ下り四里前橋良四里花輪也、深沢へ出て行深沢へ二里とぞ、前橋へ、大湖へ出て行是る一里也、馬場を出苗か鳴是る三夜沢一里的ぼり也、苗か鳴石多く出ツ、水車の所を過石滝沢道也、左をなたらにのぼり又上りて下りて流れあり道者此所におろて石をつみ浮國氏のさいの川原にならぶ、我あやまりころぶ、叔父ハ我を以て前者の戒としてつまづき給ハす、暗夜やうやくにたとり一丁斗のはり赤城の大門に至る、大門を右へ上り石の華表六尺斗ニ、に頭巾をとりしして入土にこにかけしへらゆ、惣門に至又礼して入西講の社家板橋備後守が宅を尋て入足し浴室に上り主板橋氏出ぬ我こに宿ると杉下氏へ通し給へといへば板橋氏諾して告ぐ、湯に入て後杉下氏陶器に酒をた、へて到る、子山城は櫻村に出自ハ太々の講及び別社の事につき潔斎して居れハ要麿し難し、主板橋ハ族の事なれハ私宅に宿り給ひしと思忠心安打解給へといふ、かがあつきに感し酒を受けて赤城の別社を問ハる杉下氏曰、下大屋村子安明神產婦の祈を以今はん昌也、殊に松平千太郎殿信仰在且郷里の村民參詣し是る南三里斗是赤城神社の別社也、又赤城神社も南四里斗に二ノ宮在是も当社の別社にて年一度当山へみゆきあり四月辰の日十一月辰の日也、みゆき上りに八大阪柏倉へかる、因て柏倉に御腰かけの森といふあり、一丁五段の除地、下向の道ハ花か石といふを経給ふ、こにも御こしかけ田とて一畠十五歩の除地あり、秋稻未からざる時ハ稻の上に御腰を休め、柏倉昔ハ牧野駿河守殿領分の時ハ御こしかけへ十二俵の助力ありぬ、二ノ宮神主田所石見六谷田譲記別當ハ大湖二宮山玉藏院といふ、今は別當を放ちやめ社家唯一に壇したる故也、玉藏院ハ真言宗にて二ノ宮の実物鬼腹の玉とて名玉を納めたり、或時社家、社再興の為実物を開帳し侍らんと申に付かの名玉をひらく是も社家にとめて返さず、其後別當あまた、

ひ返し納めんと乞共返さす、且ソ曰、当社の実物を寺院の為に押領せらる今本に返る也とて返さす、遂に神主の職と成、又弁慶か羅刀也とて拂先三尺一寸成かあり、かの龜腹玉ハ龜のへら出しといふ、二ノ宮の社地佳也、參詣有へしと杉下氏語る、暫して封馬守殿帰る、我も叔父も座を通り侍りぬ、今日道の記悉く記さす、内申赤城行にむし、細谷村も大原へ三里大原と唐へ三里唐と三夜沢へ二里、今日三夜沢は着し頃ハ五ツ前也し、苗か鳴る暮れたり、社家板橋氏大權に茶漬焼しほを添て出す例の餅小豆にて煮たるも出ツ、其後飯に汁添出ツ、坐頭二人三絆をはとこす、叔父錢を賜ふ、終夜三絆にて眠ふ、板橋氏の宅庚申に後れ今夜待る也、今日ハ三十日赤城也、天氣殊にうるへし。

十一月、癸亥朔、五ツ時に浴し榜着板橋氏案内にて赤城明神宮へ詣、東社より先きに押し奉る、是東社の社家が案内故也、西社を押し末社こそとく拜礼し叔父をす、め西の方三丁斗神の硯石大サ二間半に五間斗上に水あるを見、西社の後杉の大樹十圍斗成、又子供未社さい銭を争ひとり且ツ半鐘をつかしめて銭をとる、板橋氏案内の時ハ淨衣袖長を着し社上に拝さしむ、かれハさきへ帰る、我杉下氏による他行也、我昨夜の礼を述一百銅をおとし物とす、九ツ過る頃立て滝沢の方へ趣く、叔父板橋氏へ南鎌一片をおとし物とし旅装し東社の脇も山をこえ東へ行川をわたり艮方へのほる、石のころびか、りたる所をすき右へ三丁斗入て下る、是る北へ川をさかのぼりゆく、去冬ハ九渡にて滝沢不動堂へ到りけるか此度ハ二十度斗あたりやうやく到る、是今年六月初の大水の故と覺ゆ、是より叔父と、もに大滌を見る、俗十六丈と称す、実は十四丈六尺七寸と聞へし、石をわたりこし難所なり、おとし物石上に置至る、行人のなきものか、る時にはよし、不動堂八丁にして滌あり、是より真北へさしゆく、是より南二里にして六ツ半斗苗か鳴に至る、途夜に入て若きもの二人にあふ、これハ滝沢にこの夜こもる人也といふ、苗か鳴の旧餘人吾妻左次右衛門所にやどる、三夜沢より滌沢へ一里半もあるへし、今日の記事も丙申赤城行に譲りて省く、苗か鳴より大屋座泰明神へ坤方へ一里半斗

夫5賀石山観音へ半里斗石山より坤方一里斗二ノ宮也、苗ヶ嶋5石山へ二里南也、二ノ宮ハ三里也、宿の主の祖先ハ新田由良氏の臣金山落城の、ち花輪へ越え暫住のちこに、に住すといへり、姓ハ東宮氏家内和睦にして一郷に富めり、家人の交いとよし、去冬宿し侍りまた今夜もこをもつてやとる（中略）



おねりの行列（龍神門へ向う各種団体の代表者たち）



おねり行事の行列（二之宮赤城神社）  
(阿久津京二撮影)

そこへ秋に二神体をおくつて行き、春になるとむかえに行つたというい伝えがある。春になると里へ出て農業を見る。とりいが終ると赤城へ帰るのでおくつていくのだ。これは農作業のはじまる時期とおわる時期にあたるという。おはえて櫻石へ行つたことはない。（二之宮）赤城神社のおきせかえ 六十年に一度壬子の年に二神体の神衣のおきせかえの行事がある。最近では昭和四十七年十一月二十三日にこの行事がおこなわれた。木縄をとつて、その日のうちにつむいで、織つて、それを縫つて、一日の中に仕上げるものという。神衣を縫つものは地元の年寄りの女人（若い女衆は体がけがれているというのでだめという）が三人。上・中・下位から一人ずつ代表のものが出て、三人でひとつのかみを縫つた。大きさは丈が一尺五寸くらい。材料はさらきない木縄（みざらしの木縄）。うらおもで同じあわせをつくった。白い着物を一枚と、その上に着せる四角のものを縫つた。

朝飯を食べてから仕事をはじめ、夜の八時ころまでかづつた。部屋をしめきつて、マスクをし、白い着物を着、エプロンをかけ、白足袋をはいてつくった。針や糸があだらしいものをつかつた。着せかえは、丑の刻に、巫女（わかない女人）が一人）でやつた。（二之宮）赤城神社の隕故者 むかし、二之宮の各組にはそれぞれ神社がまつつてあった。各神社にはその守り役をいた人たち（家）がいた。明治四十一年ごろ組の神様が赤城神社へ合併したために、それらの人たちも赤城神社の隕故者として、神社の行事のときには特別の役割を果すようになつた。赤城神社の隕故者といわれる人たちは、節分の年男を代々つとめている岩上源太郎家のほか

（以下高山彦九郎全集第一巻）

に、次の人たちである。

永井弁造家、長井光雄家、松井時次家、松井洋子家、岡盛太家、鈴木和久家。

このうち、闇家は「天神様」といわれており、天神宮の関係者である。

鈴木家は十二天様の関係者という。(二之宮)

三夜沢の小豆 この辺では、三夜沢の小豆は早く見えるという。小豆をにるとき、「三夜沢の小豆」といつてかきまわしながらにると早く見えるといつている。

「神幸のときに、三夜沢の赤城神社へ小豆料とし、お金をつんで行った。最近は千円である。(二之宮)

節分祭の年男 節分の日に、赤城神社で節分祭をする。そのとき年男になるのに、毎年岩上源太郎家のものと引きまっている。その理由は、同

家が二々苦ではないわゆる旧家であり、本家様の家であるからという。節分祭のときには、この年男が来ないと、とりの行事がはじまらないといわれている。

節分祭の参加者は、年男のほかに、神主、神社総代、自治会の役員、神社の縁故者などである。(二之宮)

赤城神社の春まつり 四月十五・十六日、この日が二之宮赤城神社の春の大祭である。祭りに先立つて、宮元の神社総代(四年交代)の家から神社まで、おねりという行事がある。時刻は十五日の十時から。おねりの行列は次のとおりである。

猿田彦太郎(一人)——笛・太鼓(笛一人、太鼓二人)  
一神官(一人)——自治会長——神社総代——縁故者、市会議員、各種団体の長

猿田彦太郎は、三十才代のお神楽師が紛し鉦をもって行列の先頭に立つ。道案内の役である。三音は、笙、横笛(りゅうとう)、ひちりきの順で、これもお神楽師がつとめる。三十才から四十才くらいのものがこの役をつとめるのが今までのしきたりであるが、現在は都合で六十才前後

のものがつとめている。笛太鼓もお神楽師がつとめている。太鼓は小だ

いに、しめたない。むかし、伊勢崎、波志江筑井などに頼まれて行くときには、三管に代って、この人たちがその役をつとめた。

行列は総代の家から隨神門のところまでねって行く。門のところでみ

こしが加わる。みこしをかづぐのはくちよう一人。これは白装束で、神社の縁故者といわれる人たちの中で、都合のつくものがつとめた。このときほかの神主も加わる。また、ほかの神社の総代のものも行列に加わる(各神団体の長のところ)。行列は参道を通って社殿の中に入る。樂

師のうち、三管のものは拝殿に入り、ほかのものは神楽殿に行く。みこしも社殿に入る。神主や各種關係の代表名も拝殿に入るが、それらの人たちは社殿の東側にすわり、神社關係の人たちは西側にすわる。このあと

と「祈禱がおこなわれ、約一時間で式は終る。

このあとお祭りがはじまる。(二之宮)

ご神幸 赤城神社には春と秋の二回ご神幸の行事がある。春は三月末の午の日に神様は出かけて、四月初の辰の日に帰つて来るという。秋は十一月末の午の日に出かけて、十二月初の辰の日に帰つて来るという。春と秋の二回、同じ問答の行事をしている。

当日の前の晩から明け方(うしみつき)にかけて、矢を射る行事がある。これを四方がためといつ。弓と矢は総代が前日に神社でつくった。

矢は千本つく。材料はカヤの茎(芯)。矢羽は低をきつてつくる。長さは十五センチぐらい。弓はクワセでつくる。大きさは二十センチぐらい。

弓は下宿と上宿に分けて射る。射るのは神主、矢持らとして助手が一人ついている。これは総代のものが毎年交代でつとめた。弓を射る時

間は丑の刻に神主がおがんでからで、夜中の十二時から二時までのあいだである。弓を射る場所は、神社の南側の東と西と南の道路に沿つて三方で、大体五百メートルぐらいのあいだである。はじめは神社の東側のトメバ(もとの内田医院の前)まで矢を射ながら行く。つぎに神社の西(上宿)へ同じように射ながら行く。その次に下宿(神社の南側で

（二之宮小学校の北側）へ射ながら行く。弓を射るかたちは、神主がひとりあらず、体の左右に斜下へむけて射る。弓を射る時間は大体二時間ぐらいかつた。むしから、この弓を射る行事に出くわしたものは、よくないと言っている。また、神様は、弓を射ているあいだに、ひとりで三夜沢の赤城神社へ出かけてしまうといつてある。このとき、神様が留守になるのでしめ縄を境内にはって、誰も境内には入れないようとしている。また、このときには、大声を出していいといつてある。しめ縄は神社の鳥居の西と東、五百メートルぐらいのあいだに張る。また拝殿にも張った。神様が出かけるときに、しめ縄を切った。

神様は、春の場合には、三月の末の午の日に出かけ、四月の初め辰の日に帰つて来る。早いときは三日ぐらいで帰つて来る。神様のはるときはひとりで行くといって、むらみんなれもついて行かない。神様が帰つてくるときにむかえに行く。神様が三夜沢の赤城神社へ出かけることをおのぼりとかご神幸という。

むかしは神様のおむかえには、むらの人が大勢でついていた（氏子が全部ついて行った）。行列は、二宮神社という錦の旗を先頭にして、そのあとに白袋束のおみこしがつぎ（わらじをはいてる）のかつぐこし（長持のよながたち）が続く。そのあとに氏子がおともでついて行った。こしをかづぐものは一人で交代でかついた。最近は十五名が車で行く。各位（九位）から代表が一名ずつ、總代が一名、神主一名、自治会の總員三名。

（「神幸」のコースは、大胡街道をのばつて行った。荒子—荒口—泉沢—大胡—柏木—三夜沢の順にのばつて行った。大胡では近戸神社へ寄つて休んだ。近戸様の拝殿にみこしを供えて、大胡の神主がおがんだ。その後お供で行つたものは、整列しておがみに参加した。（おはらいをしてもらつた）。大胡の町を行列が通るとき、大胡の人たちはおさいせんをあげてくれた。町の人たちは、「神幸の行列が通ると、『二之宮さんのが通る』といった。

柏會にはオコシカケ（お腰掛）というところがあり、そこに石宮があり、また石があつて、こしをのせるようになつてある。そこで行列は休んだ。地元の阿久沢家の人たち（十五、六人ぐらゐ）が出て、接待をしてくれた。重箱にこちそうを入れてもつてきてくれ、酒さかなでもなしてくる。ここには二之宮の赤城神社の水田が一反五畝ほどあり、また、山林が二、三町ほどあつて、その管理を阿久沢家でしている。そのほかにも関係があつて、阿久沢家で世話をしてくれるという。ここで三十分ぐらい休んでから三夜沢へむかう。

三夜沢の赤城神社へつくと、はつてあつたしめを神主がきる。こしを神殿に入れて、代表者だけが拝殿にのぼり、祭典に参加する。（ご神体には神主以外は手をふれさせなかつた。おともに外で整列してまつてある。おがみがおわると、直食となる。これにはおともの人たちも参加した。直会が終ると神主の家で昼食をこちそうになつた。むかしはぼたもちをもらつて食べた。そのあとその日のうちに同じコースを通して帰つてくれる。帰りには、どこへも寄らずに帰つて来た。

二之宮の神社へつくと、神主がご神体をおがんで本殿へまつりこんで終りとなる。

もとは、行列について行つた人には夕飯が出た。

秋の場合も行事の内容は同じである。ただ行列についていくメンバーは交代する。

（「神体（矛と幣束をこしの中に入れたもの）は春と秋の二回、三夜沢

の赤城神社へ行つたり来たりすることになる。（二之宮）

山開き 五月五日は三夜沢の赤城神社の祭日、五月八日は赤城の山開き、大洞の赤城神社の祭日。この辺の人たちは、むかし、五月五日は三夜沢の赤城神社へおまつりに行つたといつて、現在は行かない。五月八日の山開きには大洞へは行かない。（二之宮）

二宮赤城神社の夏越の行事、毎年七月三十一日に、二之宮赤城神社で夏越の行事がある。むらではこの行事をナゴシとよんでいる。三、四日

前にチガヤをとつて干しておくる。チガヤをとりに行くのは当番のもの。どこからとつてきてもよい。

祭日の当日（神社総代（組から一人ずつ、九人）が出て、チガヤで繩をなす）。輪は生のチガヤでつくる。大きさは長径・短径がそれぞれ四尺と三尺ぐらゐ。生竹を一本立てて、その間に輪をゆわいつける。輪が出来あがると、むかしは茅の輪のところで神主が来ておがんだが、現在は坪殿の中でおがむ。このときだけは、神主は南向きになつておがむ。おがみがおわると、神主が先にたつて、輪の中に十字に張つてある繩をはさみができる。神主が先頭になつて輪をくぐる。そのあと姥代やむらの役員やむらの人たち（子どもが多い）が輪をくぐる。氏子が全部出て輪をくぐりをするのが本来の姿であったが、最近は神社のとしよりとか子どもがくぐる程度。

輪ぐりは厄病よけといふ。はやりやまいにかられないようによく行事である。

輪ぐりが終ると、茅の輪をはずして子どもにかつがせて、新堀までもつて行く。太鼓をたたきながら行列をつくつて行つた。ながす前に神主がおがんだ。むかしは、宮川へもつて行つてながしたといふ。

輪をながし終つてから、世話人たちは神社へ帰つてきて、なおらいをして行事は終りとなる。（二之宮）

十五夜まつり 赤城神社の前に八幡さまがあつた。十五夜まつりは八

幡さまのおまつりであつた。明治の末ごろまで行なわれていた。

まつりの七日前から準備をした。馬の手入れをしたり、身を清めたりしていた。この間は男だけにてきをし女の煮たものは口にしなかつた。

十五夜のまつりは、「宿をねりあるく」行列と馬の競走をするやぶさみ（流鏑馬）の二つの内容にわかれていた。明治の末ごろまで行なわれていた。二之宮全体を三つにわけ、一の的、二の的、三の的という組をつくつていた。この組み合わせは代々一定であった。家の組み合わせは家並ではなく、とびとびであった。一の的の家はむかしからの家とされていた

ようだ。それぞれの的のグループの中で順番に宿の家をさめ、当番の家でごちそつをつくつて出した。その宿のことを花宿といった。宿では身上が狂うくらいかかりがしたという。当番の家で馬を出した。馬のいない家では借りて出した。それぞれの的から一頭ずつの馬がでた（計六頭）。行列は大名行列のようなもので、一の的、二の的、三の的の順に行列をつくつた。

馬繼場といふところが、それぞれの的ごとにきまつていて、一の的馬繼場は、とめばといわれているところで、宿の一番東側にあるところであった。二の的馬繼場は、神社の南で、学校どおりといわれているところで、二之宮小学校の裏に鳥居があったところがあり、下大門といふところであった。三の的馬繼場は、宿の西の端で、磯部家の裏のあたりであった。

各馬繼場には、それぞれ馬つなぎのかかりがいた。一の的と三の的馬つなぎの係が、出場の用意が出来ると、一の的のところへ用意が出来たから是非出てくれと、両方とも七度もむかえに行つた。一の的では六度もことわり、七度目にはじめて出てくることになつていて。これを七度のむかえといつた。

馬は各組とも「頭ずつ出たが、一の的の馬のうち、一頭には、ご神体がのせてあつた。その馬が先頭に立つて八幡様の前にならんでもまつりになつた。

行列は三つの組とも同じくちであつた。行列の構成は人体つぎのとおりであつた（むかしの行事であるので話者により若干順序がちがつている）。

ぞうりもち（一人）——はさみばこかつぎ（二人）——しゃくまもぢ（二人）——やもぢ（二人）——むこ（その年にむこになつたもの、人数は年によつてちがう）——まんどう（一人）——つま（二足馬主四人）——むこはもんづき、はおりはかまじなくて弓矢をもつてついて行つた。行列に参加するものは、それぞれの位のおまつりのかんばんきもんを着

た。一の的から○、二の的なら○というように、しるしがついていた。

馬にはやぐらをゆわいつけて、そこへあととりの十才以下の子どもをのせ、馬の口もち（大人）が馬をひいた。そのほかつりもんなど参加者は小学校へ出ている子どもたちであった。先頭のぞつりものが「やっこらせえのよいよい」というと、あとのものがそろつて同じことをいた。

行列は神社の前の宿を西から東へ走り、同じところを三まわり行方が終つてからやぶさみ（流鏑馬）の行事があった。馬を宿の西から東に走らせる行事であり、これをやぶさみといった。馬を走らせるところは、神社の西の田中商店のところあたりからとめばなべのあいだであった。馬は一の的は、「一馬はご神体をきのせているので出場せず、二の的、三の的から二頭ずつ合せて五頭の馬が出場した。馬を走らせる道には、まつりが近づくと、石を入れさせないようにしていった。また、出場する馬はまつりの前にはけいこをしたり、石山観音（佐渡郡赤堀村）へおまいりにつれて行つたりした。走るときには、一つ的の馬は、二の的、三の的の馬より先に出ていた。ほかの馬に絶対に負けないようになつていた。馬にのるのは、このときはおとなであった。競走がすむとこのまつりは終りになる。十五夜の日の昼間の行事であった。

なお、それぞれの的で、宿へよばれていくときには、大豆とお金もつて行つた。その金額については、家ごとにべつにきめてあつた。むかしの人はなしては、「二之宮のこのおまつりの日には、四里四方のひとよせといつた」という。この日によそでなにか行事をしようとして、も、差しとめてさせなかつたほどであるという。（二之宮）

### 八幡宮祭典議定ス

明治三十八年八月廿六日の一統協議之上左之通り議定ス

#### 第一七条

祭典器具一式明年八月中ニ修繕ヲ了スル事

#### 第一八条

次号ノ花宿ハ本日抽籤シ今後ハ抽籤ヲ要セズシテ順次相勤メ申スベク

事

但シ左項ノ通り連名ハ其年毎ニ繰り下ゲ記載スル事

第三祭

花宿ヲ補助スル為メ左記ノ通り大豆及金銭ヲ花作り当日各自持參スル

但シ駆馬祭典ヲ執行スル時ハ大豆及金銭ヲ出シ引馬祭典ヲナス際ハ

大豆ノミヲ持參スル事

大豆六升及金拾錢（三名連名・氏名省略）

大豆四升及金拾錢（五名連名）

大豆三升及金拾錢（四名連名）

大豆二升及金拾錢（五名連名）

年々令拾錢ツ、（二名連名）

計大豆七斗四升

金參円九拾錢

第四条

先重馬ハ一統ノ持子神馬ハ花宿持チニテ飼料の為し引馬ノ際ハ的

ノ中ヨリ出馬し大豆武斗及金七拾五錢ヲ平均謝礼ヲナス事

但シ万一二モ臨時ノ起りタル時ハの一統ノ協議ヲ開キ尚ホ駆馬ヲ行

う際他ヨリ一頭位入シタル時に金五拾錢ノ謝礼ヲ渡ス事

第五条

注連切札トシテ金拾錢散米升ヲ馬爪切料トシテ金拾錢ヲ含ムモノト

ス

第六条

金壺円の馬口附四人ノ謝礼ニ金參拾錢ヲ奴六人ニ平均分与ヲ為スモノ

トス

第七条

金拾円也無利足ヲ以テ祭典ヲ道具ニ附渡シ其翌年ノ花宿ニ順次送金ス

ルモノトス

似シ当花宿主前後宿主ノ外ニ立会人一人以上ヲ要スルモノトス

第八条

基本金ハの一統協議ノ上ニアラザレバ如何ナル場合ヨリスルモ分取スルハ勿論仕用スルコトヲ得ズ

第九条

花作リ祝トシテ凡ゾ一人ニ対スル冷豆腐巻挺ト見積リテ參拾挺及御神酒巻升ヲ要スルモノトス

第拾一条

石山祝トシテ金六拾錢ヲ両度ニ馬掛リ四人ニ渡スモノトス

右条々之通りの一統協議之上決定致シ候上ハ本年ヨリ末番ニ至ル間ハ如何ナル事情ヲ生ズル共變更スル事ヲ得ズ因テ茲ニ捺印スルモノ也

一之的連名

六弥太 馬次郎

富田 喜三郎

下境 竹藏

長井 善治

遠藤 楠治

下井 才吉

永井 元吉

長田 長治

水井 久四郎

轟井 敬太

轟井 安次郎

轟井 喜四郎

轟井 左藏

轟井 石藤

轟井 境

轟井 境

轟井 境

大正拾壹年八月參拾壹日  
冠婚葬祭二閑スル  
宮西組總会決議

一納戸トス  
以拾戸トス  
其通り改正ス

下境善四郎

井政吉

四五吉

福太郎

勝次郎

善平

元恵

伊三郎

團六

下川

小暮

富田

長鳴

下田

永井

所勇

所吉

所八

所八

花宿  
筆耕名  
六弥太 馬次郎  
下境 石藏(二之宮)

一協議員組モ組直し各振舞組ヲ武分ニスル事

一埋葬穴掘ハ宮西組中共通宅回四人宛順番ニ務ムル事

一葬式ノ清淨ハ庭場ニ德利（二合位）壱本穴掘ハ從前ノ墓地ニ贈ル事ヲ

廃し膳部ニ德利（二合位）武本冷酒ニテスル事

埋葬穴掘順組（氏名省略）（二ヶ宮）

## 6 産泰詣之事

今村の故人 青木安藏

本編の筆者は、前橋田町辺より出立ちて勢多郡荒砥村の産泰神社に詣でしを、當時流行せし往来風の文章に綴りたるものにて、其の道順、沿道の神社仏閣の所在、地理の一班も窺われ、又産泰社の流行神たりし様なども見えて面白きものなれば木瀬村上増田の岡田家より借観して写し取り、以てこゝに掲ぐ。（曹国生）

新玉の年の始の晨には女子小供の取々に手穂羽つく脛ひに連て勇みし初牛の行衛も見えぬ花暉、桃の節句の暖や翻祭の戲れに遊び暮せし行樂におもひ立候産泰詣之事、待れば遠き十五日、いつよりも天気快晴にして朝陽赫々たり、水魚の友達申合、酒肴弁当等取持せ、思ひ思ひの衣装花のごとく身を筋り、日と諸共に出たつて先前惣領鎮守連雀町八幡大菩薩を伏拝み、夫より伊勢屋鋪是者大日本國の守護神、勢州渡金の都山田に御垂跡なさしめ給ふ天照御神、内外の御宮を此所に移させ給ふを參拝し、並に祇園牛頭天王に参り、夫より本町鍛冶町白銀町田町片貝町天河町同新町十八郷復町壹町横町紹星町豊川岸細沢町仲間町愛宕町田新町向町、是等は聞のみにして桑町より板屋町に憩り広瀬川を打渡り諫訪町を出放て向の方は栗鳴と申す村なり、左の方は三俣村行程に浩々たる田圃に一字の石宮殿あり、白山大権現と申て諸々の幽の頃立頗する時は治せずと言ふ事なし、是は片貝村と上泉村両村の其間に挟まれ

て江木村の分地にて不思議成事なり最早上泉天神橋に就にけり、是は昔司平大臣の惡逆をもって苦相蒸土太宰府へ配流被為し御時、召仕の童子流致して此處に乗りし其折柄、君秘藏せられしは芬木といへる梅を一粒持參し植育て花咲春を待て徒然を慰める、彼梅開けば其香敷里に匂ふ、依而諸人是を賞讃す、此木のもとに天神宮を祭り、元のことく仕えしとなり、故に天神橋と名付給ふ、當時当所の祭礼にささらをい當、其唄に春くれは天神橋の梅の花蒸るとうたひ舞しを今の世までも取用ひるとかや承ると委しい訳は赤坂や卒に三筋の道ありて右は伊勢崎中は行玉産泰道事答もんも上泉の果は今夜と寝入塚、曉音茂る芝原に暫く休み、夫より如意寺境内に立せ給ふ地蔵尊を伏拝み、寺沢川の流れを渡り堀の下より堤を通り、江木村の鎮守六所大明神の朝日の松は除所に見て地蔵峠を打越て、行ば名に負ふ富田村、酒田ヶ谷で芹菜摘小供遊の時花咲、優き声の美敷さ、間に赤城の麓なる湯沢と申すより流出する荒砥川をば徒渡、荒口は素通りに、行ば程なく荒子村、鶴岡原の猫草に、ちいとも隨は欠ずして、急とされど日は闇て戻りの人に大屋村、除立られぬ程近くなりぬれば、振鉦の音幽にきこえ、貞前の旗は露風に靡き、參詣の貴財は成立る土煙のに翻轉たり、所の番人は非常を禁め、夫からからと斧を振、乞食非人は袖袂に縫て喜捨を請ひ、盲人手なへ足なへは、諸ぬ者を御助あれと嘆願す、茶屋屋には九屋純菴麦大平卓袱床具伊丹諸白御取肴芋煮鍋焼鴨南蛮諸国名葉刻御御存料羅煮餅汁粉餅京御菓子品々浮布真粉煉羊甘砂糖餡頭米餡頭鉢附御茶盃糖板名物御体所と思ひ思ひの鑑板を掛ならべ、茶屋の女は前垂髪に身を約ひ御体あれと呼懸る御山の脛ひ誠に畏動のことく、手水石には大願成就年号月日國處家苗実名を印せし手布巾は人に知られて乾間もなし、御鳥居の額は紺地に金の御勅筆なり、永代常夜の石燈籠は油流れて地を浸し、燈の緒には我勝の手が余り、老衰足弱は取得がたし、只一心不乱に拝札し、指方より奉納の絵馬提灯は向拝殿に置余り、繩宣は衣冠にて三種の御秩を読上げ奉

る、隨身の役人は安座御守を差し給ふ、參供參錢は秋風に木葉の散るごとく、御宮の御造営は金銀殊玉を以て彫たれば天日に輝て煌々たり、御本社の後は巖石峨々として高く聳、一片の雲の上に峰、岩の間の松の古木は緑の色を含て枝を垂、誠に姑射山の風景もかくやらんと一覽し、踵を転じて金毘羅大権現と夫婦妹背の御守神を伏拜み、程なく太々御神樂の役人御装束にて樂器を携列座す、既に儀式備り御神樂を奏し奉る、御講中の座席には紫繻緋の幔幕を張り、皆々謹而拝覧す、御社内の結構舞有事共言語に迷がたし、日頃の念ひ心願成就あな目出度希札。

文政五年午正月

右之書 落字誤り等多有之處、惡筆の字性もたらぬ耻かしさ、見  
る人・舌の添作し、何れのことも免じ給ふべし。

青木 安 藏

(上毛文化第七卷第一号、昭和十七年一月発行より)

今井村青木安藏殿より寄贈 王塙田文庫

千手觀音（大沼）二宮大明神待室前下  
地藏（地藏應）

元和九曆鷹首大湧歎十月吉辰

願主 六谷田左衛門応業繁  
前長井内藏之介繁次

長井喜左衛門尉

鉄師大工

筑州天命住太丑五郎左衛門

御代官小野田勘右衛門尉

國定村光明寺林永

慈眼院宝昭

大泉坊重尊

泰住坊晚口

西倉山坊春光

御代官水沢内膳正

山王堂村福島与右衛門

新井村長谷何徳右衛門尉

笠十郷小松何村秋山将監尉

松井右近尉

八坂村阿久津藤左衛門尉

赤石郷武士弥右衛門

泉女 各々諸旦那衆

一、竜頭二〇センチ

二、錦身 一メートル七九

三、錦円周七〇・五センチ

四、五乳粒式

## 二宮神社鳥籠名

奉寄進見鐘一口

上野州勢多郡赤城山神宮寺

正一位

虚空藏（小沼）

ホドシダイ	77	民家	274	ヤンメ	71, 81																																																																																																																																																																						
ほど灰	11	むかでまぶし	48	ユニゴリ	231																																																																																																																																																																						
ほどばらい	173	麦作	32	湯灌	174																																																																																																																																																																						
ホマチ	112	ムコイチゲン	165	縫	.....																																																																																																																																																																						
ホリハライ	62, 97	ムシバ	82	嫁入り	164																																																																																																																																																																						
盆がら	216	むじな（つき）	74, 236	嫁ごの大裏さま	203																																																																																																																																																																						
盆棚	212	ムシロ	59	妖怪	237																																																																																																																																																																						
ポンブ	90	ムシロオリ	297	用水溜井	95																																																																																																																																																																						
盆迎え	215	ムツゴ	283	夜遊び	118																																																																																																																																																																						
ま 行																																																																																																																																																																											
マイ玉	201	麦ふみ	32	夜バイ	159																																																																																																																																																																						
マイカキ	48, 197	むら	86	蚕蚕	46																																																																																																																																																																						
松鶴り	186	村仕事	96	蚕蚕信仰	50																																																																																																																																																																						
マグサ税	97	むらん足	96	夜具無尽	105																																																																																																																																																																						
枕 直し	173	村役	91, 92	寄り合い	94																																																																																																																																																																						
マクラダ	35	めいがんさま	133	よりまぶし	48																																																																																																																																																																						
マクリ	109, 154	命名	152, 239	ヨチクレエ	104																																																																																																																																																																						
馬子唄	266	メカゴ（めかご）	20, 81	ヨミズヒキ	36																																																																																																																																																																						
摩多利	132	メカイ	47	ヨバイ	118																																																																																																																																																																						
まねひき	38	メズラ	15	ヨナベ	27																																																																																																																																																																						
間引き（ミソツキ）	144, 149	メダマゾウリ	8, 59	夜泣き	154																																																																																																																																																																						
マブシ	47	メッヤ	83	ら 行																																																																																																																																																																							
まぶしの種類	48	メンガ	71	豆うらない	200	モグラブサギ	34, 222	理詰	300	豆まき	200	守っ子帯	8	療法	78, 79	マユ玉	17, 143, 194	木縄	11	六算（除け）	79	まりつき唄	264-266	モモヒキ	9, 8	ロクア田	35	まる火（ビ）	187, 227	や 行						マルビヲタク	183, 194	ヤカガシ	200	マルブキ	23	やきもち地藏	143	ワカイシ	118	マンガ	44	ヤキモチ	145	ワカイシ組	98	マンリキ	32	ヤキモチ子	114	若水	187	見合	161	ヤキボ	33	若者組	98	三河万才	267	ヤキモチ	15	ワクサ	56	水げんか	37, 116	厄年	155	枊屋	58	ミコシ	125	厄おとし	158	和諏	140, 270	道しるべ	66, 64	巫師（様・尊）	138, 139	和諏講	105	ミズゴ	181	ヤケッペ	83	ワタクリ	295	ミズシタ	97, 89	ヤケド	78	ワタマシ	22	水下七ヶ村	116	星号	114	ワタリゲエ	23, 197	ミズッパリ	40	八坂まつり	209	わら加工	297	水質	37, 93, 97	星敷稻荷	20, 134	わら仕事	60	水口	36	星敷妻子	115	ワラジ	59	ミナクチアカリ	97	山仕事	60	わらじ親	115	みそ・しょうゆ	18	山始め	191	ワラジヌギ	115	道削り	96	山師	57	藁にゅう	45	道普請	96	山開き	207, 318	ワレ	94	三峯講	107	山番	93			ミノ	59	ヤシナイミズ	37			三輪講	110	ヤネツキ	207					ヤンダジ稻荷	206, 129		
豆うらない	200	モグラブサギ	34, 222	理詰	300																																																																																																																																																																						
豆まき	200	守っ子帯	8	療法	78, 79																																																																																																																																																																						
マユ玉	17, 143, 194	木縄	11	六算（除け）	79																																																																																																																																																																						
まりつき唄	264-266	モモヒキ	9, 8	ロクア田	35																																																																																																																																																																						
まる火（ビ）	187, 227	や 行																																																																																																																																																																									
マルビヲタク	183, 194	ヤカガシ	200	マルブキ	23	やきもち地藏	143	ワカイシ	118	マンガ	44	ヤキモチ	145	ワカイシ組	98	マンリキ	32	ヤキモチ子	114	若水	187	見合	161	ヤキボ	33	若者組	98	三河万才	267	ヤキモチ	15	ワクサ	56	水げんか	37, 116	厄年	155	枊屋	58	ミコシ	125	厄おとし	158	和諏	140, 270	道しるべ	66, 64	巫師（様・尊）	138, 139	和諏講	105	ミズゴ	181	ヤケッペ	83	ワタクリ	295	ミズシタ	97, 89	ヤケド	78	ワタマシ	22	水下七ヶ村	116	星号	114	ワタリゲエ	23, 197	ミズッパリ	40	八坂まつり	209	わら加工	297	水質	37, 93, 97	星敷稻荷	20, 134	わら仕事	60	水口	36	星敷妻子	115	ワラジ	59	ミナクチアカリ	97	山仕事	60	わらじ親	115	みそ・しょうゆ	18	山始め	191	ワラジヌギ	115	道削り	96	山師	57	藁にゅう	45	道普請	96	山開き	207, 318	ワレ	94	三峯講	107	山番	93			ミノ	59	ヤシナイミズ	37			三輪講	110	ヤネツキ	207					ヤンダジ稻荷	206, 129																																						
マルブキ	23	やきもち地藏	143	ワカイシ	118																																																																																																																																																																						
マンガ	44	ヤキモチ	145	ワカイシ組	98																																																																																																																																																																						
マンリキ	32	ヤキモチ子	114	若水	187																																																																																																																																																																						
見合	161	ヤキボ	33	若者組	98																																																																																																																																																																						
三河万才	267	ヤキモチ	15	ワクサ	56																																																																																																																																																																						
水げんか	37, 116	厄年	155	枊屋	58																																																																																																																																																																						
ミコシ	125	厄おとし	158	和諏	140, 270																																																																																																																																																																						
道しるべ	66, 64	巫師（様・尊）	138, 139	和諏講	105																																																																																																																																																																						
ミズゴ	181	ヤケッペ	83	ワタクリ	295																																																																																																																																																																						
ミズシタ	97, 89	ヤケド	78	ワタマシ	22																																																																																																																																																																						
水下七ヶ村	116	星号	114	ワタリゲエ	23, 197																																																																																																																																																																						
ミズッパリ	40	八坂まつり	209	わら加工	297																																																																																																																																																																						
水質	37, 93, 97	星敷稻荷	20, 134	わら仕事	60																																																																																																																																																																						
水口	36	星敷妻子	115	ワラジ	59																																																																																																																																																																						
ミナクチアカリ	97	山仕事	60	わらじ親	115																																																																																																																																																																						
みそ・しょうゆ	18	山始め	191	ワラジヌギ	115																																																																																																																																																																						
道削り	96	山師	57	藁にゅう	45																																																																																																																																																																						
道普請	96	山開き	207, 318	ワレ	94																																																																																																																																																																						
三峯講	107	山番	93																																																																																																																																																																								
ミノ	59	ヤシナイミズ	37																																																																																																																																																																								
三輪講	110	ヤネツキ	207																																																																																																																																																																								
		ヤンダジ稻荷	206, 129																																																																																																																																																																								

ナタギリ薬師	138	ハタキマエ	56	ヒナ市	68
名づけ親	114	ハタシマワリ	58	ひな送り	204
ナツマンガ	281, 283	ハダッコ	157	ひな祭り	203
七つ坊主	76, 155, 156	ハタマワシ	57	火の番	97
七草ガユ	191	八十八夜	124, 206	日ばた	12
ナナツナキハンドリ	39, 84	初市	191	ヒバアシ	16
ナベカリ	201	初午	201	火ぶせの神	132
成り木責め	196	初エビス	198	ヒモカワ	15
苗代(ナワシロ)	39	二十日正月	197	火もどし	83
ナンジョ	147	初節句	155	電よけ	76
NANDO	147, 174, 275	初穂	45	百万遍	216
ニアガリ	34	八朔	99	百日咳	81
ニザン(のちざん)	144, 150	八丁じめ	207	肥料	42
二十二夜講	104	ハッポーサン	113	肥料代	29
二十三夜講	104	ハッシュタン	12	ヒロメキ(グルメキ)	295
ニボウトウ	14, 15, 58	ハッシュタン取り	27, 41, 42	拾い親	115, 156
ニナイモッコ	290	馬頭観音	143	ブク	152
入定墓	182	羽根つきうた	266	冬ざく	33
ニワトコ	193	ハネツルベ	21	富士講	109
人形芝居	260	ハモ	290	不幸田	35
ネエマ	39	腹帯	146	ふだん着	9
ネエーラ	53	ハラミオナン	145	ニツアカリ	45
ネギヌタ	167	針供養	192, 202	ブツツケ	308
年始まわり	188	ハルゴ	29	ブッチメ	63
年代記	94	春駒	70, 267	不動さま	142
農事暦	34	株名講	108	舟乗り大黒(薬師)	122, 123
農休み	44, 97	春祭り	205		135, 136
ノゲ	253	ハンゲ	41, 45, 84	不祝儀	91, 110
ノゲアイ	35	ハンケ様	208	フリマンガ	281, 283
ノシアゲ稚	295	半夏生	207	分家	12
ノゾッコミニ	118	半夏の田植	4	ふんどし	8
ノチザン	144, 148	番長	145	ヘソノオ	148
ノツヅケ	60	ハンドリ	13, 39	へつつい	25
ノポート	118	ハントウ	92	ヘッタ	146
のりつけ	13	はんてん	7	ヘビ	19, 34
は 行		ハンゲンドン	16	ペベズキン	240
梅花桜天神	130, 299	パンミズ	37	ペベがんのん	229
ハエオ織	198	ヒイヌキ祝い	44	ヘヤ	25
バカド	61	ひきわりのかんかん	14	弁当	19
ばかむこの話	233	引きこ	261	痴情	80
馬喰	54	ヒキユズリ	93	ホーソウ通り	80
バケヅ	86	ピク	60	ホーソウ櫻	80
馬耕起	38	ヒザナオシ	169	ホーゾーみせ	125
八朔	217	ヒシタボ	10	ホウチボウ	33, 288
はしか	80	ヒソカエシナノカ	145	棒うち唄	263
橋供養	64, 65	引っぱりもん	269	豊岡	七三
機織り	12	七テンボウ	162	方言	240, 241, 301-304
機織唄	267	ひとだま	172, 237	本家・分家	114
機織り子	105	ひとかたけ	13	ホコアブリ、ツツコ	8
機神様	134	ヒトリマンガ	281, 283	ぼたもち	17, 28, 103
				宝登山の講	109

節分祭	317	溜井	95	デングリケーシ	13
セツチンメエリ	144	田休み	43	電灯	25
節句歳暮	225	タメシ	13	天道念仏	204, 202, 218
せなご	111	タワラゴシヤイ	43	天王様	130, 131
セリタタキ	192	タワラッベシ	156	テンガ	102
膳ギリ	100	中氣	79	ド	61
千手觀世音	141, 230	チカズキ	166	トオリ	29
染色	11	地藏様	139	とうかのよめとり	235
洗濯	13	近戸神代	128	道祖神	122, 195
先達	109	チガヤの繩	213	ドウモト	29
そうでん祭り	54	カ石	118	灯籠	98
そだぐね	110	力比べ	269	トウロッ子	157
ソダ	60	力ごめ	148	トウロウツケ	98, 130
相続	111	地芝居	205, 254~257	灯籠連	126
葬制	171	乳づけ	154	棟渠おくり	22
葬列	176	チブク（チボク）	150	十日夜	184
た 行		地まつり	20	十日夜	219
タアラツコロガシ	68	ちゃんちゃん	7	通し水	89
ダイドコ	274	ちゅうや帯	7	冬至	225
田植	15, 40	帳箱渡し	93	盗難除け	107
田植え唄	262, 263	チョウバジ	77	土方	29
田植え着物	10	チョイチョイ着	10	毒消し	116
田植の食事	41	チョウチン	47	とげぬき	83
大家族	113	茶	17	年男	186
大黒柱	25	長命	121	年神様	185
太々神樂	125	チョウナ	283	年神棚	185
大神楽	267	ちょうどまげ	10	年取り	200
太子講	105	チョンマゲ	11	トシク神	185
太々講	105	チンケ	78	年始	115
大根の年取り	220	貨機	57	年祝	157, 158
大正用水	97	告げ	173	トボロ	148
竹ぐね	20	つけもの	19	どぶろく	17
タコづき	20, 22	筒粥	109, 189	ドボシ	33
代参（人）	108	ツジュウダンゴ	16, 46, 223	ドブハイ	91
タスキ	9	ツットコ	145	土用	208
タチブルマイ	108	ツトッコ	145	富山のくすりうり	116
タヅクリ	168	ツバキハッケ	73	トリアゲバアサン	146, 151
タツの日	41	つば山	134	トリイダ	35
脱穀	43	辻念仏	184, 209	トロホリ	283
タテドウシ	171	ツミザマ	290	トリムスピ	165, 167
七夕	211	ツメッコ	15	ドンドン焼き	194, 306
タナモンゲエシ	170	つるし柿	17	な 行	
タノモンゲエシ	184	デーテック	125	直食	318
田草取り	41	デカワリ	199	ナガシモト	146, 147
田の神様	134	デキモノ	78	中休み	43
タバコ	17	天神講	104, 199, 225, 304, 305	夏越の行事	127, 222
だいばよけ	53	天神様	130	なごし	127
大八車	131	寺の田植	41	仲人	145, 162
推肥	42	デビタリ	92	梨の品種	55
魂よび	172	天水田	36	ナダレ	47

ゲコウイワイ	108	サクたて	192	しまい正月	199
下駄	8	座繰り	295	ジマツリ	21
ケダイ	8	姫びき	172	シモグイコク	72
ケデ	58	里神楽	251	じゅばん	7
ケブルイ・スナブルイ	288	サツマムロ	19	十八日ガユ	197
講	99, 105, 109	ザッコスクイ	62	十五夜	217
洪水	116	サナ	32	十三夜	218
講中	107	サナブチ	33	十五夜まつり	319
香典	115	サナブルイ	45	助成講	106
コウリヤン	14	ザル	86	定使い	94
庚申講（様）	99	猿廻し	268	城峯講	107
庚申塔（待）	101, 102, 103, 222	さんし	146	シノギ	13
庚申の日	17	山王様	129	正月櫛	.....
こうじ味噌	18	三十三枚よせ	156	職人	58
賓影山	134	産泰様	122, 124, 144, 147, 184	ショウズカバアサン	142
虚空藏と鏡	299	産泰講	105, 206	ショウユ組合	18
コケノカゴ	47	産泰詣	322	上棟式	20
コザ	25	産泰道	64	食料野草	16
五社稻荷	124, 129	サンテコ	262	ショウウブモチ草	206
コジツコメ	185	三番ザク	33	ショウズカバアサン	142
小正月	193	産婦の食事	149	ジョリン	285
コジョハン	13, 14	さんぶく土用	52	姑つとめ	161
五十人講	107	三宝荒神	87, 209	霜よけ	76
ご神幸	317	三夜様	105	しょうぶ（酒、風呂）	207
ゴゼ	268	サンヤヅキ	20, 22	ジリヤキ	15
子育地藏	139, 209	三夜待ち	105	ジリヤキ地藏	16, 209
こたつ	26	祝儀	110	汁かけめし	74
伍長	91	四十九のダンゴ	175	シログラ	290
甲手（コウデ）	82	十二講	103	シロムギ	32
コデナワ	59	ジューハツテ	125	次郎の一日	159
コト八日	202	数珠廻し	212	代搖子	39
子どもの遊び	271	ジュウロウタ	59, 290	ジランボ	84
コビル	41	シャクシ	39	シワス八日	223
子待講	105	シャクシヅキ	177, 283	農災	90
小麦の品種	212	シャクトリひろい	50	新宅	111
コモタズ	145	石尊様	209	水車	24, 43
五目飯	104	シャバズレ	12	水害	116
こやし	28	社會	31	水利	35, 89
コヤシバ	33	社日講	101, 103, 204	ストメ	84
ゴリョウさま	132	ジャンボン	41	すじまい	223
コワメシ	74	武三番叟	242, 248	すすはき	225
コワリやきもち	7, 15	ジギョウ	22	ススリだんご	7, 16
婚姻囲	144	字かくし	308	スクイアミ	62
さ 行		芝くれ	37	村主の清水	228, 229, 300
裁縫	12	ジダグリ	130	すけっと	111
祭文	68	ジダンバニユウ	37	スネツキリ	32
祭文語り	268	シツケ	121	すましけ	14
魚トリ	61	じなんば	111	セイコン水	37
サカヤキ	156	シビブトン	25, 147	赤飯	17
作柄	35	しびれ	80	セキつくり	97
		シブクレ屋	58	節句	153

オジヤ	14	神楽	248	吉凶	73
お産見舞	151	かくらん	81	絹笠様	122, 125, 201
お節供の料理	17	かくねっしょ	307, 308	木の実	16
オソウデン祭り	51	かけ膳	1, 9	甲子大黒	136
オタキアゲ	109	カケナ	16	忌木	26
オタナアゲ	145	かさかけつ子	157	キマラ薬師	138
お棚さがし	190	笠薬師	138	軒いれ	93
おたばこほん	10	貸し梅伝説	231	着物をたつ日	12
オタナサゲ	197	カタアゲ	13	共同炊事	40
オトウカ	234	家畜の種類	50, 51	共同田植	40, 111
オトカッピ	235	片葉の段	299	共同農社	110
男蝶・女蝶	168	片袖	13	共有地	94
オッカア	108	カツガレタ	118	行商	69
おつけ	14	ガットン	119	行商人	64
鬼っ子	156	かてめし	14	キユウジッコ	125
鬼虫	308	カドイル	144, 145	キュウリモミ	131
おなめ	14, 18	カドツケ	267	キヨウカタビラ	174
おねり	251	カナゴイ	123	きりぼし	17
おばご	111	カナゴキ	33, 43, 288	金費黒沼	300
お七夜	151	カナババク	153, 154	キンマラ薬師	77
オヒキ	19	かねつき祝い	129, 168	食初め	153
オヒヤクドフミ	145, 172	カネソキ田	35	釣さし	308
オビンズル様	134	カノエサルの日	100	くぐり	80
あふ(札)だ	108	カブリギ	181	くさ	83
オブスナ笑い	154	釜しき	19	草刈り	97
オボタテメシ	150	カマド	25, 278	グシ	77
オボヤキ	129, 144, 152	カマカケ	45	グシ(ゴシ)餅	20, 22
大みそか	226	カマギッショ	240	クズカキ	27
オマチニヨウボー	165	カマコマゼ	33	蒸	78
お松迎え	225	釜の口あき	208	蒸売り	70
大麦の品種	32	カミゴクシ	84, 148	口がため	163
オメガンサンマ	71	雷様の大鼓の棒	231	クダマキ	58
表座	252	粥占	74	区長引綱	93
オ山ヅキ	66	カユカキ棒	183, 193, 196	クチボソ	61
オシカ	113	カラ	32	クツツキアイ	161
御歳講	109	カラス	34	組長	91
か 行		カリハライ	60, 97	倉開き	192
貝	20	カリヌリ	175	ぐりぼう	53
カイガリ	95	家例	113, 188	クルリ棒	281
開懸	29	川干し	61	クレコモ	36
かいこ祝い	50	かんけい	86	幕の市	68
蚕カゴ	47	乾燥薯	17	クロ	42
蚕櫛	292	ガンヅメ	285	クロクワ	281
蚕種	47	観音寺	136	クロヌリ	39
蚕びょう	46	カンベ山	229	桑市	50, 68
蚕の病氣	47	祇園囃子	261	桑こきぼうちょう	292
蚕ヤスミ	47	祇園祭	304	クワバラマンノウ	281
ガエロッタ	308	ききせかえの行事	127	桑ぶるい	292
かき根	20	北上五社稻荷	129	桑の品種	四八
ガキボトケ	181	義太夫	257	桑の仕立方	49
		狐つき	235	芸人	69, 267

# 索引

## あ 行

赤城さま	122
赤城信仰	122
赤城神社	127
赤城從行	314
赤城神代のおきせかえ	316
赤城大明神実記	309, 313
赤城神社のおのぼり	222
アガリハナ	278
アキアゲ	45
アキアゲ	34
アキマンガ	281, 283
アキツ田	108
秋葉様	132
朝仕事	60
浅間講	105
足入レ	144, 145
あしただ	84
アシナカゾーリ	8
アズキガユ	17, 195
あそび	116
東街道	64
あせかき	38
アツケ	83
あつけあたり	81
アツタカ山	72
アナップサギ	35
アナツボリヤン	177
アナバシ	91
アナマワリ	176
あばれ	118
アプラッポリ	97
あぶらもち	218, 223
雨乞い	37, 76
アマサケマツリ	132
阿弥陀井戸	299
阿弥陀仏	142
雨正月	38
アメブルイ	288
あめ屋	69
新盆	214, 215
拾(あわせ)	12
アンコロ餅	100
安産の神	146
イイツギ	94
いきさし	82
生き盆	215

イキポンブルマイ	170, 215
イキヌキ	292
イザリバタ	295
イジメ	154
石山觀音	197
いじやりばた	12
伊勢講、伊勢參り	108
市	68
一人前	160
イチバングサ	42
一夜かざり	226
イツケ	112, 113
イツソン	94
井戸	21
糸とり	11
福荷	129
福荷まつり	223, 224
福の品徳	34, 35
イヌツバジキ	177
イヌの日	100
いのりくぎ	77
位牌わけ	180
イブシ飼い	27, 47
イブルシ	60
イボ	82
イモホリマンノウ	281
イヤサカ	168
いろり	25
イワタオビ	146
隠居	111, 112
インキヨメン	112
氏子藤代	93
うちうち	114
ウデマンジュウ	15
ウデマンジュウを作る日	17
うどん	15
ウブスナガラ	162
ウブタテ・サマ	144, 150
産湯	150
馬市	54
馬エー	27
馬のエー返し	54
馬のくせ	53
馬の飼料	53
馬のワラジ	53
馬屋	51
うまやこやだし	52
ウマノクツゴ	59
ウマヤマエ	278
梅若	204
梅干し	18
ウメズメ	145
裏座	252
うろこのもの	13
エイ	15
エエ	110, 111
エーノウブルマイ	163
エカキ	294
エナ	148
エビス講	14, 183, 222
えぼ	83
エンガワ	276
おいだし念仏	176
オイハガ	63
近江商人	116
オーシメナイ	225
オカオガクシ	185, 186
オカシラツキ	57
お施りがえ	193
おかげ	15
オカナエカキ	285
お神おくり	218
オカマ様の下げ穂	45
オカマノルスンギョウ	184, 219
オカリヤ	66, 108
オガン	146
オガンショバタシ	109
おきりこみ	14
オキバリ	61, 62
オキンマラ	71
オクンチ	97, 99, 127, 128 184, 217, 304
おこあげ餅	50
オコウコ	19
オコト八日	223
オコマヤ	25, 148
おさえ	14
オサイセン	125, 130
オサキ	74, 77
オサゴ	15, 146
オサンブリ	16, 40, 44
オサンベヤ	278
オシメ	226
オシャリ	47
オショウパン	168
オシロイ薬師	123, 137, 138

群馬県民俗調査報告書第十七集

前橋市城南地区の民俗

昭和五十年二月二十八日印刷  
(非売品)

昭和五十年三月三十日発行

編集兼発行者  
群馬県教育委員会

前橋市大手町一丁目一ノ一

発行所  
群馬県教育委員会事務局

印刷所  
朝日印刷工業株式会社  
前橋市元總社町六七  
電話 50 四三六七